
翼を失った竜と血塗られた聖女

小鳥遊 輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翼を失った竜と血塗られた聖女

【Zコード】

Z2295S

【作者名】

小鳥遊 輝

【あらすじ】

過去に魔王と呼ばれる存在を打倒し、後の世で「勇者を救つた緋色の聖女」と讃えられている少女がいた。その少女の名はセリーナ・A・アインスフィアと言つ。セリーナは、五百年後の世界に魔王を復活させようとした者たちに、魔王が死ぬ寸前にセリーナにかけた封印を解かれ、五百年後の世界に復活し様々な出会いを通じまた世界を救うまでの物語です。なお、セリーナは最強設定です。

登場人物紹介（前書き）

人物紹介です。

登場人物紹介

セリーナ・アリア・アインスフィア

種族：人 真祖の吸血鬼

年齢：20（見た目は10歳くらいの少女）

性別：女

魔法：古代魔法・召喚魔法

召喚：ゼアノート（詳細はまだです）・フェンリル

特殊：全てを記せし禁断の書庫 ロストライブライ

真祖の吸血鬼で緋色の聖女様。

魔王ゼノン討伐隊で実際に魔王を倒した英雄。世界的にも有名だが死んだことになっている。

現在、背は低い。髪は二つ名の通り緋色。目は赤銅だが戦闘時は灼銅の色に変わる。

性格はベイに強制されており、一国の姫と同等の受け答えができるが、比較的好戦的で戦闘時はかなり非情であり、種族のせいか死に対しあまり頓着しない。

両親に禁呪である種族転換の魔法を17の時に受けている。その時、妹であるサフィにもかけようとしたため両親を殺し、彷徨つているところをベイに助けられる。

ベイシス・クリストフ・ラブリオール ベイシス・クリストフ・アインスフィア

種族：人

年齢：22（魔王討伐時）・すでに死去

性別：男

魔法：古代魔法

特殊：絶対王権 大いなる言葉

魔王ゼノン討伐隊のリーダーで勇者。

スフィア王国の建国者にしてラブリオール王国の最後の王子。性格等は比較的温厚。他人のために怒れるタイプで誠実な人物。すでに亡くなっているが、魔王を倒したセリーナを見つけた人物としてや、世界の種族すべてを平等に扱つたことからすべての種族から英雄視されている。

生涯、ノーブレスオブリージュを貫いた。その為、彼には民に絶対なる命令権のあるスキルである絶対王権を得ていたがそれを私利私欲に使うことなく民を守るためだけに使われた。

セフィリア・ティス・アインスフィア

種族：人 守護精靈

年齢：11（魔王討伐時） 511（現在）

性別：女

魔法：古代魔法

特殊：現在を記せし禁断の書庫 セカンドライブラリ

緋色の聖女セリーナ・A・アインスフィアの妹でスフィア王国の初代王妃。

性格は姉同様強制されているが、腹黒い。

背は165cm程度でスタイルもそこそこ。髪は空色で目は茶色。姉のことが大好きで姉を悪く言つたりする人は大嫌い。

セリーナが封印されたときに宿つた現在を記せし禁断の書庫 セカンドライブラリ から情報を読み取り禁呪を使用。現在まで生きており、王都メアスフィアのスフィア城の奥に隠れ住んでいる。

禁呪を使った結果精霊となり国そのものと契約して国の守護精霊となっている。そのため、首都のメアスフィアは陥落することなくこの500年を過ごしている。

ルーキス・メフィスト・アインスフィア

種族：人

年齢：18

性別：男

魔法：召喚魔法・現代魔法

召喚：楯の精霊セフィール・剣の精霊ヴァルア・炎の精霊イフリート・水の精霊ウンディーネ・風の精霊シルフ・土の精霊ドリアード・雷の精霊ヴォルト・氷の精霊フロスト・光の精霊アーリアル・闇の精霊ティアリアル

特殊：精霊の加護

スフィア王国の第三皇子だが、王位継承権の序列は一位。

性格が非常に温厚でやさしい。その為、生きている兄一人と姉一人を抜いて継承権一位を持つている。

見た目は背が高く引き締まっている。髪は空色で瞳は青紫。

生まれたときより精霊に好かれていることから多くの精霊の加護を受けている。その為か魔法は苦手で、召喚契約を結んだ多くの精霊達と戦うスタイルをとる。

ミア・シア・カシミア

種族：人

年齢：17

性別：女

魔法：現代魔法・融合魔法

特殊：魔眼（人の情報を見る）

商業國家力シミア王国の第二王女でルー・キスの婚約者。

ルー・キス同様、性格は非常に良い。人当たりも良く結構な人気者。背はあまり高くないが160程度でスタイルは非常に良い。髪は長髪の茶色、瞳は黒。

幼いころよりルー・キスが好きで念願叶つて婚約者となつた。

人の情報を見ることができる魔眼を持つが、魔眼で見れる情報は名前・出身地・所属国等の割と普通の情報のみだがスパイであるなども見破ることができる。偽名すら見抜ける。本人としてはあまり盗み見るのも悪いと思い滅多なことでは使わない。

登場人物紹介（後書き）

随時更新していくます。

現在までの出演キャラまでできていません。
がんばって書きますがご容赦を…。

第零話 ありふれた魔王の終わり（前書き）

はじめまして小鳥遊輝です。

本当は初めてではございませんが^ ^；

皆様が読んで楽しんでいただけるような作品ができれば幸いです。

第零話 ありふれた魔王の終わり

「ゼノン。あなたの野望もいるもでよ」

少女がどこか誇らしげにい言つ。ただ、少女はほぼ満身創痍の様相であり、ゼノンと呼ばれた男はどこか嘲笑つよつて少女に答える。

「その状態でどうするのだ？勇者はすでに我に倒され、その他の仲間たちもここに来るまでに倒れておる。そなたが我に勝てる要素などどこにも見当たらぬな。諦めるべきはそなたではないのか？」

そういう彼に少女は言い返す。

「べイだつてあなたに勝てるかわからないのにここに来るほどバカじゃないわよ。最初から私をここまで連れてくるのが彼らの目的であつてあなたを打ち倒すのは最初から私の役目よ」

少女はそういうと戦闘態勢をとる。ゼノンも同じように戦闘態勢へと移る。

「そうか。だが、我に勝てるものはおらぬよ。我が魔王と呼ばれる理由を知らぬとこいつとはなかろう？」

「わかっていないわけないでしょ？でもね、それを何とかできるからこそここに私は来たのよ」

ゼノンはやはり嘲笑う。そんなわけはない、何故自分が魔王と呼ばれるのか。

それは彼に一切の魔法が効かないことと強靭な肉体によつほとん

どの物理的な攻撃が通らない」とによるものである。

「ふむ。では、やってみるがよい。これでそなたが倒れれば勇者達は我に負け、世界は我に刃向うこともなくなるであろう」

そうして戦いは始まつたかのように見えた。だが、次の瞬間には戦いは終わっていた。

少女がゼノンの後ろに立ちその首筋に噛みついていた。

「な！？まさか……貴様…吸血種か！！」

ゼノンの驚きの声に少女は笑いながら答える。

「そう、あなたに魔法が効かないことは誰でも知っていること。でもね、直接体内に魔法を流し込んでしまえばどんな種族のものだって効く。それを知らないはずはないわよね、魔王様？」

少女がそう言つとゼノンの体が光りだした。

「くそつっー！離れるー！」

ゼノンは焦り少女を引きはがそうと必死になつてゐる。しかし、一度噛みついた吸血種を引きはがすなど不可能に近い。

そして、しばらくした後少女は自分から離れた。

「これで終わりよ。破滅の術式を打ち込んだから半刻もせずにあなたは死ぬわ。まあ、私もただでは済まないけどね」

そう言つ少女の体はただでさえ小さかつたのに先ほどより縮んでいた。

するとゼノンは大きな声で笑い始めた。

卷之三

「なにがおかしいのかしら？」

少女は問う。ゼノンはその後もしばらく笑った後、語り始めた。

「なるほどな。なるほどなるほど。つまりはそなたは最初から我と相討つ覚悟であつたということか」

「 そうよ。打ち込んだ術式は破滅と呼ばれるものだわ。そんなものを零距離で撃つてとしてもあなたには通じない。そしたら私の魔力は尽きて私たちが負けるのは目に見えるてる。そんなことはわかつた。だからこそ、こんな方法でしか勝負を決めることにしたの。でも、この方法での結末になるのを知っていたのは勇者であるベイと妹のサフィだけよ。

「これは、私が死んでもいいなんてことじやないけど、それでこの世界の未来が救われるならいいの。彼らは止めたけど私はいいのよ。どうせ生き残つても永遠に近い時間を生きることなんて私には耐えられないもの」

そう言うと少女はその場座り、魔王ゼノンに向けて言った。

「さあ、私を殺しなさい。今なら私を殺せるわ。すべての魔力を使い切り、足りなかつた魔力を自分自身で補つた後の真祖ならば人間にでも殺せるわ。ましてや、あなたは魔王よ。できないはずないわ

よね?」「

少女はその場で目を閉じ刻を待つた。しかし、いくら待てどその時は来ない。

しばらく経つた後、ゼノンはこう言った。

「そんなことできるか。私は負けただの敗北者だ。こまちり、そんなことあがけるか!! 死にたいのならば勝手に野たれ死ね!! 我に殺された者としてでも名を残すつもりか!!」

少女はビックリし思わず眼を見開いてしまった。

「やつか…。魔王にも義の心はあったのね……」

そうして西社はだまり時のみが過ぎゆき、魔王の体が消え始めたとき突如として魔王が言った。

「死にたいようだつたなそなたは。しかし、そんなことをせてやるものか。永き時を苦しみぬむがよい。それが我が最後に落とす绝望なり…!」

そう言つと少女の足元に魔法陣は発生した。それは、少女の体を飲み込みながら魔王と共に少女を消してゆく。

「それは封印だ。永遠に世界の狭間でさまよい死に続けながら生き続けよ!! 死よりも恐ろしき永遠の絶望を味わうがいい!! はつはつはつはつは……」

そう言つと魔王は姿を消した。

少女は、

「あああ。最後の最後で詰めを誤つたかな……。」めんねべイ、サフィ。もう会えないとは思ひがち、いつかきっとまた戻つてくるからね……。」「

少女はさう言つて姿を完全に消した。

じつして魔王ゼノンの起こした戦争は幕を閉じ、世界に平和がもたらされた。

一人の少女の死によつて……

第壹話 魔王召喚の儀式と聖女の復活（前書き）

書いてますが、おつじです。

時間がかりつつも細々と続けることになるのかなあ……。

第壱話 魔王召喚の儀式と聖女の復活

ここはどこだらう。

ずっとここにいたような気がするのに何がどうだかわからない。

私は誰なのだろう。

大きな何かを成し遂げたはずなのに今は誰だかわからない。

なんでこんなところにいるのだろう。

私をここに追いやつたあいつの声は思い出せるのに、なんて言つていたのか全く思いだせない。

大切な何かを守るために戦つてたはずなのにその何かが思い出せない。

そんな思考の繰り返し。いい加減に、眠つてゐるであらう私は目覚めたいと思うけれど目覚め方なんてわからない。

いいや。そもそも、目覚めながら眠つてゐる。眠りながら目覚めている。そんな矛盾が矛盾でないこの場所でどうすれば良いのかなど全くわからない。

だから、私はここに永遠にいるんだろう。少しつと思つ。

生きながらにして死んでいる。死んでいながら生きているこの場所

で…。

+++ + ++

ある世界のある場所では今、魔王を復活させ、その力をもつて世界を手に入れようとしている愚か者たちが集まり玉座の前で奇妙な儀式が行われていた。

黒衣を着た男や女が入り混じり、大きな壺の周りで奇妙な言葉を並びたて、今か今かと儀式の成功を夢見ている。

大きな杖を持つた恰幅の良い太った司祭のような人物が躍り出て、壺の前で何かを唱え始めた。

「ああ、魔王よ。復活したまえ。そして我らにその力を与えたまえ」

つまり彼らは魔王を復活させ、力を手に入れようとして、この危険な地まで赴きこのような儀式を行っているのだ。

今、彼らのいる場所は、今は亡き魔王ゼノンが倒された場所であ

り、魔王の城の玉座の間であった。

魔王の城付近は危険地帯であり、 黒の庭園 と呼ばれる強力な魔物が住み着いている場所の真ん中に魔王の城は存在する。

ここを越えてくるに当たり彼らは当初の人数のおよそ五分の一まで減つっていた。それでも膨大な数の人間がこの場にいる。

彼らが何を考え、何を欲しているのか。それは、簡単な言葉で言えることではないが、つまるところ世界に絶望し、「この世界を魔王と共に自分たちの手で壊してしまおう」とか、大きな権力や金を欲し「力を得て国を作り、豊かな生活をしよう」などの腐った人たちがつまらぬ希望を叶えんと魔王を復活させようとしているのである。

「おお、魔王よ。復活したまえ。そして我らにその力を与えたまえ」

長い時間彼らはここでこのように祈り続けている。一心不乱に。

「ああ、魔王よ。復活したまえ。そして我らにその力を与えたまえ」

そして彼らの待ち望んだ時はきた。壺からは光が放たれ何かを示す兆候が現れ始める。そして彼らは狂喜乱舞する。

彼らの思惑とは全く違つて存在が出でてくるところだ。

+++ + ++

「こ にいた少女は一筋の白い光を見つけた。

少女にはそれが何かはわからなかつたが こ にこることに気が付いてから初めての変化だつた。

だから少女はその光のある方へと進んでいく。

「こ にいた少女にはその光は温かいものに感じるのだろうか。目を細め、その顔は笑顔に満ち溢れていた。

そして少女は光の前にたどり着き、その光に触れた。

そして少女は忘れていたすべてを思い出し、こ つまり魔王が自分に掛けた封印の空間より抜け出した。

+++ + + +

少女が気付いたとき、そこには大きな壺の中だった。

しゃがんでいたよう立上ると田に映つたのは大量の黒衣を纏つた愚か者だった。

少女が壺より出てきたことに気付いたのか愚か者たちは再び大きな声を張り上げ、周りの者たちと喜びを分かち合つてゐる。

(ええっと、何この状況。全くわからないんだけど…。私何かしたのかな?)

少女は彼らがなぜ喜んでゐるのか全く分からなかつたようで首をかしげ状況を把握しようとしている。

そこに大きな杖を持つた恰幅の良い太つた司祭が出てきて言つた。

「おお、魔王ゼノンよ。我こそはお前を蘇らせし者なり。わが名はアルベルト・ディーン・バッハなり。我に従え」

司祭がそういうと周圍にいた者たちは静かにかしづき少女の前に歩いてくる。

(「こいつ何言ひてんの？魔王ゼノン？なにでこじり、あのいけすか
ない私を封印しやがった魔王の名前が出てくんのよ）

そのように少女が思つてゐると、同祭は

「聞こえておらんのか？もう一度言つた、魔王ゼノンよ。我こそは
お前を蘇らせし者なり。わが名はアルベルト・ディーン・バッハな
り。我に従え」

馬鹿馬鹿しい。少女は思つた。

（つまり、こいつらはゼノンを復活させて力を手に入れようとした
わけだ）

少女は瞬間に理解すると、周囲にいる阿呆共に向けて言葉を放
つた。

「何を勘違いしてゐるかわかんないけど、魔王ゼノンは死んでゐるは聞
違いなくね。そして、私はゼノンなんかじゃないわ」

少女が事実を述べた瞬間、愚か者たちは一斉に騒がしくなる。

それを同祭は時間をかけ治めると、少女にこう問いかけた。

「では、そなたは何者だ？」

問い合わせられた少女は答える。

「私はセリーナ・A・アインスファイア。ラブリオール王国より派遣された魔王討伐隊の隊員。つまり、勇者の仲間よ」

第壹話 魔王召喚の儀式と聖女の復活（後書き）

文章が稚拙です。

3人称で書くのは難しいです…。

第3話 残酷な聖女（前書き）

一部魔法の発動呪文を変更 [11 / 04 / 25]
一部段落等を修正 [11 / 05 / 18]

第3話 残酷な聖女

「私はセリーナ・A・アインスファイア。ラブリオール王国より派遣された魔王討伐隊の隊員。つまり、勇者の仲間よ」

セリーナがそう言った瞬間、そこにいた者たちは凍りついた。

セリーナは何が起つて居るのかわからず、しばらく黙ることにした。

黙りつつも今自分のいる場所に気付き、とりあえず壺から脱出して辺りを見回し、玉座に座った。

すると、凍りついていた黒衣の集団が我を取り戻し、一斉に騒ぎ始める。

「セリーナ・A・アインスファイアだつて！？」 「なんで魔王様じやなくて聖女が復活を！？」 「何故だ！？何故だ！？魔王様復活のはずが！？」 「馬鹿な！？何故聖女が！？」 「こんな筈は…。」「嘘だろ…。嘘だよなあ！？」 「どうして…？どうしてなの！？」

次々と飛び出してくる言葉の数々。するとあの恰幅の良い司祭アルベルトが騒ぎを鎮めた。

「静まれーい！..静まらんか！..」

司祭はその場を鎮めた後、玉座に座る少女に向けて言葉を放つ。

「その玉座は魔王様のみが座ることの許される場所なり。貴様のよ

うな素姓の知れぬものが座つていい席ではないわ！！」

そう言つとアルベルトは持つてゐる大きな杖をこちらに向かへた。
そして何かを口ずさみ始めた。

「【現るは始原。其は始まりを示す火なり】」

何を言つていたのかセリーナには理解できなかつた。だが、目の前
の司祭アルベルトの頭上に火の球ができたことで表情を変えた。

アルベルトが口ずさんだのは呪文。俗に言つ魔法を発動させるための手段だ。それは、選ばれた者だけが行使できる奇跡の術。それをこの男は使つたのだ。

「驚いているか？ そうだろう。だが、苦しむ暇など『えてすらやらん。死ね！！くらえええい！！ファイアーボール！！』

アルベルトの頭上に展開していた火の球は打ち出された。向かうのはセリーナの元。

迫る火の球にセリーナは短く、しかし、意味のある一言を口ずさんだ。

「【消えろ（デリート）】！！」

その言葉が紡がれた瞬間、セリーナの元に迫っていた火の球は消え去つた。

何が起きたのか。アルベルトにはわからなかつた。自分の放つたファイアーボールは確かに少女の元へと向かつて飛んで行つたはず

だ。

なのにもかかわらず、ファイアーボールは少女の元へとたどり着くことなく消え去り、何事もなかつたかのように玉座にしおこんと座っている。

確かにアルベルトの起こした魔法はちゃんと少女に向かつて行つた。しかし、少女が何かを言つた瞬間ファイアーボールは消え去つた。

彼らの中には何が起つたのか理解できるものはいなかつた。

そもそも、彼らの中に魔法が使えるものはいくわづかである。しかも、その知識は魔法学校で習うことのできる初級中の初級の魔法だけである。なので、少女が起こした現象を理解できるほどの知識を持ち合わせているものなどここにはいなかつた。

「全く。危ないわね。思わず消しちゃつたじゃない」

セリーナは思わず魔法を使つた。さすがにくらつても何の影響もないが眼前に突然火の球が迫つてきたり誰だつてビックリする。それでとうさんに火の球を消した（・・・）。

使う魔力量が半端ではない存在削除の魔法を…。

しかし、セリーナがそれでなにか体に不具合を起こしたりはしていなかつた。そもそも、絶対的な魔力量が違いすぎて勝負にすらならないのである。

「何をしたんだ貴様！？」

「簡単な話よ。否定して消した。貴方達！」ときが私を打倒し得ることは万が一にもあり得ないことだけ」

セリーナは種を明かしたが、それを理解できているものは一人もない。

「消した？ そんな魔法はないはずだ……」

「そうだ。そうだ」と、後ろにいた黒衣の集団が口をそろえて言っている。

セリーナは思つ。なんて馬鹿な集団だらつと。

「魔法は奇跡を起こすものよ。その魔法という現象で説明できないものはない。つまり、人の思い描くことができるすべてのことは魔法という事象で説明できる。だから、そんな魔法が存在するわけがないというのは凝り固まった考え方ね」

セリーナは懇切丁寧に説明してやつた。簡単なことだ。というよりそれが当たり前だった。

魔法は奇跡の技術である。何時、誰が、どのようにしてこの魔法という奇跡の術を完成させたのかは謎であるが、この魔法という技術において説明できないものはなくなつた。故に、魔法とは奇跡の技術なのである。

「どうしたのかしら？ もう終わり？」

セリーナはアルベルトを挑発するように言葉を並べた。

「終わるものか！死んで、そこからどうでもいい……皆のものがあやつを殺せ！！」

アルベルトがそう言つと黒衣の者たちが次々と武器を取り出し始める。中にはアルベルトと同じように杖を持ち出し呪文を唱え始めた者もいる。

「そう。まあ、いいわ。殺される覚悟のある奴だけかかつてきなさい。その覚悟がない奴は戦う価値もない！！」

セリーナはそう言つと立ち上がり、空間に手を突っ込んだ。そこから取り出したのは無骨な一本の大剣。先端が垂直に曲がったまさに狩るための剣。

「そつそつ言つておくわ。貴方達みたいのを放置して、本当に魔王に復活されると困るから全員殺すつもりだから」

セリーナがそつ言つた瞬間、戦いは始まった。いや、戦いではなく虐殺が始まった。

そう、勝負になんて一切なつていなかつた。

セリーナは考えた末、最後にアルベルトと名乗った司祭を殺すことを決め、黒衣の集団から片付けることにした。

考えなしに向かつて来る男を右腕に持つた大剣で袈裟切りにする。

その一撃で男は左の肩口から右の腰辺りまで真っ二つに切り落とされる。血が飛び散りかかるが気にせず、次に向かってきている人間を左に持った大剣で水平に切り、これまた真っ二つにする。

それを見ても、黒衣の集団は怖気づいたりせずに向かってくる。

「そうでなくちゃね。かかつてきなさい殺してアゲル」

そこからは本当に虐殺としか言えない光景が広がっていた。

セリーナは素早く動き回り次々に黒衣の人間の死体を量産していく。あるものは首を切り落とし。あるものは四肢を切断したり。また、あるものは脳天から真っ直ぐに切り下ろし殺したりした。

まさに一方的、黒衣の者たちが放つ魔法はセリーナにはあたらず、味方にあたつたりしている。

そうして、殺し、殺し、殺し続けアルベルト以外のすべてのこの玉座の間にいた人間はこの場にはいなくなつた。

「さあ、どうするのかしら？他の人間は全員死にましたよ？」

地獄絵図が広がっている。人間からただの肉塊になり下がつたものが広がっているこの空間でセリーナとアルベルトは対峙している。

「関係あるものか！！人ならまた集めればよい！！貴様のような正体の知れぬものを放置するよほど危険だ！！」

そう言つと魔法を起動させる。

「【噴き出すは魔炎。顯現せしは焼き尽くす業炎なり。我は業なる炎を背負いて全てを燃やしつくさん】－！ムスペルフレイム－！」

発動させたのは火の上位呪文。その炎に狙われたものは必ず灰となると云わしめた最強クラスの呪文であつたが、

「ふうん。よくわかんない呪文けど火の魔法が得意みたいね。でも、効かないよ。【すべてを守りし絶対の盾】！！」

セリーナの発動させたのは絶対防御の盾の魔法。すべてのものから使用者を守るその盾に守られたセリーナにムスペルフレイムが届くことはなかつた。

一つの魔法による勝負は見ずともわかる。阻まれたムスペルフレイムは消え去り、無防備に立つアルベルトだけがその場に残された。

「嘘だ……そんな馬鹿な……防ぐことができるはずがない……」

アルベルトは自分の魔法が防がれたことにパニックを起こし、なにもせずただただ突つ立つてゐる。

「確かによく練られた魔法だつたけどただそれだけ。制御がなつてない。まあ、どちらにせよアイギスを貫けるほどの威力はなかつたけど」

感想を述べたセリーナはゆっくりとアルベルトに近づいてゆく。

「来るな！－来るな！－！」の化け物め－！」

必死に逃げようとするアルベルト。だが、足がまるで動かないまるで何かにつかまれているかのよう。

「化け物であることは否定しないわ。でも、醜い欲望をなすがままに垂れ流す貴方のほうがよっぽど化け物に見えるわ」

ゅうくじゅうくじ近づいてくるセリーナに半狂乱になつて叫ぶアルベルト。もはやアルベルトには逃げるすべもなく、立ち向かう気力も残されではいなかつた。

そして

「さよなら。もう一度と念つ」とはなことと思つわ

そう言つと、大剣を振りかぶり振り下ろした。

アルベルトの体は裂け血を噴き出している。

「ふう。疲れた」

セリーナはその場で座り込み、今、自分の置かれている状況を把握するために考え始めるのだった。その、血に塗れた服のまま。

第3話 残酷な聖女（後書き）

内容が稚拙すぎるのかなあ……。
もっと精進したい……。

第参話 黒の庭園 とセントーの体（前書き）

説明の回です
ほとんど進展しません。

第参話 黒の庭園 とセリーナの体

思い出せたのはゼノンを倒し、消える寸前に封印をかけられたところまで。それ以降のことは一切覚えていない。というよりも封印されていたのだから覚えてるほうがおかしいのかな。

そう思い直すとセリーナは城を出た。空は暗く、夜になつているよつだ。

ここには、魔王ゼノンの住んでいた城の外。この場所はこの城が立つずっと前より最悪の地と呼ばれていた。魔王の城が建つてからここは魔王の城を守る庭園として 黒の庭園 と呼ばれるよつになつた。

黒の庭園 は冒険者ギルドが定めている魔物のランクがA以上しかいない危険地帯で、立ち入るのは「その命を覚悟せよ」と言われているまさに最悪の地である。

人間が滅多に立ち入らないこの地の植物には希少価値の強いものも多いため、冒険者がそれを求めて立ち入ることもあるが無傷で帰れることは絶対になく、生きて帰つてこれる確率もまた一割以下という極悪の地なのである。

そんなところを鎧も何も装備していないセリーナが歩いていれば魔物たちにとつてはかつこうの餌にしか見えない。

なのにもかかわらず彼らはセリーナを襲わない。襲うはずがない。襲えば自分たちが死ぬことが分かつていて以上襲えないものである。

普通の場所で育つた魔物と違いく多くの強力な魔物が跋扈する 黒の庭園 で生き抜くためには自分の力を過信せず、相手の力を見極

めることに特化しているためである。

そんなことは露も知らず 黒の庭園 を血塗れの白いワンピースだけを着て歩いている。

今、彼女が考へていることは先ほどの魔王の城での戦闘中に感じた違和感である。

「さつきの呪文は一体何なんだろうな？」

セリーナは先ほどの戦闘で司祭が使った呪文^{スペル}が自分の知っているものとは全く違うものだった。

彼女^{スペル}が知っている魔法とは基本的に概念を固定、発動させるための呪文自体が短く発動まで時間が余りかかるないが術者本人の魔力や実力が顕著に出るもので発動は出来ても威力が全く出なかつたりするのだ。

しかし、さつきの司祭が使っていた呪文^{スペル}は明らかにおかしかつた。あの司祭から大きな魔力は感じられなかつたのに発動した魔法の威力はすごいものだつた。自分の知つてる魔法ならばあの司祭にあのレベルの魔法は発動できないはずである。

だからこそ、この世界は自分のいた世界なのか？いた世界だとしてあの封印から何年たつている？

そんな疑問が浮かぶのだが確かめようがない。だからこそ無理に【空間転移】^{テレポート}を使って岩の中にでも転移してしまえば死んでしまいかねない。

そんなことより一番の疑問は自分の体がどうなつてしまつたのかだ。

あの時、ゼノンを倒すために使つた呪文^{スペル}は破滅の呪文である。この呪文は使用された人物を破滅、つまり死亡させるものだ。しかし、この呪文は前提条件として莫大な量の魔力を持つていなければそもそも発動できない上に、副作用で使用者本人の生命力等をいくらか持つて行く。

(私の場合、戦闘後に話ができるくらいの時間があつたからわかる。生命力はさほど持つて行かれてない。何を持って行かれたのだろう) 彼女の場合は種族的問題もあつたのかほとんど生命力を持つていかれていない。その代わり何かと身長を持つて行かれた。

そのため、彼女の身長は縮みただでさえ低かつた身長がさらに低くなり、十歳くらいの子供に見える。

(身体能力に関しては一切落ちてなかつた。じゃあやつぱり不死性を持つて行かれたかな)

彼女の種族は真祖。しかし、人間から成り上がつた(・・・・・)
真祖である。

そのため、彼女はそう考えたのである。真祖としての特性、吸血鬼としての特性であるその不死性が持つて行かれたのだと。

(不死の特性か。つまり下手したら死んでしまうことだよね……)

彼女は真祖になつたその時から、ずっと無理な戦いを続けていい。それを強制して直していかなければ今後は死んでしまう。

そう考えて、セリーナは憂鬱になる。自分の今やるべきことはわからぬけど、何をするにしても不死つていうものはそれほど便利だつたのだ。

(とりあえず近くの村まで行って着替えを買わないとさすがに気持ち悪いな……。地図も買つてここがどこなのかの確認とかもしたいな)

やう考えセリーナは足を速めた。

第参話 黒の庭園 とセントーナの体（後書き）

まずは、一区切りです。

はつきりいってこれでよつやくプロローグが終わつた感じなのかな？

まずは、お礼を。

自分ではよくわかりませんが正直文章が稚拙に思えて仕方ありません。

しかし、そんな文章にも関わらずお気に入り登録してくれた方が
2人も。

ありがとうございます。

もつと精進しますので、生温かいめで見守ってくれるとうれしいで
す^ ^

第肆話 辺境の村 クロウンティア（前書き）

学校が始まりました。

これからは不定期に投稿します。

諸事情により村の名前を変更させていただきました。〔11／0

4／15〕

第肆話 辺境の村 クロウンティア

記憶を頼りに 黒の庭園 を進むと村が見えてきた。村は柵で覆われていて周りから村の様子を窺うことはできなかつた。

記憶が確かならばこの村の名前は クロウンティア 。世界の中でも最も有名な冒険者の集まる村であつたはず。

この村の周囲には 黒の庭園 以外にも魔物が多く住む地帯が散在している。そのため、レベルアップを望む多くの冒険者が集まる街である。

ついでではあるが、魔物が多く住む場所には頑丈でよい商品となるものも多いためそれを買い取るための多くの商店もある村である。しかし、それだけ多くの商家がありながらいまだ村なのは、やはり魔物の被害もそれだけ多いということである。

村の前までたどり着き、セリーナが門番に話しかけようとするとき門番はセリーナが言葉を発する前に止められた。

「止まりなさい。さすがにその状態で村に入れるわけにはいきませんので先にこちちで洗浄してください」

門番は血塗れの状態で村にはいられるのはさすがに見た目から悪いから風呂に入つて洗つように促してきた。

「そうさせていただけますと助かります。ですが、服がこれしかないんでどうしましょ?」

もともと、すぐに風呂に入るつもりだったセリーナにとつてうれ

しい限りのことだったが、いかんせんお金はあっても服はなかつた。

やうすると、門番は

「そういう方は結構多いんですよ。ですから簡易の服が容易してありますのでそこから取つていってください。差し上げますのでご自由にしてください」

そう言ひ私を外周にある風呂へと案内し、門番の仕事に戻つて行つた。

+++ + ++ +

門番アルフレッド・ペース・ファンクロウンは先ほどの少女が見たことがないはずなのに見たことがある、といつより知つていうな感覚がしてならなかつた。

何故だらうとアルフレッドは疑問に思いつつも考えていた。

「なあ。お前が対応した少女なんだが、見たことねえか？つか、知

つてるよつな気がしないか?」

考えていたら同僚のドルトス・ブリティスに話しかけられた。内容は今自分がまさに思っていたことと同じでびっくりしたが。

「だな。しかしながら、この胸につつかえた言葉が出てこないよつな感覚は……」

そう。頭では理解できるのだがそれを答えるとして出せない。

あの鈍くも光る緋色の髪とそれを映えさせる赤銅色の目。何だろう聞いたことがあるはずなのにわからぬこの感覚。

考えてこるとさすと舌葉が浮かび声に出した。

「緋色の聖女様」

つぶやいた瞬間何故だか頭の中で考えていたすべてがかみ合つたよつな気がした。

「そうだ。話に聞く緋色の聖女様の姿にそつくりなんだ」

そう。まるで、五百年前に魔王ゼノンを打倒し、世界を救つたとされる。緋色の聖女セリーナ様にそつくりなのである。

といつてもその髪の色と眼の色がそつくりであるだけであり、その容姿については一切伝えられてないため本当にそつくりなのかはわからない。

でも、先ほどの少女はあるで生まれ変わりのように容姿がそつくりだった。

「なあ、アル。風呂入つちまつた以上どうじょつもないがあのままだと村が大騒ぎになるぞ？」

アルフレッドの言葉で理解したドルトスは懸念を同僚へと伝える。

「やうだな。風呂から出る前に家の使用人に書いて隠すようにしてもらひりよ」

そうして再び門番の仕事に戻つて行つた。

+++ + ++ +

そんなやり取りがなされているとも知らずセリーナは案内された風呂へとやつてきた。

「うわ～、ひる～い」

思わずもれたそんな一言。

今、この風呂場には人は誰もいないようである。しかし、そんな

「」とは関係なくマナーとして体を洗つために洗い場へと向かつ。

洗い場につくとまずは血で汚れた体をまずは水で洗い流す。その後、置いてある洗剤を使い髪を丹念に洗い、体も洗う。

体を洗つてはいるが、風呂へ入つてくる足音が聞こえた。

「それにしてもやつぱつ庭園の奴らは手っ払いわね」

「そりゃそりゃだよ。Aランク以上しか居ないんだから。でも、出くわしたのがAランクだけでよかつたよ。あれでSランクがいたら死んでたね」

どうやら、一人組であるようだ。先ほどまで 黒の庭園 にいたようである。

その一人組が洗い場までやつてくるとセリーナを見つけた。そして、声をかけた。

「」んにちほ。 同業者ですか？」

声をかけられるとは思つていなかつたので、思わず言葉が詰まる。

「何驚いてるのよ？」

「こきなり声かけられたら誰でも驚くよ。全く。嬢ちゃんごめんね。」のアホは無神経でね

「誰がアホよ。誰が」

一人が話しているのを聞き、我に返ったセリーナは挨拶した。

「すいません。声をかけられるなど思つても見なくて…」

礼儀正しく声を掛け返した。昔、ベイに叩き込まれたため話すときなどはどうも丁寧な口調になつてしまつ。戦闘時はさすがに違つが。

だが、二人組はまさかそんな礼儀正しく返してくれるとは思つていなかつたようで驚いている。

「まさか、そんな礼儀正しく返されるとほビックリしたよ。ひからいれすまんね、いきなり声をかけちまつて」

その後、この一人と一緒に話しながら風呂につかると血口紹介をすることになった。

「あたしゃ、ビルレッティ・ポイズンレアだよ。見ての通り猫族だ
よ」

「私はファリアナ・レビィアンス。鳥族よ

「一人が名乗つたのでセリーナも答えた。

「私はセリーナ・A・アインスフュアです。種族は吸血鬼で、一応

ヴァンパイアハイテライト

・ウォーカー

真祖です

答えた瞬間、二人は固まつた。セリーナは自分がおかしなことを言つてしまつたのかと不安になつた。

一人が我に氣付き、目頭を押さえる。その後、ビルレッティが話し始めた。

「あんた、その名前本氣で言つてるのかい？」

「はい。最低だつたとはいえ親のくれた名前を捨てるほど私は馬鹿じやありません」

そう言つと、ビルレッティは頭に手を当て話を続けた。

「今、あんたの言つた名前は伝説に残る魔王を倒した緋色の聖女様の名前だよ。フルネームまで知つてゐる人は多くはないけどね。でもね、さすがに一言一句同じ名前をつける親はいないよ。恐れ多くてね。セリーナって子はいまだに多いけど、あんたみたいにフルネームまでかぶる人は絶対にいないはずだよ」

そう言われて、ビックリした。

（え、何それ？緋色の聖女？それが私？いくらなんでもおかしいでしょ…）

「いまだに聖女様は伝説の英雄よ。さすがに今の名前嘘なら謝りなさい。私たちが良くて世界の人はゆるしてくれないわよ」

今度はファリアナが言った。

セリーナはよくわからなかつたが聖女が自分なのか確信が持てなかつた。

なので、質問をした。

「一つだけ聞かせてください。今は、いつ（・・）なんですか」

ビルレッティは答えた。

「メルデア暦785年の初秋の月だよ」

セリーナは、聞いて確信した。ここは、私のいた世界だと。しかも、魔王を倒した時より五百年もたつていると。

「で、どうなんだい？あなたの名前は嘘なんかい？」

聞かれて正直に答えた。

「ええ。間違いなく、私はセリーナ・A・アインスフィアです」

「じゃあ、貴方は自分が聖女だって言い張るのかしら？」

ファリアナが聞いてくるので、

「それはわからないわ。でも、間違いなく私はセリーナ・A・アインスフィアです。そして、間違いなく私はこの手で魔王ゼノンを殺した。そう、絶対に……」

二人は絶句した。セリーナが言っていることが本当なら、聖女セリーナは生きていたということになり、世界が混乱するだろう。

でも一人はセリーナの言い方から彼女が嘘は言つていないと思つたなので二人は、こう言つた。

「疑つて悪かつたね。でもね、覚えておいて。その名前は、世界的に相当有名になつてゐる。貴方が名乗るとこいつの風になつてしまふわけだよ。

だから、その…あんたが本物の聖女様でもね……。その…名前は変えといたほうがいいと思うわけだよ」

「そうよ。今の名前を名乗ると今みたいな反応が返つてくることは確実よ。だから、偽名を使うほうがいいわ。それにアインスフイアは今じや王家の血筋をひく者だけが許された家名だから、名乗ると危ないわよ?」

こうして、セリーナはこの世界がどうなつてゐるのかを知つていつた。

余談ではあるが、この後セリーナは一人と話しこみのぼせてしまひ、介抱されたのちアルフレッドの使用人に一人ともども連れて行

か
れ
た。

第肆話 辺境の村 クロウンティア（後書き）

正直、どうこう方向に持つていきたいのかわからなくなりましたw
しまじくは村でのんびりとかな？

闇話 最後のヒカルの恋（漫畫セイ）

詰めたので、とつあんずお茶漬しの闇話です。

セリーナが聖女と呼ばれるようになった理由です。

〔二〇一一一・一一一・一九〕 //ズを修正

闇話 最後の王位争いの手記

ここに記すのは私がベイシス・クリストフ・ラブリオールが見聞きしたものであり、真実である。

+++ + ++ +

魔王をセリーナが倒してから一週間。城の中は相変わらず退屈でやることもなかつたそんなある日のことだった。

たまたま、私の父であり国王であるグロリアス・ババルドス・ラブリオールの部屋の前を通りかかった。

父の部屋には他にも何人かいるらしく、話し声が聞こえた。その声は、宰相や大臣・国の中でも有数の貴族たちのものだった。

そして、私は何となく嫌な感じがしたのでその話の盗み聞きをした。その話は私をひどく激怒させるものだった。

簡潔に言おう。彼らは最初から私に近づくセリーナを魔王を討伐して帰つてきたら殺すつもりであったと。そう言つていたのだ。そして、その手間もなく済んで良かつた。そして、自分たちの国が魔王を倒すという大きな手柄をあげたことで他の国からたんまりと謝礼金を受け取り、それをどう分配するかを話し合つていたのである。

私は自分の耳が真実を聞いているのか不安になつた。自分の父がまさか自分が好意をよせていた存在に対し、そんなことをしようとしていたのだ。疑いたくなる。

考えてみれば他にもおかしな点があつた。

魔王を倒したのが私ということになつっていたことだ。私はセリーナより先に魔王の元へたどり着きはしたが倒された。そのあと、セリーナが来て魔王を一撃をもつて倒し、その後、魔王ともども消えてゆくのを見ている。

その時に私に魔王が語つた言葉。そして、その消えた魔王が残した日記に書かれていた真実と理想を思い出す。

最初は魔王の言つていたことと日記に書かれたことに疑いを持つていた。だが、この父と国の重鎮たちの会話を聞く限り真実なのだうつと思えてくる。

魔王の語つた言葉と日記に書かれてきたことをまとめると、いつなる。

グロリアス・バルドス・ラブリオールは世界で人間を最高の種とおき、その他すべての種族を奴隸もしくは下等種とし、人間のみが繁栄する帝国を作り、世界を征服するつもりだと。そして、それを止めるために立ち上がり、すべての種とすべての人間を下らない闘争から守るために戦っていた。

考えてみれば、魔王が襲つてくるのはラブリオール王国のみで他の国で魔王の軍勢が押し寄せただのという話は一切聞かなかつた。（同調した一部の魔族が勝手に押し寄せたのは聞いてはいたが、魔王ではなかつた）

だからこそ私はどうしたらいいのかわからなかつた。そのため、このことをセリーナの妹サフィイ（本名セフィリア・T・アインスフ^{ティアス}ィア）に相談した。すると彼女はとんでもないことを言い出した。

「ならみんな殺して、国を乗っ取っちゃえば？お姉ちゃんを苦しめようとした奴らに容赦なんて絶対にしちゃダメ」

そんなことを言つていた。ついでに、

「貴方がお姉ちゃんのしたことを言いたいのなら、あいつらがいた

ら出来ないものだからこそ、乗つ取つちゃうのが一番だと思つたな？」

そう言つたのである。

その通りだと思った。だから私は決断した。

父をこの手で打ち取りセリーナのしたことを世界に示すと。

そのためには、まずは戦力が必要だ。魔王討伐の際についてきた騎士たちは私の部下だ。せんりょくとしては、サフィの魔力もある。それに、亜人や魔族の人たちにも協力を得よう。皆が安心して暮らせる国を作るためにと頼み。

+++ + + +

この手記の一週間後、ラブリオール王国の首都ハイゼンベルグは一日にして陥落。それは魔族や亜人それに人間が一人の王子の世界を変えるという思想に共感し、危険な思想を持つ一つの国とその国王並びに重鎮達を倒すという目的を果たすためであった。

そして、その王子は聖女の妹と結婚し、スフィア王国を建国し、すべての種族が安心し暮らせる国を建国したのである。

この後、スフィア王国の王となつたベイはセリーナが成し遂げたことを書いた本を書き、それは後の世まで伝わる聖女の伝説となつた。

闇話 最後のHIMIKOの手記（後書き）

「零話の魔王ゼノンとセリーナの話はそんなんじゃなかつた」という人がいると思います。が、あれは後の世に書かれた衝撃の事実の部分を抜き聖女セリーナが一撃で倒した。といつ、都合良く改変されたのちの世に語られている物語つてことにしてください。ちなみにつきの関係上魔王様ものすぐ悪者です。

第五話 ハンクロウン語と雌女の変身（前編）

すみません。

遅れまくっています。

一部誤字を修正 [1 1 / 0 4 / 1 5]

一部表現を変更 [1 1 / 0 4 / 1 5]

第五話 ファンクロウン邸と聖女の変身

セリーナが起きたとセリーナは知らない部屋の一室だった。

風呂でのぼせたセリーナは村に混乱を持ち込んだためにヒュー・クロウン邸に運ばれた。

「リリはなぜどう？」

「起きたかい？」リリは村長の家だよ」

近くにいたビルレッティはセリーナが起きたのを見て声をかけた。

「ええ、ビリして村長の家にいるんでしょうか？ 確かお風呂に入つてたのは覚えてるんですが…」

「貴女がのぼせて倒れてしまったのよ。それで、介抱してたらメイドさんが来てね。貴女の髪と眼は聖女のものと一緒に騒ぎになるってことで、門番をやつていた村長の息子が貴女が風呂からあがつたら家に連れてくように言つてたみたいね」

近くにいたファリアナが経緯を説明してくれた。

「そうですか…」

（一人の話から私が世間的には聖女って呼ばれてるみたいね。呼ばれるようなことはしてないのに…）

そう思つていたら、扉が開きメイドが入ってきた。

「あ、起きましたか」

「うひひひとメイドは近づいてきて、

「どうあれ、着ているものを脱いでください。服はけりで用意しましたので」

そう言われ、セリーナは服を脱いだ。

渡された服は着やすい服であるで何かの制服のよひだった。

「よくお似合いですよ。では、当主様のお部屋に案内いたしますのでついてきてください。ビルレッティ様とファリアナ様も来てくださいね」

メイドについて廊下に出て階段を上ると扉の前で止まった。ビルレッティが田舎の部屋のようだ。

「では、当主様のお部屋です。くれぐれも粗相のなにかにお願いします」

メイドはそつと扉を開けた。

セリーナ達は開けられた扉をくぐり中に入るとメイドは部屋には入らず静かに扉を閉めた。

部屋の中には少し年老いた魔族とがたいのよい魔族いた。

「君が例の聖女に似た子が確かに似ているな」

そういう言葉に出したのはがたいのよい魔族だった。

「すまない。私は、クロウド・グ里斯・ファンクロウン。現在この村の村長を務めさせていただいているものだ。あっちにいるのは私の祖父でガウエイン・クロン・ファンクロウンだ」

そうすると、年老いた魔族は立ち上がり

「説明の通り私はガウエイン・クロン・ファンクロウンだ。みなさん、どうぞ座つてくれ」

ガウエインにそう言われセリーナ達はイスに座る。ちょうど二人と対面するようになりますにになっている。

「ええっと。なんで私たちはここに呼ばれたんでしょうか?」

座つてすぐにセリーナが疑問をぶつけた。

「簡単な話だよ。息子に言われて君を一回家に入れてから髪の色なり変えてもらつつもりだったんだが…。その二人に話を聞くとどうやら君は本物の聖女のようだったからね。だから、話を聞こうと思つてね。君を部屋に呼んでもらつたんだ」

クロウドの答えは予想通りだったので気にせず話を進める。

「つまり、私の話を聞くために呼んだんですね?では、どんな話を?」

「まあ、君が本物の聖女かどうかの確認と今後の予定についてかな

クロウジはおもむろにガウヒンに話を振った。

「で、ガウヒン爺さん。この子は聖女で間違いない?」

「わうだな。見た目が多少若くなっているが間違いなくセリーナ様だ」

セリーナはうなづいた。

「まあ、本人確認は今ので良しとして今後はどうするんだセリーナ様?」

「とりあえず様づけや聖女って呼ばないでください……。私はそんな大層なことしたつもりはありませんから……」

セリーナはとりあえず言った。

「後、今後の予定は考えてませんね。なんせ五百年もたつていてるので、この世界がどうなつているのかも分かりませんから……。できれば、王都に行きたいですが……」

「王都か。まあ、王都はいろんな機関があるから、いいかもしけないな」

セリーナはうなづいた。

「まあ、なんにせよその見た目だと田立つからどうとかしないとね。名前も今のままはさすがにやばいでしょ?だからそちら辺を考えよ

つか

「 わたですか…。名前はちょっと変えたくないんですけど…」

「 一番変えなきゃ いけないのは名前だからね。だから髪や皿より先に名前を考えるよ」

いつして聖女の見た皿を変更もとに変身は始まった。

第五話 ハンククロウン邸と黒女の変身（後編）

短くてすいません。

田常会話とか難しいですね。会話でつなげるとあら不思議、何を言つていたのやら…。

そんなわけで、適当な会話になつたうえに短くなつてしまつました。セリーナの名前をどうするか…。名字つけてか家名の部分を変えようとは思うのですが決まらない…。

とりあえず、更新は木曜か金曜になります。

第陸話 王都 メアスフィア（前書き）

重要キャラ登場です。

「2011/10/22」変換ミスを修正
「2011/11/19」表現のミスを修正

第陸話 王都 メアスフィア

セリーナがアズガルドで世界のことを学びながら聖女変身計画に身を投じて いること、王都 メアスフィア の城の一室にて見合いの話がすすめられていたりした。

「父上…。俺はまだ結婚とかするつもりはないんだが、しなきゃならないのか？」

青年の名はルーキス・（メファイスト）・アインスフィア。隣にいるガツチリとした中年の男性はこの国、スフィア王国の王^{ガスタルド}ラムス・G・アインスフィア。つまり、この青年ルーキスはスフィア王国の王子で時期国王候補であるということである。

「すまんな。本来は自分で伴侶を探してほしかったのだが、見合いの申し込みが多くすぎてな。間違えて一人だけOKを出してしまったんだ。さすがに王としては今更断ることはできない。だから、会うだけでいいからやつてくれんか」

「まあ、それならいいけど…。申し込みがあのカシミア王国じゃ断り辛いのもあるし…」

カシミア王国とはスフィア王国の隣にある国で世界的にも有名な商業をもとに発展した国家で首都である ヴァンガルド は世界最大級の商業都市でもある。

なお、カシミア王国はスフィア王国が五百年前に建国して以来の仲で当時は相当の金額を融資してくれたそうだ。その為、あちらで何かあると助けることが多いし、いやちうで何かあるとあちらも助けてくれる。

そんな関係なので断り辛いのもあり今回の見合戻をやめざるを得ないのだ。しかも、あちらの王女のことによく知っているし、王女もルーキスのことによく知っている。

だから、受けてしまえばきっと結婚まで一直線だろう。ところそこで乗り気ではないのだ。

「はあ、あいつと見合いかよ…。マジで今更な気もするな。あつちは俺に好意を振りまわまくってるしな」

「わかつておるよ。お前があの子のことをどう思つてるかは知らんが、結婚することじりしないことじりあまつせんぞんぞんに扱つたりせんようにな」

「分かつてゐや。一応な」

そう言つて父の部屋を出た。

+++ + + +

ルー・キスは部屋に戻ると溜息をついた。

「はあ…。あいつと見合いか…。別に嫌いじゃないしむしろ好きではあるが、今すぐ結婚したいほどではないしな…。」

先ほどから何度も出てきているあいつことカシミア王国の王女はニア・シア・カシミア。ルー・キスと同じくスフィア王国にある総合教育機関、通称 アカデミー 在籍し共に学んでいる相手である。

人当たりもよく性格もいい。一国の王女としては規格外の性格の良さから彼女のファンは多く、一週間で少なくとも三回以上は告白されているそうだ。

まあ、本人は前述の通りルー・キスのことが好きですべて断つているそつだが。

「だけど、あいつのこと考えると考えさせられるな…。あいつと結婚したら間違いくらい家庭を築けそっだし…」

考えれば考えるほどドツボにはまつていく。

「そういうや、まだ日程は決まつたなかつたよな…」

ルー・キスは何かを思いついたように考え始めた。

「そうか。日程は決まってないんだからじばらく考えたいってことで旅といつの家の家出を敢行しよう。アカデミーのクエストなら疑われることもないし」

そう考えたルー・キスはすぐに準備を始めた。

+++ + ++

メイドが朝の挨拶にルー・キスの部屋に着いたときすでに部屋にルーキスの姿はなく机の上に置手紙らしきものが乗っていた。

メイドはそれに気付くとすぐ「王のもとでその手紙を持って行った。

「失礼します！ ブラムス様！ 大変でござります。 ルーキス様が！」

「どうしたか？ あいつが怪我でもしたか？ こんな朝早くに

のんきに話すブラムスに対し、メイドはひどくあわてている。

「のんきに言つてゐる場合じゃありません！ ルーキス様のお部屋に姿がなかつたので探してみたらお部屋にこんなものが…」

セウ・ヒトリメイドはプラムスに手紙を手渡した。

「何々?

『親愛なる父上へ

失礼とは思いましたがやはり今回の見合いで関しては納得がいきません。いくら相手が恩あるカシニア王国としてもさすがに納得のいかない結婚はしたくありません。

あ、別にミアが嫌いというわけではありませんが…。

なので、しばらく考えるために旅をしてきます。ゆっくり考える時間がほしいからです。城にいれば近いうちに見合いで日時を決められてしまうからです。そんなことになつたら俺はきっとあいつとの結婚をしぶしぶ決めなければいけなくなると思います。そうしたら、きっとあいつを幸せにしてやることが出来なくなると思います。そんなことは、絶対にしたくありません。あいつのことは好きだからこそそんな軽々しく決めたくない、そういうことです。

P・S・ 学園のクエストってことで出でてくるのド心配はいりません。帰つてくるときにはちゃんと決めて帰つてきます。

国王・プラムスが息子 ルーキス・・・アインスファイアより』

か

読み終えると、プラムスは笑い出した。

「はつはつは。またか、わしと同じことをすると…。血は争えん

な

やんな」とを言つたメイドは「いいんですか?」と聞いた。するといはは、

「よい、放つておけ。あいつの人生だ。少なくともあいつはニア王女を幸せにしたいから家出したんだ。そんなあいつを連れ戻したところどう意味はないだろ?」

「やうですね。では、失礼しました」

メイドが出てこくと、ブラムスはつぶやいた。

「全く…。好きならば好きとこえんとは…。つべづべわじと回じだな。ちやんと考えて帰つてこよ、バカ息子」

やつはつとブラムスは朝食を食べるため食堂へ向かうのだった。

第陸話 王都 メアスフィア（後書き）

総合教育機関 アカデミー に関しては次話で説明します。

第漆話 変身した聖女と総合教育機関 アカデミー（前書き）

説明ばかりで下さいません…。

〔2011／10／22〕変換ミスを修正

分りづらい表現を修正

第漆話 変身した聖女と総合教育機関 アカデミー

初めてに言つておきたい。私はこんなにいろんな人に体をいじられたのは初めてだ。

セリーナは髪の色を自身の魔法で変えることにしたが、服などは買つてきたものをいろいろと着せかえられた。というか着せ替え人形にされた。主にビルレッティとファリアナの二人だが。

着せかえられたものはワンピースから何から何までいろいろと着せかえられた。おかげでかなり憔悴してる。

それが終わると名前を変えるということにして家名を変えることにした。最低な親とはいえくれた名前を変えるのは忍びないし、ベイのくれたAの名前、独奏 アリア という名前を消したくなかったっていうものもある。ちなみにアリアを考えたのは一人で戦う時の美しい姿は一人だからこそ映えていた。とかいうことで独奏の意味を持つアリアという名前をくれた。まあ、普段名乗る時からアリアとは名乗らずAを使つているからちょっとあれだけど…。

そんなことはどうでもいいとして、セリーナは村長やビルレッティ達と共に名前を考え、セリーナ・A・エインフェリアと名乗ることにした。一応、名前の関係から普段はセリーナ・エインフェリアと名乗ることになるが。

ミドルネームが入るのは基本的に貴族や騎士の家だけだというからしかたなかつたが。

「それでどうするんだ? 王都に行くんだり?」

「はい。そのつもりなんですが、どうしようにも何も知らないものでようしければいい案がありませんか?」

セリーナはクロウドに言われ答えた質問を返した。

「そうだな。現代を知りたいなら俺たちに聞くよりも、それらを詳しく教えてくれるところがあるしそこに行くのはどうかな? ちょうど王都にあるし」

そう言つとクロウドはパンフレット的な何かを取り出した。

「これを見てくれ

渡されたパンフレットは総合教育機関を紹介するものだった

総合教育機関 アカデミー

これは、あととあらゆる人種を集め教育をする機関である。これは、あととあらゆる人種を集め鍛練をする機関である。これは、あととあらゆる人種を集め研究をする機関である。

故にこれは総合教育機関 アカデミー である。

我々は来るものを拒まず去る者は追わず。

意志あるものよ」に集い、学び鍛え探求せよ。

「えつとこれは？」

見た感じは教育をしている機関だとは思つたのだが、それ以上は分からなかつた。

「総合教育機関 アカデミー だよ。

謳い文句の通りにあらゆる種族を拒まず集めて教育してくれる機関だよ。

何かを知りたいならここ以上の場合はないし、場所は王都だ

そう言つてパンフレットを指しながら続けた。

「一応、学びたいもの学べる最高の機関だよ。

それに、研究とかもできるし、今じゃほとんどの人がアカデミーに一度は入つてるよ」

「なあかつ、生徒であると同時に先生である。これがなかなかいい反響を呼んでいたりするんですよ」

「魔法研究はアカデミーに勝てる機関がないって言われるくらい先端を言つているんだよ」

矢継ぎ早に言われつつ話を理解したセリーナは、

「で、そのアカデミーとやらに入る資格は？」

「ないよ。こいつてるでしょ。『我々は来るものを拒まず去る者は追わぬ。』つて」

「入学手続きをするならアカデミーに行ひて仮付するだけでいいんだよ。ちなみに無一文でも受け付けてくれるよ」

「寮も完備してる。まあ、お金はクエストやつて稼いで返すんだけどね」

要するにこいつことだ。入学したものは同時に冒険者ギルドに登録されてそのうえでクエストをして稼いで学費を払つていうシステムがあるらしい。ちなみに教師をするか研究室を持ったりしても報酬がはいつたりするらしい。

「そうですか。なら、入るのがよそそつですね」

そう言つと村長は、

「ちなみに今着てる服がアカデミーの制服だから行くならあげるよ」

そう言われあいがたくもひつた。

そのあと、着せ替えに使われた服を貰い、髪の色を魔法で銀色に変えた。

その状態で必要な下着等を買い足し村を旅立つことになつた。

第漆話 変身した聖女と総合教育機関 アカデミー（後書き）

そんなわけでうまくいけばルーキスと出合います。
ちなみにルーキスはあだ名で呼ぶことを考えています。

第捌話 向かつは総合教育機関 アカデミー。しかし、金はあります、食事もま

〔2011/10/22〕変換ミスを修正

第捌話 向かつは総合教育機関 アカデミー。しかし、金はあります、食事もま

そんなこんなで準備は終わり、総合教育機関 アカデミー に入学するために王都に向かつこととなつた。

「では、ありがとうございました」

セリーナは深々と頭を下げる。

「いやいや。こちらこそ。また縁があつたらぜひ寄つてくれ

「分かりました。ではさよなら」

そう言つて、セリーナは荷物を持つて総合教育機関 アカデミー に向けて出発した。

ちなみに、現在の街道は五百年前と違いかなり変わつてしまつていて一人ではたどり着けないとのことだったので、ビルレッティとファリアナと共に行くことになった。

「お金がない……」

何日か経つて今は、街道をかなり進みいくつかの町を越えたところにいた。

しかし、彼女らは、今ものすゞこピンチに陥っていた。つまり、お金がないのである。

「まさか、スラれるなんて…。つかりだつたよ…」

お金はまとめてビルレッティが管理していたのだが、先日町でスラれていたことに気付かず現在は街道の真ん中で呆けている状態だ。

「ビルウウ…。おなか減ったよお」

そんなことを言つているのはファリアナである。それなりにいいとこのお嬢さんなので我慢があまりきかないらしい。

そんなこんなで今彼女らはお金なしで次の町まで行かなければならぬのに、食料を買ひのを忘れたという悲劇の真つ最中である。

「あの、魔物の肉を食べれば良いんじゃないですか？幸い少し外れれば魔物の多く生息する森のよひですし」

セリーナは一人に提案するが、

「魔物の肉かい？あんなもの食つたことないから、正直食いたくないね。まあ、贅沢言つてる場合じゃないしそうすべきなんだろうけ

「どね

「うう。食べたくないけど」のまま食べないで飢え死にするよりいいかも…」

そんなこんなで魔物狩りに出かけることとなつた。

街道から少し外れた森。多くの森はたくさんの生物が存在し豊かである。それゆえに魔物も数多く危険地帯として有名である。そこまでのランクの魔物はいないのであるが…。

「ええ。現在、動物ビックリ魔物一匹すら見えません…」

どうこうとなのか、森に入つてこのかた一切の生物と会えないのである。豊かな森にしては不自然なほど静かである。

その現状に3人はどうするのか決めあぐねていた。

「どうなつてゐるの?これ。普通何つかの虫だつているもんぢやないの?」

「だねえ。これは異常だよ。食事は諦めて全速力で近くの町まで行つて現状知らせるかね?」

ビルレッティとファリアナは相談しつつセリーナに意見を求める。

「セリーナはどうした方がいいと思う?このまま進む?それともビルの言つた通り全速力で近くの町まで行つて現状知らせる?」

「正直なところ『全速力で近くの町まで行つて現状知らせる』の方がいいと思うんですが、さすがに近くに人が来てたりすることを考えると探索したほうがいいと思います。それにさつきから探知をかけてますが生命反応はないわけじゃないんですよ。だから、多分大型の何かがいて命令系統を作っているんじゃないでしょうか？」

「だね。じゃあ、私はギルドに連絡鳥を飛ばすよ。最後の一匹だし使いたくはなかつたけど、仕方ないね」

そう言つとビルレッティは馬車のほうへ向かつて行つた。

「じゃあ、ビルが戻つてきたら探索開始ね」

「ええ。では、それまでに探知を森全体まで一度かけちゃいますね」^{サーチ}

そう言つとセリーナは魔法を全力で起動した。

数分後、ビルレッティが帰つてきたので探索を開始した。

「調べた限りここの中にある洞窟が怪しかったです。なのでそこに向かおうと思うんですがお一人はどうします?」

セリーナは一人に意見を聞いた。すると、

「じゃあ。一手に分かれようかね。その洞窟はセリーナが、その周辺を私たちが探索しようかね。何かあつたら大声で互いに助けを求めるつてことで」

そういう、一手に分かれ探索を本格的に再開した。

洞窟の前に着き、二人と別れたセリーナは真っ暗な洞窟を進んでいた。

「暗いですね…。まあ、私は吸血鬼ですし」この暗闇はむしろ好みですが

独り言を漏らしながら進む。

じゅせり、この洞窟に何かがいるのは間違いないとセリーナは確
信した。

先ほどからいたるところで見受けられる何かの動物の骨や飛び散った血から、その何かは外の森を支配しているのもわかつた。だからこそ、分かつていて一人で来た。ここにいるのは分かつていたし、ビルレッティも分かつていたからこそあんな提案をしたのだろう。

血の匂いが充満して気持ち悪いが、気にしている場合ではない。いつ、この洞窟に住む森の支配者が襲つてくるとも限らない。

そしてその時が来た。

出てたのは白銀に輝く毛並みを持つた大きな狼型の獣だった。

「ちよつとちよつと！これは予想外かな。なんでこんなのがこんなところにいるわけ？庭園にいる種でしょこれ？」

そこには 黒の庭園 にいる魔物でもA+ランクに分類される最強クラスの獣のボスだった。しかも、ここにいたのはその中でも凶暴で名前を付けられたものだった。

「魔狼フェンリル…。デビルハウンドの最強種…」

魔狼フェンリル。黒の庭園 にて群れをなし他の魔獸を襲う凶暴種デビルハウンドのボス的存在。今までたくさんの中の冒険者が挑んだがデビルハウンドを殲滅できてもこのフェンリルだけは倒せず逃げ帰ってきてているという話もある。ちなみにデビルハウンドは黒の毛並みを持っているのでフェンリルは一目瞭然だ。しかも、単独で名前付きの魔物であるためランクはSランクに分類されている。

「貴様。どのような理由があつてここに来た？」

フェンリルが突然喋りだし問い合わせてきた。

「え？ 嘩れたの？」

「質問に答えよ。我に用があるのか？」

「いえ、別にこれといった用はありませんね。まあ、森の様子が明らかにおかしかつたので探索に来た感じですけど…」

セリーナは理由を話した。

「やつか。どのよつなことになつてゐるのだ？」

「森の動物がほとんびこませんね。魔物すり……。あなたがやつたんじゃないの、フンリル？」

「我がやつてこゐるのではないだらうな。我は「」に傷を癒しに来るだけである。来るときには森が少し静かだとは思つておつたがそんなことになつておつたか。それにこの洞窟が少し血なまぐれく感じておつた」

「じゃあ、他にしたことわざつてゐる奴がいるとへ？」

「ああ、そのようだ。我は「」の森によへ来るのでな、むやみに殺したりはせん」

セリーナはフンリルとの会話で彼がやつたのではないかと確信はしたが、

「じゃあ、「」の惨状はいつたい何が？」

「さあな。我にもわからぬよ」

「そいつもさき「」の洞窟にてゐるんだよね？」

「ああこいだらうな。我に近づく」とせせりみだして我より弱いのであらうな」

フンリルより強い種なんてほとんどないと思つセリーナだが口には出さず話を続ける。

「そう。まあ、現状を打破するにはこんなことをしてやつを倒さないとダメみたいだし頑張つてみるしかないかな」

「そうか。ところでそなた名はなんといつ？」

「本名はセリーナ・A・アインスフュア。聖女って呼ばれてるその人だよ」

セリーナがフェンリルの問いに答えるとフェンリルは固まった。

「どうしたの？」

「まさか生きておったのか…。我的にはうれしい限りだがの…。これで我が友との約束も果たせるゆえ」

突然止まったフェンリルは平伏し、セリーナに提案をした。

「我が友ゼアノートとの約束だ。我と契約を頼む」

「ええっと。それはどうことなのかな？」

セリーナはフェンリルに言われたことをすぐに理解できなかつた。

契約とは魔物などと行える召喚魔法のための契約である。

召喚魔法は契約をしたものをお召喚できるただそれだけの魔法なのだが、精霊魔法と違い召喚に魔力をほとんど使用せずにできる。そのため、多くの冒険者が契約をしようとしたが基本的に自分と同等、もしくは自分以上のものと契約しないとおぼど役に立たないのであまり広まらなかつた。

ちなみに、契約を行つてゐる魔物はそのほとんどが名前付きであり、それくらいでなければ契約しても意味をあまりなさないのである。

なお、契約と一種の服従である。そのため、多くの魔物は契約をしないし、失敗して魔物に食い殺された例もあった。

なのに、名前付きの有名なあのフェンリルが契約してくれといったのだ。驚くに決まつてゐる。

「我が友ゼアノートと約束していくてな。『もしも、我が主がゼノンを打倒したときけいやくしてもらえんか？彼女には今後も大きな力が必要となるゆえな』とな」

「あいつがそんなことを…。いいわ、契約しましょうか」

「うしてセリーナは心強い味方を手に入れた。

ちなみに契約した魔物は存在を昇華し靈獸として扱われるので基本的に天界に行くこともできるし、主人のもとにいることもできる。

そんなわけで、良い食事とお金を手に入れるためにセリーナは小型化したフェンリルと共に謎の森の支配者を探して奥に進んでいった。

第捌話 向かつは総合教育機関 アカデミー。しかし、金はあらず、食事もま

ものすぐぐダグダです。

次回はまともな戦闘描写を書けるかな?

洞窟の奥にいる魔物何にしよう..

第九話 大老熊ベヒーモス（前書き）

遅れています。

〔2011/10/22〕一部表現を修正

第九話 大老熊ベヒーモス

簡潔に言おう。浅慮だつたと。

「うわあ。最悪ね」これは……。こんなとやるのはさすがに嫌ね……」

思わずセリーナは言葉を漏らした。

「我も思いもよらなんだ。ここまでの大きさに育つて居るものを見るのは初めてであるぞ」

体を普通の狼並みの大きさに変えたフェンリルが言った。

そこには大老獣の一角であるベヒーモスがいた。

+++ + + +

時は少しあかのぼり、ビルレッティとファリアナは近くにあった泉で休憩していた。

「いいんですの、ビル?」こんなところで休んでて

「いいのさ。私たちが行つても足手まといになるのは日に見えた強敵だよ。あの洞窟の前から感じた気配だけで嫌になつたよ」

ビルレッティはファリアナに説明する。

「あの洞窟に何がいるのかは分からぬけどあたしらに出来ることはないよ。とてもじゃないけどあそこにいたのは肌で感じればだけでもAランク以上だつたよ。洞窟の奥からはなつてゐる気配だけでそれだけ感じるんだ。推定する限りあそこにはSランク級のものが居てもおかしくないよ」

そう言つと、ビルレッティは酒をあおつた。

「あたしらももっと強くなりたいね…。肝心な時に人にまかせんとあかんなんて悔しいよ…」

「そうね。もっと強くなつてたくさんの人を守れるようになりたいわ…」

そう言つてファリアナは向かい酒でビルレッティに答えた。

+++ + ++

大老獣とは異常なほどの力や生態を持つ魔物の一部をその強さから特別扱いするため付けた名称である。

大老獣には様々な種がいるとは言えないが、その中には一匹だけで国を破壊したといわれている魔物もいる。しかも、大老獣のほどんどが名前付きに匹敵する実力を持つため、個別に名前を付けることはないが、その種としての強さはまさに別格なのである。

ここにいたベヒーモスもその大老獣の一匹である。

大老熊たいろうあくベヒーモスと呼ばれるこの魔物は、過去様々な村や町を破壊したとされている。知能はそこまで発達してはいないもののその獰猛さからランク以上の実力者ですら数人がかりでないと倒せないといわれるほど強い魔物である。

そんなベヒーモスだが大きさは大きくても15メートルあればいいほどだという。だが、ここにいたのはその倍、30メートルの大さを誇るほどのものだった。

そんなわけで冒頭に戻る。

「あり得ない。こんなのをどうにかするなんて簡単に言えるほど私

も自分を過信してないわよ…」

「うむ。最悪大きな都市一つを一晩で廃墟に変えるなど何の問題もなくやってのけるであらうな」

やんな」としゃべつてこるビベリーもス自然而無理に販賣したよ
うだ。そして、叫び声をあげた。

その声は洞窟全体に響き渡り反響した。その反響音により洞窟全体が揺れるかのようにぶれる。

「つづう！耳が痛いなあもう！」

少し怒り気味にセリーナが言う。

ベヒーモスの叫び声がやみ、セリーナ達に向かい襲いかかってきた。

「まあ、予想どおりね。さあ、久しぶりの戦い（殺し合）によ」

そう言つて、ベヒーモスとの戦闘が開始された。ちなみにフエン
リルは、戦闘に参加せずに今一度、主の強さを見極めるためにセリ
ーナの戦いを静かに見つめていた。

セリーナは空間に手を入れ、魔王城で使つたものとは違つ武器を

取り出した。取り出したのは大きなハルバート。その大きさはセリーナの背丈を大きく上回りその重さは明らかに通常のハルバートなんかよりもはるかに重そうである。

「さあ、やりあいましょう」

そう言つて、洞窟の天井を駆けベヒーモスの頭を狙つ。

ベヒーモスもそれに気付いていて腕を伸ばし爪での攻撃を狙つてくる。もちろんそんな大ぶりな攻撃はあたらず避ける。

避けたセリーナは天井をけりベヒーモスの頭の角目掛けて飛び降りた。ベヒーモスも黙つておらず攻撃を仕掛けてくるが当たらず、セリーナの目の前にベヒーモスの角がある状況になる。

大型の魔物のほとんどが大きな角を持つていて、それには多くの神経が集まっている。そのため、角をへし折ればその魔物に多大なダメージを与えるのだ。

しかし、そんな弱点が無防備にさらされているはずもなく、その角は異常なほど頑丈で並の冒険者ではへし折るなど到底できはしない。知識のあるものなどは別として。

そんなベヒーモスの角は魔物の中でもトップクラスの硬さを誇る。セリーナはそれを分かつていながらもベヒーモスの角をへし折りに行つたのである。

ここで重要なのが先ほど取り出したハルバートである。このハルバートは最初から角を一撃でへし折るためにセリーナが取り出したものである。

ハルバートは威力重視ではなく重さ重視で取り出したもので、それに加え天井からの高さで威力を増したのである。そう、単純な攻

撃力だけでベヒーモスの角を折りに行つたのである。

「はああー。」

振り下ろされるハルバート。それはみごとにベヒーモスの角に命中した。

しかし、その攻撃は無慈悲にもはじき返された。少しの傷をつけただけで…。

「嘘でしょー。これを受けて傷を少し受けるだけなんて…。どんだけ硬いのよー！」

セリーナはそう言いつつ、ベヒーモスが仕掛けてくる攻撃を避ける。

セリーナは作戦を変えるべきか避けながら考えていた。ベヒーモスは頭が悪いので攻撃事態はその凄く単純で当たることはそうそうない。その上に30メートルの巨体である。当たる可能性はほとんどないだろう。

しかし、その反面防御面は異常なほど頑丈だ。そのため、攻撃しても刃が通らない可能性すらある。

そんな、状況を打破しうる作戦を考えながら攻撃を避け続ける。そして、一つの方法を思いついた。

一つはこのまま先ほど攻撃を当てた角に何度も攻撃を当て角をへし折つてしまつこと。だが、この作戦では異常なほどの時間がかかる可能性がある。

先ほど攻撃して削れたのはわずか数センチにも満たないほど小さな傷。一度でそれなのにその数センチにも満たない傷を狙いつづけ攻撃を当て続けなければならない。しかも、いくらベヒーモスの頭が悪いとはいえる同じことをし続けていればいはずはれる。つまり、セリーナにとつては簡単なのが大きなリスクを抱えなければならないのだ。

一つ目の手段は切り札を切ることだ。だが、これについては正直考えていない。

自覚めたばかりセリーナの魔力量は当時に比べいくらか落ちている。そのため、切り札を満足に使えない可能性もあるし、アインスファイアという家の秘密にも触れる。まあ、幸いここにいるのはフェンリルだけなのでそのあたりは問題ないが。

ちなみに戦闘後で思いついたのだが、大きな魔法を使えば良かつたのだ。ベヒーモスは頑丈だが魔法の耐性がほとんどない。なので魔法を当てれば少なくとも簡単に勝てたとは言わないがもつと楽に倒せたはずなのである。

閑話休題。

まあ、そんなわけでセリーナは一つ目の案を採用しようと思つたのだが、フェンリルが念話をかけてきた。

(何を迷っているかは知らぬが、遠慮などせずに本気を出せ。ここで時間を食つてもさほど意味はない。お前が倒れたならば運んでやるし安心しろ)

セリーナはそう言われ決心した。

(わかつたよ、フェンリル。でも、ここで見たことは見なかつたこ

とにしてね)

「やう言つて、セリーナは言葉を紡いだ。

「我が求めしは失われし過去。今ここにそのすべてを明かせ。全てを記せし禁断の書庫 ロストライブラリ …」

言葉が紡がれた瞬間、世界が変わった。

まるで、世界がセリーナを中心とし回つていくような感覚である。

セリーナの前に一冊の本が現れる。そして、やうに紡いでゆく。

「検索 サーチ 。どんな頑丈なものでも切り裂く無敵の刃」

その間、ベヒーモスは動けずいた。まるで、何かに取りつかれたかの如く。

「発見 ディスカバリー 。能力を具現。読み取り ロード 」

セリーナが言葉を紡ぎ終わるとその手には一振りの剣が握られていた。

「悪いけど一撃で決めさせてもううわ。魔力がほとんど残っていないからね」

セリーナはやう言つて、ベヒーモスの角目掛けて飛翔した。まさに、飛んでいた。

そして、切るつける。

「全てを切り裂く無慈悲なる聖剣 デュランダル！」

切りつけられた角はまるでバターを切るかの如くなめらかに切り取られた。

そしてベヒーモスは倒れた。

「じゃあ、死んでもらうね。貴方みたいなのが居るのはさすがに止めんだからね」

セリーナはそう言い、持っている剣でベヒーモスの心臓を切った。大量の血を浴びたため来ていた服は真っ赤に染まつたが。

戦闘は終わり森に平和がもたらされたのである。

そのあと、申し合わせたかのようにセリーナは倒れたのだった。

第九話 大老熊ベヒーモス（後書き）

戦闘描写ひどいですね。もっと長くすべきでした。
次は、まともな戦闘描写を書きたいです。

闇話 世界の全てを知る事が出来たヒカル。世界を見つめる少女の憂鬱が消

遅れました。
すいません。

〔2011/10/22〕変換マップを修正

闇話 世界の全てを手に収めたとするモノ・世界を見つめる少女の憂鬱が消

セリーナがベヒーモスを倒した時遠くにあるとある城の一室にいる魔族の青年がつぶやいている。

「ふむ。キングベヒーモスがやられたようだな」

「やうなのですか、主?」

青年の言葉に反応するように執事服を着た青年が問う。

「ああ、まさかあれが簡単にやられてしまうとはな…。あれをやれる人材がいるといつのは少しばかり脅威だな…」

「ですが、ご主人様に敵う人がいるとは思えませんし、そう難しく考えなくともいいのでは?」

答えた青年の言葉にかぶせるようにメイド服を着た少女がさらなる問いをかける。

「かもしだぬが、楽観視をして足を掬われるのも困るな。お前たちには苦労をかけるな。すまん」

そういう青年の言葉に執事とメイドは答える。

「謝らないでください、主。私たちは主に命を救われたからこそここにいることができるのです」

「そうですよ、ご主人様。ですから、何かをするのならば遠慮なく

申しつけください

「やうか。今後もよろしく頼む」

やう言つと、思い出したよつて青年は尋ねる。

「やう言えば、奴は死んだのだ?」

「勝手に出かけたようです。ところとも『主の為に都市を奪つてくれる』などと言つて消えましたよ。全く、勝手なことをしないでいただきたいのです……」

「やうですね。『主人様に褒められたいからつてちょっと度が過ぎます。まだ、動くべき時は来てないですから自重を覚えてほしいですよ』

やう言つ一人を青年はなだめる。

「まあ、いいや。あれもまだ若いのだ。お前たちほどではないにしろ力を持つてるのでな、持て余すなら発散させてやらんと。かわいいものだよ、まだまだ。兵たちも連れて行つたのだろう?いい訓練だ」

その言葉に執事はしぶしぶ了承した。メイドは執事の様子を見ると、お茶を汲みに行つた。

「主がやう言つならばいいでしよう。主はやう遠くない未来の為に力を蓄えてくださいませ」

やう言つと、執事は部屋を出て行つた。そして、青年は一人に

なると小さくつぶやいたのだった。

「そうだな…。我はの方を超えて真の魔王になるのだから…」

+++ + ++ +

「ああもう、なんて暇なのかしら…」

王都 メアスフィア にある城・スフィア城の奥深くにある庭園
とそこにある小さな塔。それは、まるで誰かを閉じ込めるかの如く
そこにあった。

そこには一人の少女が何かを憂いたような表情をして立っていた。

「どうせ何もある」となんてないし、いい加減にしてほしいわ。私
に向を期待してここに腰をせてるのよ…」

「まあまあ、貴女様がいてくれますからこの城は守られている
のですよ」

「分かってるわよ。この城の守護精霊としてこの城にいることくらいね。でもね、私は何もすることもないんだから暇なのよ。せめてアカデミーに行かせてくれたらいにのに…。私が離れてたって守護は効くから問題ないのに…」

少女はすねる。それをなだめるメイドも困った顔をしていた。

「それはそうなのですが…。貴女様がどれだけこの国にとって重要な方なのかをお考えください…。貴方様にもし何かあります。それだけは避けねばならぬのです…」

「だから、分かっているつてばもう一…」

そういうと少女は塔の中に入つて行つた。もちろん、メイドも後を追つた。

少女は部屋に戻ると即座にベランダに出た。

「ふう。息が詰まるわね相変わらず…。まあ、私がここにいるのは望んだ結果なんだし文句なんて言つていいくわけないんだけど、まさかここまで何も出来なくさせられるなんて…。ほんと退屈…」

少女は望んだのだ。この国を守りたいと。そう望んだから彼女はここを守る守護の精霊となつた。

分かつてはいる。でも、世界はどうにも退屈なのだ。

することもなく、ただただここで時が過ぎゆくのを見つめつづけ

る。

やつ、少女はただ過ぎていくときの中で憂鬱を感じ続けている。やる」ともなくただただ世界を見つめ続けている。

そんな毎日を送り続ければどんなものだつて嫌になるのは当然前である。

「はあ、何か楽しくなるような」とがおきないかなあ……」

少女がそうつぶやいた瞬間少女は何かを感じ取った。このときはちょうどセリーナがベヒーモスを打倒したときであつた。

「えー、世となのじれ? 嘘じゃないの?」

少女は感じ取った何かが嘘じやないのかと疑う。

「さあ、おまえの手で作るんだから、おまえの手で決めてやる。」

不気味に笑う。

「どうしたんですか？何かありました？」

メイドは部屋からベランダに出てきて少女に問いかける。

「何でもないわ。でも、多分これからとても面白いことが起きるわ」

「え? どこのことなんですか?」

「意味などないわ。ただねあひといの後樂じこじが起きたのはやな
のよ」

少女はかうこりと部屋の中に床る。

その時少女は少しへつぶやいた。

「お姉さま。早くいきまでも来てくんだぞこね

」

闇話 世界の全てをやめてしまうことから・世界を見つめる少女の憂鬱が消

いろいろと重要なキャラが出てきました。
いい加減登場キャラ紹介を考えよう。

第拾話 旅路で出会った青年（前書き）

意外と長くなりました。

〔2011／10／22〕変換//スを修正

第拾話 旅路で出会った青年

セリーナが田を覚ますとそこはひちやんと天井のある場所だった。

「リーリー。」

セリーナがやうやく近づいたらしひフーンリルが声をかけてきた。

「田が覚めたか主。倒れた主を運んでいたら一人組が来てな、それで近くの町まで運んできたのだ。ここは、城塞都市 クシロメリアにあるやじだ」

フーンリルは説明し終えると近くに伏せてそのまま無言になった。

どうやら話から察するに、倒れた私を洞窟から運んでいたりビルレッティとファリアナが来て馬車で近くのこの都市クシロメリアまで連れてきたらしい。ありがたい話だった。

セリーナはベットの上から部屋を見回した。

ビルレッティは椅子に座つたまま寝ていた。どうやら、ベットが足りなかつたらしい。ファリアナは隣のベットで寝ていた。ビルレッティが譲つたのだね。

折つたベヒーモスの角はちゃんと持つてきているようだ。バカでかい角が壁にたてかけてあつた。

一通り見回したといひながらは何も見えないほど暗かつた。どうやら、夜のようだ。

一人を起こすわけにもいかないなと思つとそのままベットに寝転

んだ。

そうすると、これまで黙っていたフェンリルが小さく声をかけてきた。

「ところで主、奴を倒すときに使ったものは何なのだ？」

フェンリルの間にセリーナはこう答えたのだった。

「内緒よ。使う時にいったでしょ。『ここで見たこと（・・・・）は見なかつたこと（・・・・・）にしてね』って」

フェンリルは黙るしかなかつた。しかし、セリーナは後を続けた。

「まあ、パートナーだしね。そのうち教えてあげる」

そう言つとセリーナは眠りに落ちて行つた。

+++ + + +

翌朝、セリーナが起きると一人が声をかけてきた。

「おお、起きたかい。さすがに一日も田を覚まさなかつたんでも吃驚したよ……」

「やうですよ、全く心配させないでください……」

そう言われ吃驚した。まさか一日（正確には一田半）もの間寝ていたのだそうだ。

まあ、魔力のほぼすべてを使いきつてしまつただけの日数で済んだ方が奇跡ではあるのだが。

「まあ、起きてくれて助かったよ……」

ビルレッティはそう言つて部屋を出て行つた。

ファリアナはビルレッティが出て行つたのを見て、じらりと話しかけてきた。

「ちょっとお金がなくて無理言つてこの宿借りたのよ。だから、この主人の依頼をやらなきゃいけないんだけど貴女が起きないと安心できないって今まで待つてもらつてたのよ。まあ、その間は給仕をしたたんだけだね」

どうやら、ギルドに報告はしていないらしかつた。

起きたセリーナは下に降りて主人に挨拶して、そのあとビルレッティに声をかけてからファリアナと一緒にギルドに向かつた。

ベヒーモス討伐の報告などうなつていたのかのちゃんとした説明

の為である。

「失礼します。報告に来ました」

ファリアナはカウンターにいる女性に向かつて言った。

「はい。依頼はどのよつなものでしょつか？」

そう言われファリアナは一枚の紙を取り出した。

「はい」

渡された紙を見て女性は吃驚したよつな声をあげた。

「緊急依頼ですか！」

その声を聞いてギルド内は騒然となつた。

「Uランクだつて？」「何かの間違いじゃないのか？」「緊急依頼とか初めて聞いたぜ」

いろいろと聞こえてくるがとりあえず無視して話を進める。

「ええつと。では、森の様子などどのような事態になつていていたのかをお教えください」

「はい。まず様子ですが、まるで生き物の気配がありませんでした。森はそこにあるのに何一つ気配を感じない状態でした」

ファリアナが説明している。その間セリーナはやることもなく話

を聞き流しつつギルド内を眺めていた。
いろんな人がこちらを見ている。

「では、その調査で分かったことをお教えください。」

「それにはこちらの子から」

「えつー。」

「きなり話を振られたセリーナは少し吃驚してしまって止まった。

「ええっと。教えてくれますか？」

「はい」

ナウティティセリーナは洞窟での一件を説明した。

「では、大老獣の一角である大老熊ベヒーモスがいたんですね？しかも、一般的な大きさの倍はあるような」

「はいそうです」

説明を終えると女性は依頼書を取り出してきて書き始めた。

「では、討伐依頼を出します」

「ちよつと待つてください。すでに討伐しました…」

そう言われた女性は大きな声をあげた。

「あり得ません！そんな、大きさのベヒーモスを一人で倒したって、いうんですか！」

「うう…。はい…。証拠にへし折った角を見せましょうか？今持つてきますし…」

そう言つて、セリーナは持つてきたベヒーモスの角を見せた。身の丈の実に数倍はある角を軽々と持つているのを見て吃驚したような声を上げたがすぐに対応した。

「理解しました…。一人で倒したんですか？」

「ええっと。私以外にこの人ともう一人、あと召喚契約した靈獸一匹でです」

嘘をついた。ここで本当のこと、つまり一人で倒したなんて言えばどうなるかはわかつたもんじやない。

だけど、少人数でも角のみを狙つてやればできることはないのだ。

しかも、ビルレッティとファリアナはA+ランクの冒険者だ。納得された理由の一つである。

「分かりました。では、報酬を計算いたしますので明日にお越しください」

そう言つて、ギルドを出た。ちなみに折つたベヒーモスの角はギルドに渡した。ついでにセリーナのギルド登録もしたが。

もちろんベヒーモスの死体の確認はそのあとすぐに行われて全て

の素材が高値で市場に出回った。まあ、余談ではあるのだが。

+++ + ++

その後、宿に戻つて、主人の依頼を行うことになった。

主人の依頼はグリフォンの羽を取つてきてほしいとのことだった。

グリフォンの羽はとても貴重な素材の一つでそれだけで金貨数枚の価値はあるといわれている。薬の材料としてもとても優秀で羽を使つた薬は万能薬としても有名だ。

主人の依頼はつまり万能薬の材料を取つてくれといつものなのだ。自分で用意さえできれば安く作ることができるのである。

そんなわけで、ギルドに行つた翌日、ギルドに赴き、お金（金貨4~5百枚はあつた）をもらつてからグリフォンの多く住む近くの山へと向かつた。

「そんなわけで来たのですが何かおかしくないですか？」

セリーナが言った。

セリーナが言つたことは的を射ているのである。確かにグリフォンはいたのだが大きさがあまりにも小さかつたり傷ついていたりどこかおかしいのである。

「確かにそうですね。何かおかしいですね。凶暴で有名なグリフォンが襲つてこないのもおかしいですが…」

ちなみにビルレッティは宿での手伝いのため来ていない。そのためファリアナが答えた。フェンリルは現在、天界に行つている。

なので、二人で来たのだが満足な羽を手に入れられるグリフォンがないのである。

「何が起きてるのよ…。以上な大きさのベヒーモスといっこの惨状といい…」

ファリアナがつぶやく。

セリーナは考えていた。自分が生きていたときにこのようなことが起きていたのか。

(確かにおかしいのは分かるんだけど…。まさか、何らかの力を与えている存在がいるのかしら…)

セリーナの考えは正しい。本来の進化の過程上であそこまで大きくなる前に何らかの騒ぎがあるはずなのだ。特にベヒーモスはその

凶暴性から大老獣に選ばれているのである。出てくるときには大体15メートルであり、それで猛威をふるう。

つまり、あそこまで大きくなるならそれこそ何かしらの被害がでているはずなのだ。それなのにギルドで聞いた限り最近はベヒーモスが出たなどという報告はなかったという。

明らかにおかしいのである。

「とりあえず、採取できそうなグリフロンを探しましょう。私たちの出来ることはすべきです」

セリーナはそういうと羽を採取できそうなグリフロンをファリアナと共に探し始めた。

+++ + ++ +

ルーキス・・アインスフィアは依頼であるグリフロンの羽を取りに来ていた。

グリフォンの羽は防具として使われることもあれば薬になることもある。つまり万能な素材のひとつなのだ。

その為、多くの単位も出るし、実力的にもちょいちょいよかつたのでルーキスはこの山に来ていた。

しかし、来てみると採取できそうなグリフロンがほとんどないのではないか。

その為、山の山頂付近まで登る羽目となつたのだが、最悪の事態になつていた。

キンッ！ カアン！ パキン！

何かを打ち合ひ音がする。

「なんでこんなとこにキメラグリフォンがいやがるんだよー。」

そう言いつつ応戦する。

ルーキスが山頂に登つてみたところそこには、人口的に作られた魔物であるキメラがいたのである。しかも素体はグリフロン。その為キメラグリフォンといわれる。

キメラは基本的に人工である。しかも、作ったキメラは人間に従順になるように躊躇られる為、このように襲つてくるなどあり得ない。

現状から見るにこいつがグリフロン達を襲つたようだ。

ガキン！

剣で応戦する。

「いい加減にしてくれやー」れじゃ満足に魔法も使えん！」

叫んでみるが伝わるわけもない。その為、魔法も使えない状況で応戦し続ける。

身体強化の身で勝てる相手でもないのは分かっているが、現状で魔法が使えるほど楽な状況でもない。

つまり、最悪の状況だ。ジリ貧でしかも自分の体力が多く削られていく状況。

（ああ、最悪の場合、俺はここで死ぬのかなあ……）

やう思いつつも出来る限り応戦する。

ミアが自分のことを待っている。だから死ねない。だけど、現状がきついことも事実だ。

そう思つてみると魔法がどこから飛んできた。

「【吹く風は業風。顕現せしはおおいなる神の息吹。我は風を纏いて全てを吹き飛ばそ】！…」「ラップレス！」

キメラグリフォンが吹き飛ばされたので、後ろに下がる。そうすると助けてくれた二人組が声をかけてきた。

「あの大丈夫でしたか？」

+++ + + +

「あの大丈夫でしたか？」

セリーナは声をかけた。

山頂に上がつてみたら何かが戦つている音が聞こえたので駆けあがつてみたらグリフォンらしきものと青年が戦つていた。

それを見たファリアナが瞬時に魔法を使い青年を助け、グリフォンらしきそれと対峙した。

「ああ、助かつた。まさか、助けが入るとは思つてなかつたんで」

「それはよかつたです」

そう言つて、セリーナは戦闘態勢をとる。ファリアナはすでに魔法の準備をしている。

「あれはいったい何なんですか？」

ファリアナは青年に尋ねる。

「多分ですが、グリフォンを素体としたキメラだと思います」

そう言って青年は戦闘態勢をとる。

セリーナは武器を匕首とか歯みつ、羽を出した。

「へえ。羽もちだったんですね」

ファリアナがセリーナに囁く。

「そりゃそうですよ。真祖が持つてないとかあり得ないでしょ」

セリーナは答える、準備する。

「自己紹介とかは後でしますから、今は、あいつを倒してしまいま
しょう」

そう言って、3人は戦闘を始めた。

第拾話 旅路で出会った青年（後書き）

相変わらず微妙ですね…。
もつと頑張らなく…

ズズズ…

作者「ては…。ついにビリですか！」

少女「私の部屋ですわ」

作者「誰…？」

少女「貴方が考えた人物でしょ？…忘れるんじゃありません！」

作者「ええええ…。まだ、ちゃんと出でないんだから、まだ出でこ
なくても…」

少女「いいえ、ここで出なくては私は今後ちゃんと出れない気がし
ますので呼ばせていただきましたわ」

作者「ええっとそうですか…。まあ、今後の予定としては貴女の出
演は結構先になっちゃうんですけど…」

少女「分かってますわ、そんなこと。だからここ、ここに出てきた
んですねわ」

作者「まあ、自分としては気に入ってるのでもつとまつやけさせ
た上で出したいとは思ってるんですが、どうですか？」

少女「最高じゃないですかー！ああ、早くお姉さまと会いたいですわー！」

作者「…………。なんかトリップしてますので今日せーの辺で……」

ズズズ…

つてなわけでここに感謝をコ一ークが1500、PVが8500を
いつの間にか越えました。

いくら感謝しても感謝しきれません。
今後ともよろしくお願いします。

第拾壹話 依頼完了！・一人と別れアカデミーに

はつきり言おう。勝負にならなかつた。

空を飛ぶセリーナとファリアナを見たキメラグリフォンは焦つた
ようでいきなり動きを雑にした。

そのおかげでセリーナは出した一本の片手剣で羽を切りつけた。
すると簡単に切り取れてしまい、キメラグリフォンは地面に落下して
ていつた。

後は、ルークスが落ちてきたキメラグリフォンに剣を突き立て戦
闘終了。

元々グリフォンはBランクの魔物だ。そこまで苦労するような相
手ではなかつたのだ。

このキメラグリフォンは良くてB+～A-ランクだ。

閑話休題。

「ふう。終わったね。ところで君は？」

セリーナは空中で切り取つた羽を回収しつつルークスに話しかけ
た。

「普通聞くより前に名乗るもんじゃないのか？まあ、いいや。俺は
ルーキス・・アインスフィアだ。ルークって呼んでくれ」

「そう。私はセリーナ・A…。セリーナ・Hインフニアよ。」
「ちはファリアナ・レビアンス」

「よろしく」

そう言つて自己紹介を終えるとファリアナがルークに問いかけた。

「アインスファイアつてことはスファイア王国の王子様?」

「ああ、まあな。今はアカデミーでのクエスト実習をやつしゆといだな」
(まあ、実際には家出みたいなもんのついでだが)

「そう。とりあえずなんだけど、この羽でも大丈夫なのかな?」

セリーナは疑問をぶつけた。すると、ルークではなくファリアナ
が答えた。

「問題はないはずだよ。キメラって基本的に素体が大もとになつて
作られてるから、この羽自体はグリフロンのものと何ら変わりない
はずだよ」

そう言いつつ、もうひとつ羽を切りとると、ファリアナはルー
クに手渡した。

「はい。ここに来るつてことは」れが依頼なんでしょう?」

「そうですね。ありがとうございます」

ルークはお礼を述べる。

「どうあえず下山しましょうか。ルーク貴方も一緒に行きましょう？」

セリーナはルークを誘つ。

「分かった。さすがに一人であんなんと戦つてたから結構疲れたんだ。一晩くらいは休みたい」

セリーナもう言って、一緒に下山した。

+++ + + +

「ただいま帰りました」

ファリアナが元気よく宿の扉を開ける。すると、ビルレッティが声を掛け返した。

「おお、お帰りさん。どうだった？」

「この様子がおかしかったですね。まあ、原因は排除してきましたけど」

「やうかい。まあ、一応ギルドについて報告しちゃな

セリーナとビルレッティは奥にすっ込んでいった。

「俺はどうすればいいんだ?」

「とりあえず、一緒にギルドに行こつか。ファリアナ、ギルドについて報告して来るよ」

「ん~。行つてらっしゃ~い」

送りだされたセリーナはルークと一緒にギルドに向かつた。

「ところで、お前の名前聖女様と一緒になんだな。最近は少ないって聞いてたんだが」

セリーナは突如話を振られたため反応がおかしくなった。

「えつ。うん。まあ、そうね…」

(その聖女は私らしいんだけどね)

「まあ、いいけどな。ところで君はそんな小さいのに冒険を?」

「ええつと。とりあえず、アカデミーに入学しようと思つて。あの二人はついての付添だよ」

「そりか。ん? アカデミーに入学するのか? 年齢制限あるの?」

その言葉にセリーナはうなだれた。

「やうだよね..。見た目って重要だよね..。私これでも18何だけ
ど...」

セリーナの言葉にルークは

「マジで! ? こつやあ吃驚だぜ。世の中いろんな人がいるもんだ」

そんなこんなで話してゐつた。ギルドに着いた。

ギルドに着いたセリーナはルークと一緒にカウンターまで行き、
山での事態を報告した。

聞いた話によると最近、よくこのよつた魔物の生態系に異変が起
きたりするようなことが各地で起きていたらしかった。
何が原因かも分からぬが凶暴化した魔物も多く出てきてしま
るので警戒が必要だそうだ。

そんなわけで報告したので、宿に帰ると主人に羽を渡してすぐに
寝た。

余談だが、その羽で主人の奥さんは元気になつたそうだ。

+++ + + +

翌日。

「じゃあ、アカデミーはそこにつに連れてつてもいいんだね

「はい、貴女達これ以上の迷惑をかけませんので」

「迷惑だなんて思つてないわよ。楽しかった」

わざやつて、一人と別れることになった。

「じゃあ、行くならこれを持つべきな。アカデミーに着いたら受付
に渡しな

そう言つて渡されたのは封筒だった。

「なくさないでね、結構重要なものだから

「分かりました、いろいろとあつがとついでござました」

「うるさいや、また縁があつたら余おつじやないか」

やつしり、しばらいくの間過^{ハシマリ}した友に別れを告げた。

「あの子、強かつたね。やつぱり本物はずいこね」

「うん。私たちももつと強くなろうぜ」

「ああ、もううんちかね」

この後、二人は世界的にも有名な二つの名付きのランク冒険者となる。『毒霧の葬者』ビルレッティ・ポイズンレアと『零下の風雷』ファリアナ・レビアンスといえば知らないものはいないといつぐらごまでの。

余談ではあるのだが。

+++ + + +

馬車に乗つて三日が過ぎたころ、王都の近くにある街までたどり着いた。

馬車はひじで一日休憩をとつてから王都に向かいつゝセコー^ナとルークは仕方なく宿を借りた。

「やつこや。お前武器を空間から取つ出したよな？あれどいつう原理だ？」

「簡単に言つと創つてあつた武器を空間で保存してあつてそれを取り出しつて使用してゐだけ。魔法の応用よ」

「そんな魔法聞いたことがねえよ」

「魔法は奇跡を起すものよ。だから、その魔法といつ現象で説明できないものはない。つまり、人の思い描くことができるすべてのことば魔法といつ現象で説明できるわ。まあ、はつきり言つつけようと原理さえ理解してれば魔力の足りる限りどんな現象でも起せるのよ」

「やうなのか。まあ、俺はほとんど魔法は使わんし、よくわからな
いけど」

借りた部屋は一つの為、一人で話しつつ暇をつぶす。

「町に出てみるか。暇だし」

「やうね。やるとは待つてもないし見て回つまじょ」

街に出る」となった一人はいろいろな店を見て回る」とした。

「ふうむ。武器とか防具を今更、買いたいわけじとはない。セリー
ナはなんかいるものあるか?」

「魔法具を扱つてる店があると助かるな」

「わうか。じゃあわういう店を探そつか」

そんなこんなで、そういう店を探すと意外とすぐ見つ
かつた。

「いらっしゃい」

「いいものありますか?」

「人それぞれだよ、それこそ。まあ、見てくれればいいよ。王都の
ほうが品ぞろえはいいだろうがね」

店内にあるものを見て回る。

武器から防具果てはアクセサリまで様々なものをとり扱つていた。

「アクセサリ系でいいのつてありますか?」

「ううん。あまりないね。物によつては呪いを持つてるやつもある
そうだしあまりお勧めできるものはないかな」

「そうですか…。ありがとうございました」

そう言って、店を出た。

「良かったのか？」

「まあ、仕方ないかな…。そんなに期待してなかつたし

「まあ、セリーナがよければいいんだが」

そうして二人は適当に食事をした後、宿で休み、次の日王都行きの馬車に乗った。

+++ + + +

それから馬車に揺られること一日。大きな城壁が見えてきた。

「あれが王都 メアスフィア だよ」

「大きいね」

（ラブリオール城より強固な城になつてゐるわけね。場所はラブリオールの首都だし）

「俺たちの祖先であるベイシス・クリストフ・ラブリオール様が父であり王であつたグロリアス・ババルドス・ラブリオールの暴虐を暴いて王都を一日で陥落させ、そこに築いた国がこのスフィア王国だ。そして、そこに築かれた国を繁栄させるために作られた機関が総合教育機関 アカデミー のぞ」

「そう。楽しみ」

セリーナは心躍らせていた。自分の知らない世界を知るためにここに来た。そして、これから世がどのように動いていくのかを…。

第零話 暗躍する者たち（前書き）

PCの調子が悪くて時間がかかりました。

第零話 暗躍する者たち

遠くにあるとある城の一室にてその会議は行われていた。

「では、方針は今まで通りゆっくりと進めるとのことでよろしいのかな、マスタークライン?」

「ああ。破壊で制圧するだけではすぐに反発勢力が来る。そうしたら甚大な被害が出るであろう?無駄な犠牲は払わざやるのがいちばんだらう?」

「そうですね、マスタークライン。しかし、奴はどうしますか?」

「放つておけばいい。今のところ奴が暴れてくれているから二つちらの行動がばれていないのだよ」

「わかりました。では、本田はこれにて解散!—!」

そして、集まっていた者たちは静かにその場から去って行き、残されたのは魔族の青年と執事、メイドの三人だけであった。

「主、お疲れ様です。いつもながら馬鹿な老人たちの対応お見事です」

「言つたな、ガルス。奴らは奴らなりに考えておるのだらう?…。まあ、よい。メリス、例のものは用意できてるか?」

「はい、すでにできておりますよ、『主人さま』

「 もうか、では、参るといよつか」

もう少し三人は、その部屋から歩き出す。

「 もう少しだら例の計画を実行する。お前たちが勤めていたり
ぞ、ガルスマリス」

「 「 はい」 」

「 では、今日はもう休むといつ

そうして青年は部屋へと戻る。

部屋に戻った彼は小走りつぶやいた。

「 さて、キングベヒーモスを倒すほどの実力者はまだやなものかな…。
期待はずれなんてことはやめてくれよ…」

青年のつぶやきは聞くと吸い込まれていった。

第零話 暗躍する者たち（後書き）

第一章です。

誤字等がございましたら、連絡をお願いします。

第壱話 アカデミー入学と新たな友達

無事、王都についたセリーナたちはまっすぐにアカデミーへと向つていた。

街中を歩きつつ、セリーナはルークと会話をし王都がラブリオールの首都であったハイゼンベルグであることがわかった。つまり、このスフィア王国とは旧ラブリオール王国であり、もうどこにもラブリオールという国はないということ。

なおかつベイシス・クリストフ・ラブリオールはスフィア王国の始祖でありサフィは王妃だつたらしい。

セリーナはあらかたの情報を聞き終えた頃、アカデミーにたどり着いた。

「じゃあ、受付に案内するよ。ついてきてくれ

ルークにそう言われ、セリーナはルークの後ろについてアカデミーの中に足を踏み入れた。

アカデミーの中の廊下はまるで王宮の廊下のように綺麗であった。

「綺麗ですね」

「まあな。国嘗だしな」

「そつなんですか」

「ああ。それに王国の騎士団や魔導師になれる確率もあがるしな」
そんな話をしていると受付にたどり着いた。

「「「」」」が受付だよ。俺はクエストの報告していくからまた後でな」

「はい、ここまでありがとうございました」

「うう言つて、ルークと別れ受付の人には話しかけた。

「どのような御用件でしょうか」

「入学の願書を提出しにきました」

「では、推薦状はありますか。時期外れの入学には冒険者の方の推薦状が必要です」

「そうなのかとセリーナは驚いた。しかし、そんなことを知らなかつたセリーナはそんなもの持っていない」

そう考へていると、ふとビルレッティとファリアナに渡された封筒のことを思い出した。それで渡された封筒を取り出しても推薦状が入っていた。

「これですか？」

「はい。ええと、ビルレッティ様とファリアナ様ですね」

そういうと受付は受け取った。その後、

「す、」いですね。ランクになれるといわれているお一方の推薦を
もらつてくるなんて」

「知り合いなんです」

そう答えつつ内心、吃驚していた。まさかあの一人がそこまでの人物だと思っていなかつたからである。

「そうですか。では、入学ですが了解しました。明日試験を行いますので明日の10時にこの受付まで来てください」

そう言われ、受付を後にする。

+++ + + +

受付に行き、クエストの完了を報告する。

「はい、確かに依頼品です。2単位認定です。これからも頑張ってください」

そう言われたが、進級用の単位自体はもう集まっているのだからあまり関係ないのだが。

そう思いつつもセリーナを待つために受付近くのベンチに座りセリーナを待つ。

待つていると授業がちょうど終わったのかたくさんの人があつ前を通り過ぎていく。

その中にミアの姿があり、ミアはルークに気付いたようで友達に声をかけてこねじる形相で迫ってきた。

「ちょっとルークー話したいんだけど、い・い・か・な！」

有無を言わぬ物言いに思わずたじろいだが冷静に対応する。

「あ、ああ。なんだ？」

「ルークは私と結婚するのが嫌なの……？」

上田使いでルークに問いただす。ルークは思わず顔を赤く染めつつ答える。

「そ、そんなわけないだろ！俺だってお前のことは好きだし……。このまま、結婚していいのかって考えたんだよーお前を幸せにできなんじゅ俺はきっと後悔するし……」

「えつー。」

それを聞いたニアも同様に赤面する。

「何してんのあなた達？」

振り向いてみると何かあきれたような顔をしているセリーナがいた。

+++ + ++

受付に背を向け歩き出そうと視線を前に向けてみるとルークが綺麗で可愛い女性と話している姿が目に入った。

青春してるねえ。と思いつつもまた後でと言われたので声をかけようと近づいていると

「そ、そんなわけないだろ！俺だってお前のことは好きだし……。このまま、結婚していいのかって考えたんだよーお前を幸せにできな
いんじや俺はきっと後悔するし……」

そんなルークのセリフが聞こえてきた。

まあ、なんといつか受付の近くでこんなこつ恥ずかしいセリフを
よく聞えるなあと考えつつ、声をかける。

「何してんのあなた達？」

声をかけたとたんルークと綺麗な女性が吃驚したのかビクンと肩
をはねさせた後、セリーナのほうを振り向いた。

「お、おお、すまん」

何が済まないんだと思うつも、とりあえずは女性のことを
聞いたほうがいいと思いセリーナは問いかけた。

「どちらの方は？」

「あ、ああ。」
第三王女で俺の」「、婚約者だ」

恥ずかしいのかじもつていた。

「」
つて、アカデミーに入るってんで一緒にここまで来た」

「よのしぐね！」

「ええ、よのしぐねセリーナ」

+++ + + +

ミアはルークが紹介したこのセリーナという少女が何者なのかを“視”てしまっていた。

カシミアの王族に伝わる魔眼がある。それは、そのものがどういつたものかを見極める魔眼である。つまり一種の透視なのである。カシミア家はこの力を使い小さな商人の家系だったものを一王族まで押し上げたのだ。

なおこの魔眼で見えるものは様々だが、主に売る商品の信憑性において使用し有名になつていつたのである。

ミアの受け継いだのは“物”を見る魔眼ではなく“人”を見る魔眼だった。

つまり、人の出身地などの情報を見ることができる魔眼である。あくまで情報だけであり思考までは読み取れないが。

しかし、ミアはこれを使ってセリーナの本当の名前を覗てしまつたのだ。

この少女が聖女セリーナ・A・アインスフィアであると。

だが、ミアはそれを胸に留めることにした。この少女がこの学校に入つて寮に入つたならば問い合わせようと思つたのだ。

もし、Jの場で聞いてしまえばルークの耳にも入つてしまつ。

もしそんなことになれば、王宮の中が大混乱に陥りかねない。

だから、ミアはその胸にその情報を収めた。

+++ + ++ +

街に出で一人と歩いているうちに次第に打ち解けあうことができた。特にセリーナとミアは好みが合つのか意外と仲良くなれた。

「お前ら本当にあつたばつかかよ。長年友達だつたみたいだぜ？」

「女の子には時間なんて関係ないの。息をえ合ひやえればどんな話だつてできるんだから」

ルークにそんなことをミアは言つていた。

セリーナにとつてそれは人生で初めての経験だった。

「ねえ、ニア・ルーク。友達になつてくれる?」

思わずそんなことをセリーナは言つてしまつた。恥ずかしくて顔は真つ赤である。

ニアとはそんなセリーナを見て笑うと一人でこういった。

「ああ、もちろんだ」「ええ、もちろん」

「つしてセリーナに新たな友達ができたのだった。

第壱話 アカデミー入学と新たな友達（後書き）

誤字等がありましたら連絡おねがします

第三話 入学試験でやつた（前編）

すみません……、遅れまくっています……。

第試話 入学試験でやつひやつた

翌日、セリーナは言われたとおりに寮付へと来ていた。

ちなみに、ルークに王宮に招くと言っていたが丁重にお断りし
アカデミーの近くの宿に泊まった。

朝になつて校門に行くとルークとミニアが待つていて「頑張つて」と応援された。

そんなわけで、今から入学のための試験が始まる。

+++ + ++

第一の試験は筆記。

数秘学や文学等やり方さえわかればできるものに関しては簡単に解いていった。

問題は魔法学と歴史学だった。現代の魔法のほとんどを知らない

セリーナにとつてこの問題はまさに地獄だつた。理論はいくら理解できてもどういう方法で発動しているのかがわかつていない。はつきり言つてボロボロだつた。

歴史学は知らない500年間の歴史に関してだけながら500年より前の歴史自体があまり問題となつていなかつた。魔法学同様にボロボロだつた。

余談だが、魔法学の中には古代魔法に関する問題も含まれていてその部分に関してだけは壳べきな解答をしていたそつだ。

第一の試験は面接。

聞かれる内容は「どうしてこの学園に来たのか」や「何になりたいのかな」等の普通の質問から、「武器は何を使つているか」「どういう魔法を使つているか」等のことまで聞かれた。

言えるところだけを答えつつ言えないところや言いつらうはぽかしたりごまかしたりでやり過ごした。

またもや余談だが、面接を受けた時の受け答えがあまりにも綺麗すぎてどこの令嬢だと思われていた。

第三の試験は実技。実技を先にやるべきじゃ?とセリーナは思つた。

まずは、教師との模擬戦。使つるのは貸し出された木製の武器だが。ちなみに使つた武器は斧槍型のものだ。

教師との戦闘では本気でかかつてこと言われたので本気でやつたら教師が吹つ飛んで行つてしまいそのまま終了。

ちなみに、この戦闘での評価は問答無用で満点だった。

次に魔法試験。なんでもいいから使ってと言わされたので、古代魔法でも定評のあつた魔法をいくつか発動した。どれもこれもが高火力過ぎて学園が大きく揺れたりした。

ちなみに、この魔法の評価も満点だった。

余談ではあるが、戦闘を担当した教師は元Aランク冒険者であつたとか。魔法のほうを担当した教師は使われた魔法の出来に感激しそぎており、セリーナが使った魔法が古代魔法とは気づいていなかつた。

これにて、アカデミー入学試験は終了したのだった。

+++ + + +

そんなわけで入学試験を終え出て行つたセリーナは、ルークとミアと合流し街を歩いていた。

「入学試験どうだった？」

「筆記がちょっと危ない感じかな…」

「そう、でも大丈夫じゃないかな。話す感じそれ以外は大丈夫だつたんでしょう」

「そうなんだけど…」

「いいじゃん。発表は明日だ。それまで、暇だろ?」

「そうね」

そう言って、街に繰り出した。

+++ + + +

セリーナたちがそんな感じで街を歩いていた時、アカデミーでは教師の中でも位の高い教授たちが集まつて会議を行つていた。

「此度入学試験を受けたセリーナ・エインフェリアについての報告

会議を開始したいと思いますが、皆様、資料は回っていますね？」

そう確認したのはこの学園の理事長であり、王宮付きの魔導師長でもあるカリエラ・エンブリッシュである。

「では、おほん。此度、入学試験を受けたセリーナ・エインフェリアですが、実技である戦闘・魔法に関しては担当教諭から文句なしの満点が出ています。理由ですが、戦闘では、始めた直後に模擬戦相手であつたガンティース教諭が一撃で倒されています。魔法では担当教諭であるマリス教諭を驚かせるほどの魔力量と制御などを見せていてね」

話を聞いていた教授たちが一斉に騒ぎ出す。

話に出たガンティース教諭はここ最近入ってきた教諭だが、実力は冒険者ランクAという凄腕だ。むろん、少しは衰えてはいるものの、彼を一撃でしかも一瞬で倒せるものなどそうそういない。

次に、マリス教諭だが、これまた最近宮廷魔導師となつた人物だが、魔法に関しての知識とその技能は魔導師長でもあるカリエラに継ぐとまで言われる人物である。そのマリスを驚かせるほどの人物などほとんどないだろう。

そんな二人に満点を出させるセリーナ・エインフェリアとはどんな人物なのか。それこそ不思議なものである。

「静かに、話が先に進みませんよ。おほん。では、次に面接ですが担当者からは『どこかのお嬢様なんじゃないか』との声を聞かされました。調査を出しましたが、たぶん出てはこないでしょうが」

カリエラはエインフェリアという家名が貴族や王族の中にはないのを知っていた。それに有名な商家なども把握しているカリエラの記

憶にエインフニアといふ家名は一度も入ってきていません。では、彼女はお嬢様ではないのです。

「では、最後に筆記ですがこれが問題でした。数秘学や文学等の基礎学は完璧でしたね。しかし、歴史と魔法がちょっと違ひ意味でひどかつたんです」

「ふむ、どのようにひどかったのじゃ？」

聞いたのは、便宜上理事長代理であり校長でもあるパリオット・G・クルメティア。カリエラはすぐに答えた。

「歴史ですが聖女様の出でくる500年前の問題はすべてあつているのですがその後の500年は一つも正解がないのです。魔法に關してもそうです。魔法の基礎はできているのに現代魔法の問題はすべてバツ。ついでに古代魔法に關しての部分はすべてマルというおまけつきです

「どのような試験結果からこのセリーナ・エインフニアを特待生として迎えることを検討したいのですが、よろしいでしょうか？」

「どうこういじゅう？ 筆記試験はひどいのじゃら？」

「いえ、そこいら辺はどうでもいいのです。後からでも教えれば済むことです。重要なのは古代魔法に關しての知識を多く持っているという可能性です。我々の中でもそれなりに古代魔法を研究しているものや使用できるものもありますが、ずいぶん昔に廃れた技術です。なかなか、分からぬ点が多いのですよ」

「ふむ、では、古代魔法を扱えるかどうかの確認を本人に取り特待生として迎えるか、普通の生徒として迎えるかを検討しようかの？」

では、カリエラ理事長さのよつにお願いしますぞ

「わかりました。ではこれにて会議を終了します」

そうして、アカデミーの会議は終わった。

このあと、セリーナのもとに連絡が入り、またいろいろ聞かれたのは言うまでもない。

そんな理由でセリーナは特待生としてアカデミーに入学することとなつた。

第3話 入学試験でやつひやつた（後書き）

テストが近いので更新が遅れます。

誤字等がありましたら連絡お願いします。

第参話 アカデミーの授業とランキング

試験の翌日。セリーナは理事長室に呼ばれた。ルーク達と街を回つて宿に帰るとアカデミーからの使者が来ていていろんなことを聞かれた。ちなみに嘘をつくなどと言われすべてはかされた。聖女であるといふことはもちろん隠してはいたが。

そんなわけで今、セリーナは理事長室の前に立てる。

「ううう…。ノックすればいいのかな…？」

そんな感じで迷つていると中から声が聞こえてきた。

「そんなとこいないで入つてきなさい」

「はい。失礼します」

セリーナが入るとそこには若いエルフの女性だった。

促され席に座ると面倒紹介から始まった。

「あなたがセリーナ・エインフェリアさん？はじめまして、アカデミーの理事長で王宮付き魔導師のカリエラ・モンブリッシュです」

「セリーナ・エインフェリアです…。それで、私はなぜここに呼ばれたのでしょうか？」

「あなたの試験結果と対応についてですね」

セリーナは息をのんだ。まさか何かやつちやいけないことをやってしまったのだろうかと不安そうな顔をしていると

「緊張しなくていいわ。入学試験は合格ですよ。ちなみに第3学年に入つてもらいます」

「わかりました」

「で、それでなんだけど、あなたを特待生として迎えるから、授業料とか寮費とか全部タダになるけどいいかしら?」

何を言われたのかわからないセリーナは茫然とした。特待生何の冗談?

「ええっと。理由はあなたの知識を教えてほしいって言うのが大きいかな。講師として古代魔法の授業をしてほしいのよ。この学園のシステムは知ってるわよね?」

「はい。生徒の中でも優れた知識がある場合は、研究室を持たせてもらつたり、講師をしてもらうんですね?」

「そう。それで、古代魔法の知識を教えてほしいわけよ。理論はある程度資料が残つててわかつても実際のところ、古代魔法の使い方とかほとんど知られてないのよ。

なのにあなたは古代魔法完璧に覚えてるみたいだし教えてほしいわけ。もちろん講師としての給金も出るわ」

「ええっと。いいんですけど……」

「ありがと。その他にもアカデミーの仕組みを書いた資料を渡しち

やうわね

渡された資料には『総合教育機関“アカデミー”的全て』と書かれていた。内容は授業の仕組みやら学園の地図やらだった。

「やういえば、ギルドカードは持つているかしら?」

「はい、持つてますけど」

「じゃあ、貸してくれる?」この学園は生徒の管理をギルドカードで行つてるからね。今書き変えちゃうわ

ギルドカードを渡し、しばらく待つ。

「はい、これで今日からあなたはアカデミーの生徒ね。今日は授業はないから、その冊子でアカデミーの授業スタイルをつかんでね」

そう言われ、理事長室をでる。

出ると、メイドらしき人物がいた。

「セリーナ・エインフェリア様ですね。寮までご案内をさせていただきます。ついてきてください」

「あ、はい。お願ひします」

そして、セリーナは寮の部屋へと向かった。

+++ + + +

寮に帰り冊子を開く。

『クラス制度や進級について

アカデミーではクラスという分け方をしない。そのため、自分が取りたい授業のみを取り単位を取得する。

この単位は一定以上であると次の学年に上がるようになっているが単位の総量がその次の学年の分まで達していた場合飛び級することもある。なお、これを取らなければいけないと単位ではなく、個人の力量に応じ授業をとることとなっている。

しかし、この単位は学園で受けられる授業のみで補えないようになつておき、その分を学園ダンジョンの攻略やギルドのクエストでの単位を取得する必要がある。もちろん、非戦闘員の人にはそれに応じたクエストなども用意されているのでそれをこなしてもらいつ。なお、毎年大勢の生徒が単位不足で年末にクエストに出かけることが多いのでそんなことにならないよう取得することをお勧めする。

『

すごい制度だと思いつつ、読み進める。

実際に様々なことが書いてあったがその中で気になったものがあつ

た。

『戦闘系授業を受けている生徒の義務について

戦闘系授業を受けている生徒はその力を把握するためにランキン
グバトルを行つてもらつてゐる。これは絶対参加であり、学園側か
らの指示でやつてもらつてゐる。

しかし、本人たちの同意があればその限りではなく戦闘を行つて
もらう。

このバトルでのランキング上位者には単位が与えられる。ちなみに
に上から五人はSランクと呼ばれる。その五人以下10人はAラン
ク。その10人以下15人はBランク。その15人以下20人はC
ランク。その20人以下25人はDランク。その25人以下30人
をEランクとし、Sランクから10・8・6・4・2・1となつて
いる。

しかしながら、死亡者を出すような戦闘は禁止されているが死ぬ
ギリギリまでなら最良の医療術師で治すことができる。参加する諸
君がんばつてランカーになつてくれたまえ。』

すごいことをしているなあと思つた。

模擬戦ではなく本気の戦闘。教師が判定をするために近くにいる
ため死亡者は今のところおらしい。

「参加しちゃつていいのかな私…」

そんなことを考えつつ、ベットに横になる。

家具は備え付きでしかも部屋は王族などの人が入ることのできる
上級の寮だつた。

疲れが出たのかセリーナはベッドで横になつたまま寝てしまった。

+++ + ++

そのころ、スフィア城の奥深くにある庭園では少女が舞い踊っていた。

「ああ、お姉様がようやくメアスフィアまで来てくれた。ああ、すぐ会いたいよ~」

「何が嬉しいのですか?」

「何がって、暇をつぶせる…おほん!もとい大好きなお姉様にもうすぐ会えるかもしれないんですよ。もう、待ちきれないわ~」

「はしゃぎすぎだぞ。嬉しいのはわかるがほかの精霊まで巻き込んで踊らんぞくれ、城が揺れるわ

そう言つて出てきたのは国王であるプラムス。

「『』めんなさいね～。でも、抑えきれないのよ～。」この400年近く大きな戦闘とかもないし、暇つぶしで行つたアカデミーもすぐに連れ戻されちゃう～

「何もないのはいいことだよ。それにしてもお姉様とはどうしてこうしただ？」

「簡単な話よ～。セリーナお姉様が帰つてきたの！今、この王都にいるのよ～」

その言葉に「ラムスとメイドは驚いた。

「それは誠なのか！」

「ええ、でも騒ぎ立てちゃダメよ。クリスちゃんもね。お姉様だって静かにいたいだろ？！」まあ、一度ここに呼ぶつもりではあるけど

「

「わかった…。お前いいな」

「はい。その時までにもうときれいにしなくちゃ！」

クリスと呼ばれたメイドはそのまま掃除をし始めた。

ラムスはそのまま少女と話を続ける。

「ところで、お前さんはどうあるんだね？セフィリア・ティス・アインスフィア初代王妃殿下」

「もちろん、パーティの用意よー。」

その時の少女、セフィリアの顔はものすごく輝いていた。

第参話 アカデミーの授業とランキング（後書き）

次回はセツーナがミアに問い合わせられます。

第肆話 ミアの問い合わせとセリーナの答え

セリーナが寝てしまつたころミアは寮の部屋でセリーナが合格したことを見た。そして、特待生として迎えられ、上級の寮である貴族寮へと入つたことも知つた。

だが、今すぐ部屋に行つても、きっと大変だらうと思い、夜に尋ねることにしたミアは、暇をもてあまし、魔法の研究することにした。

ミアの学内ランクはSランク3位という最高位クラスの位置にある。しかしそれは、普段のたゆまぬ鍛錬と魔法の研究の結果であり、決して才能という一言で済ませられるものではなかつた。

ちなみに彼女の戦闘スタイルは魔法を主体とした接近戦である。武器は槍であるが、操作の魔法により空中での行使をし、しかも6本もの槍を同時に扱うという離れ技やつてのけるのである。しかし、それほどの数を行使する場合自分の近くでなければならぬといふ理由から接近戦をやつてるのである。

もちろん、手で使つても強い。普段は2本の槍を自らの手で繰りランкиングでの勝利をしている。特別に強い相手でなければ滅多に使わないものである。

というわけで、彼女は今時間をかけて、魔法を研究している。今研究しているのは現在魔法の呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱である。

現代魔法は古代魔法と違ひ形骸化され誰でも簡単に強い魔法が使えることが魅力である。強い魔法を使うのも簡単ではあるが、呪文が長くなつていつてしまつのが難点であるため前衛の人間がいなけ

ればやりやすいのだ。

ミアのように自身が強く、詠唱もできる集中力を保てるならいいのだがそういう人物は少ない。特に魔法を使う戦士が多いこの世界では、戦士の魔法は基本的に弱く詠唱の短いものが好んで使われている。強い魔導師の魔法はあまり使って行ける人物は少ないのである。

そのため、ミアの研究している呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱といった技術の研究は多くされている。しかし、どちらの方法も威力が下がり、下級の魔術と同程度の威力になるのに使う魔力量が多いという何とも不名誉な状態なのである。

それを解消する研究をする方法を探すのは現代魔法を研究している人たちにとって一番の命題なのである。

もちろん、新魔法の研究もされてはいるが現状では呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱の研究が一番多いのである。

ミアもその研究者の一人なのが個人としては成功段階まで來ていた。槍の操作に使われている魔法は呪文詠唱破棄を利用している。しかし、その魔力変換効率は程100%近い値でできているのだがこれは現状では操作や飛行といった攻撃魔術ではないものに限ってしまっている。論文としてアカデミーには提出して公表はされているものの、やはりあまり参考になつていているわけではないらしく、攻撃魔法への転用はいまだされていない。

しかし、古代魔法ではこの呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱という技術はほぼ完璧に確立していた。現代魔法と違い古代魔法は魔力の違いで威力を分けていた。その為、呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱を使用するときは流し込む魔力を少し多くすれば解決していたのである。

単純といえば単純なのだが。

そのため、ミアは古代魔法と現代魔法を組み合わせることで呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱が可能になるのではと考えて結果として上記のような結果を得たのだが、やはり現状では使い勝手が悪いのが難点であった。

まあ、そんなわけでミアは自身の研究を進めている。操作等の魔法の呪文詠唱破棄での変換効率100%とはいえ複雑な命令系統が確立できているわけではない。あくまで簡単な操作での100%であり、複雑な命令での試行となると効率は30%程度まで下がってしまうことすらあった。

そんな彼女ではあるが、マルチタスク複数同時思考による一重詠唱等のスキルすらある。

しかし、呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱は最大の命題である。現状では、誰一人として攻撃魔法への実用はできていないのであった。

「変換効率は最大で80%が限度でしょう…。操作なんかの簡単な魔法なら100%近くまでは行けてもね…」

先にも言ったとおり呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱を使用すると威力が下がってしまう。しかし、この二つの魅力は高速での魔法発動。その為、威力が多少下がる程度なら気にしないであろう。ちなみに、80%というのは、このあとセリーナとともに完成させた完全に呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱が確立したときの実際の変換効率である。

そんなわけで研究に没頭していたわけだが、ふと気がついて時計を見るとすでに18時であった。

時間もちょううどこいだうと考え、ミアは食堂へ行き2人分の食事をもらひつとセリーナの部屋へと向かつた。

+++ + ++

ドアをノックする音でセリーナは起きた。どうやら誰かが訪ねてきているらしい。

「ふあーい。今開けますね~」

ドアを開けると、ミアがお盆を魔法で宙に浮かせ扉の前にいた。

「「めんね、こんな時間に。もう少し飯食べた?」

「まだですね」

「そひ。よかつた、無駄にならなくて」

どうやら、ミアは食べたかもわからないセリーナの分の食事まで持つてきていたようだ。

「ありがとう」

「ううん。ここ。私としては別の本題があるからそのついで」

「？まあ、いいやあがって」

せうじつじ、セリー・ナはニアを部屋にあげた。

入ったばかりで最低限必要なもの（理事長が用意した）しかなかつたが机と椅子があつたのでそこに座り食べる」ととした。

食事の挨拶をそのまま無言で食べる。一人でいるのに無言で食べるのに気まずさを感じるセリー・ナだったがニアの雰囲気がかりどもじやないがしゃべりかけることはできなかつた。

食事が終わり、一息つくとよつやくニアが声をかけてきた。

「聞きたいことがあるけどいかしら？」

「答える範囲でなら」

無意識に答えた。

「ここに来るまでにもいろんな人と話をした。そこで覚えたのは必要以上に自分を語らないということだった。だからこそ、答えられる範囲内をはるかに超えた一言が飛んできてセリー・ナは固まつてしまつた。

「なぜ、あなたが今ここに生きているのかしら、セリーナ・A・アインスファイア様？」

「へ？」

飛んできた言葉に思わず固まる。

なぜばれた？なんでわかつたのなどの疑問符が頭の中で飛び交っている。

しばりぐ、そんな状態のまま答えられる時間がすぎる。

時間がたち少し落ち着いたセリーナは恐る恐る聞いた。

「ええっと、なんでそんなこと言つのかな？」

その言葉にニアは平然と答える。

「なんで？簡単ですよ。私には人の情報を見る事のできる魔眼があります。ルークが連れてきた女の子が何者なのか気になつてつい使つて見てしまつたら、紹介された名前は偽名表記で本名はセリナ・A・アインスファイアよ。何の事かと正直自分の目を疑つたわ。まあ、名前だけならおんなじ名前はいるかもしねいわ。でも、私の魔眼は、その人の持つ二つ名までを見ることができるわ。だから、聞いたのなんで、歴史上死んだはずのあなたがここにいるの？」

セリーナはため息をつき、どう答えようか考えた。

だが、深く考へても仕方ないと思い、すべてを正直に答へる」と
にした。

「わかつた。全部教えてあげる。
500年前の魔王騒動の真実と私がなぜ生きているのか。
正直、思い出したくなかったけど曖昧な記憶の整合性がさつきま
で見て夢で整つたみたいだし」

一息つき再びいつ。

「今から語るのは、魔王ゼノンと私の話。
聞かなきやよかつたなんて言つても遅いんだからね」

そうして、セリーナは語り始める。
ねじ曲げられ、違う形で伝わっている歴史を。

第肆話 // アの問い合わせとセリーナの答え（後書き）

説明が思つた以上に長くなってしまったのに、問い合わせはたった数行に…。

次回は、セリーナの記憶回想による魔王ゼノンとの会話とセリーナの選んだ結果です。

次回は早めに投稿できるといいなあ…。

第五話 魔王の真実

魔王と対峙している。私はあいつを倒すためここにいる。

「ゼノン。あなたは私が倒さなきやいけないんだけど、先に聞かせてくれないかな？何であなたは国を襲うの？」

疑問だった。私にはこの魔王が国との戦争をしているのか。確かに見た目から魔王と呼べるほどの威圧を放ち、その能力も魔王にふさわしいのもあつたし。

「語るまでもないな。もし、知りたいのならば我を倒せばよからう。されば教えてやる」

「やつ。なら戦いましょう」

始まつた戦いは熾烈を極めた。近くに倒れていたベイはすぐにわき寄せてあつたから問題なし。

魔王を倒す手段はすでに決まつている。これを使うならゼノンが油断しているときを狙う方が良かつたけど、私にも思うところがあつてこじうして剣を交えている。

でも、結局わからなかつた。だから、私は奴の首筋に歯を立て噛み付いて術式を流し込んだ。

流し込むと同時に自分の中から何かが抜けていく感覚もある。これが副作用だろ？と思ひながらも流し込み続ける。

すべてを流し込み終わりゼノンから離れる。

「何をしたのだ」

「破滅の術式を流し込んだの。いくら不死身といわれるあなたでも
破滅から逃れることはできないでしょ？」

「何をばかな」としているのだ。貴様が命を失うかもしけんもの
だぞ」

「わかつてゐよ。でもね、これが私の覚悟だ」

そうこうと、ゼノンは黙り込んでしまった。

しばらぐ経つと魔王の体が少しづつぶれて見え始めた。

「なるほどな。まあ、これが私の運命だらうな」

あれ？ゼノンの口調が変わった。

「私は君たちにとってはわかりやすい的だったといつわけか…。滑
稽だな」

「どうして？」

「戦いを始める前に聞いたな。何故国を襲うのかと。答えようか。

現ラブリオール王を倒すためだよ。

それが私の目的だ」

それってどうこと?

「いいだろう。教えようか。

現ラブリオール王・グロリアス・ババルドス・ラブリオールは自國に住む人間以外の種族を奴隸とする法を出そうとしていたのだよ。ついでに言うとな、奴はこの大陸すべてを自らの国としようとしておったのだよ。

私のやりたかったのはそれを止めること。だが、奴はそういうことを表に出そうとしていなかつたために私はわかりやすい敵になってしまったのだよ

嘘でしょ…。現在を記せし禁断の書庫 セカンドライブラリ にそんなこと記されてない。

「ほう、アインスフライアの一族か。まあ、よい。私にとつてそのほかの種を守れるものがいればよかつたのだが、もう無理であろうな。そなたはどうするのだ?」

「私は…」

私はどうしたい…。……。

「私を封印してもらえない?」

「何故だ」

「簡単よ。私はラブリオールの王族に逆らえない。何かあつた時に私は従うしかない。それに、そこにいるベイは絶対に良い国を作れるわ。

だから、私は信じる。彼が国を変えてくれるって。だから、私は
いない方がいいの。きっと、私は邪魔になっちゃうから

「いいのか?」

「うん。お願ひ。ああ、私を封印したあとベイに真実を伝えてあげ
て」

「いいだらう。私の日記を渡そつ」

「ありがと。じゃあ、お願ひ。でも、私はあなたが嫌いよ。全く最
初から真実を言えばいいのに」

「私にもこりこりあるのだよ。では、眠れ」

「うん。じゃあね。みんな……」

そうして、私の意識は消えた。

+++ + + +

「これが真実。魔王がやりたかったのは人間以外の人種を守ること」

セリーナが語り終えるとミアは黙り込んでしまった。

「どうしたの？何か納得がいかなかつたの？」

「違うの。今の話を考えるとなぜラブリオール王国が聖女様が魔王を倒してからすぐにベイシス様によって倒されたのかの整合性があるの」

「どういうこと？という顔をしたのはセリーナだつた。確かにこの国はスフィア王国と呼ばれているのは理解していた。でも、ベイシスが王国を倒した？なんで？といった疑問があるので」

「ええっとね。

聖女様…セリーナが魔王を倒した一か月くらい後にね、ベイシス様によつて革命が起きたの。革命を起こした理由は伏せられていてわからぬのよ。

でも、今の説明を考えると仮説だけど答えが導き出せる。

ベイシス様は最後のラブリオール国王の暴虐を止めるために革命を起こしたことになる。

それなら、整合性がとれるの。これはちよつとかなりヤバい真実ね

セリーナはミアが話していることを聞いて思つた。

なんで、伏せられたんだね？」

「伏せられた理由は他の国への体裁かな。後、魔王とベイシス様が話しているはずなんでしょう？なら、あなたのやつたことも知ってるはずよね。それがなかったことにわれてるのも、きっとそれによつてばれてしまつことを考えて伏せてるんだと思つ。されば、本当に歴史を覆すよつな話ね」

的確にいたえていくミア。セリーナは、

「わ…。とりあえず、ここに話をしたことは内密にお願いね

「わかつてゐわ。じゃあ、明日は一緒に朝ごはん食べましょ」

セリーナは静かに泣いていた。その後、静かに眠りこついた。

「べい。あなたも悩んだんだね。ありがと、この国を守ってくれて

セリーナは静かに泣いていた。その後、静かに眠りこついた。

第五話 魔王の眞実（後書き）

なんか、ものすごく書いていて、整合性が取れてない気がする…。
それに、何か無理やり話を進めてしまった気も…。

次回からは学校に行きます。ついていてセリーナは特待生なので、
かなり楽に単位が楽に取れます。
とりあえずランキング戦までが第一目標です。
早めに書ければいいな… ^ ^ ;。

〔2011／10／22〕 変換マークを修正

第陸話 授業

ニアに問い合わせられた翌日、セリーナは理事長室に前に来ていた。クラスというものが存在していないため、どうするべきかなどは全く分かっていないためだ。

取る単位数は少なくともいいと理事長からは言われているものの、さすがに取れる分は取らないといけないし、そもそもどんな授業があるのか全く説明を受けていない。

だから、それを聞くためにここまで来たのだがやつぱり入り辛く、数分間扉の前で固まっている。

意を決し扉をノックしようとしたとき。

「いい加減、入りなさいな」

「はい。失礼します」

中に入るとカリエラは紅茶を飲んでいた。

「やつぱり来たわね」

「そうですね。知ってる人はあなたしかいませんし……」

「まあ、いいわ。もともと呼ぶつもりだったたし。出る授業を決めてもらひ」とについては説明が必要でしょ？」

「はい」

セリーナは迷わずうなずく。「」のまま、放置されても何もできない。なので黙つて話を聞く。

「授業に関してだけど、あなたは魔法学と歴史学のみでいいわよ。後は戦闘系の授業すべて取つてもらうわ。それだけね。」

「後、やつてもらう授業だけど後期からやつてもらうわ。今は初秋の月だからすぐにせつてもらうことになるわ。」

ギルドで依頼を受けるときは後で集中講義をやつてもらうことになるから気をつけてね」

「わかりました。では、今日は授業はありますか?」

「自分で見て頂戴。はい、これが授業予定表」

そう言つて予定表を渡された。

「今日は火曜よ」

火曜の欄を見る。あつたのは、実戦式戦闘講習と戦闘訓練。見えてみるとほぼ毎日戦闘訓練の授業が組み込まれている。

「わかりました。戦闘訓練は無理に出なくともいいんですか?」

「ええ、出る必要があると思つている人だけが出てるわね。まあ、戦闘をしない人くらいしか休まないけど」

「それは暗に出てひいて言つてます?」

「出でくれるならいい刺激にはなると思つてね

「わかりました。出させていただきます」

「助かるわ。ああ、それと、近々大規模なランキング戦が行われるわ。必ず参加してね」

「わかりました。……ランキング戦って一年を通して組まれてるものじゃないんですか？」

「ランキング戦。それは生徒の実力を測るものであり、毎日行われている。」

「そうなのだけれど、今回のは毎年行っている闘技大会のようなものよ。普通のランキング戦と違つて大きく順位の離れた相手とも戦える。それがいつものランキング戦と違うところよ。
あなたの場合、今後の相手を見極めるの必要だから絶対にでてもらうわ」

「わかりました」

「ああ、このランキング戦はS・Aランクに入ってる人は強制参加よ。まあ、Sランク一位の人は理由があつて出ないけど」

「そうして、そのあとも少し会話をしたあとセリーナは理事長室を後にしました。

+++ + + +

セリーナは今、実戦式戦闘講習の講師と相対していた。実戦式戦闘講習の講師はセリーナの入試を担当した講師だった。名前はガンティイス。もともと冒険者で紅余曲折あつてこのアカデミーにきた講師だった。

ではなぜ、セリーナがいまそのガンティイスと相対しているのかといつと。

授業を受けに来て、始まつた戦闘訓練を見ていると講師がやつてきてしまつたのだ。

『セリーナだつたか？ここに本当に戦つてものをちゃんと見せてやりたいから手伝え。できるだろ？』

と言われ仕方なくやるはめになつた。

使うことになつたのは大剣。ハルバートじゃないのか？とも言われたが、どんな武器でも扱えるセリーナにとってはどんな武器でも問題ない。そのため、大剣を使うことにした。

「じゃあ、お前ら見とけよ。やるぞ」

見ている生徒にとつてはセリーナは初めて見る生徒だ。その生徒がいきなり、ガンティイスの相手をしろと指名を受けた。だからこそ、なぜ?といふ顔をしたものがほとんどだった。

しかし、戦闘が始まるとその顔は変わることとなる。

はじめに仕掛けたのはガンティイス。使うのは片手剣。袈裟切りに振り下ろす。セリーナはそれを武器で受け止めた。

そして、受け止めたかと思うと次の瞬間にはガンティイスは次の攻撃に入つており、それを見越したかのようにセリーナは受け流す。受け流すとすぐに流れのままガンティイスに向け、大剣を水平に振る。ガンティイスはそれを楯で止めるが、その中身はあり得ない手剣を振りかざす。それをセリーナは大剣をすぐさま地面へと突き刺し、体ごと避け距離を取る。

まさに実戦。普段であれば見ることも出来ない様な高度な技術満載の戦闘が目の前で行われている。切り方一つを取つてみても相手の隙を見抜き的確に入れる。それをうまくかわし次の攻撃に移る。その繰り返ししかしていらない戦闘だったが、その中身はあり得ないほどの高度な技術が万歳だつた。

10分ほど経ったころガンティイスが戦闘をやめる。

「ふう。助かつた。普段見れない技術を見せることがなかなかできんからな」

「そうですか。役に立てたようでも嬉しいです」

その日、ガンティイスのもとには彼女は何者かという生徒が続出し

た。

もちろん、答えられるのは編入生といつことだけなので聞きに行つた生徒は納得のいかない顔をしていたそうだ。

+++ + ++

その日、ルークはブラムスに言われ城の奥まで進んでいた。

「父上は何がしたんだろうな……。この奥にいった何があるんだ……」

何も知らされずただ行つて来いと言われた。

その為、奥へ奥へとその歩みを進める。

しばらくすると、庭園が見えてきた。

「こんなところに庭園なんてあつたか？」

確かに城は広かつた。だけど、こんな庭園は見たことがない。

「いや、一度だけ来たな…」

小さい頃に一度だけ迷い込んだ」とをルークは思い出した。それは、もう遠い記憶でほとんど覚えていなかつたが。

ふと思いつ返したよつて庭園の方を見るとそこには少女がいた。

「あら、こらっしゃー。ここにあなたが来たつてことはブラムスが行けつて言ったのかしら?」

国王でもあるブラムスを呼び捨てにした。それは、ルークには信じられなかつた。

「あなたは?」

「わへ、一度会つてゐるのに忘れるなんてひどいわね。まあ、いいけど」

そう言つて、無邪気に少女は笑う。

ルークは言われた言葉に疑問を抱かなかつた。なぜだか、それがものすゞくしきづいたのだ。

「あなたには、お姉さまをこう呼んでほしいのよ

と少女は言つた。

「お姉さま?誰ですか?」

ルークは少女の頼みを聞いた。何の疑問も抱かずに少女の願いをかなえようと。

「あら、あなたが王都まで連れてきてくれたんじゃない。その人をここまで呼んで？」

「はい、わかりました。ところであなた様いったい……？」

ルークは最後に問うた。少女が何者なのかと。少女は答える。

「セフィリア・ティス・アインスフィア。初代王妃にして、この国の守護精霊よ。ちなみにあなたと召喚契約している楯の精霊は私の生み出した精霊よ」

第漆話 再会（前書き）

久しぶりに早い投稿です。

〔2011/10/22〕変換ミスを修正

入力ミスを修正

第漆話 再会

最初の授業から一週間程経つた。受ける授業は魔法学と歴史学だけで後は戦闘系の授業。

出る授業すべてで模擬戦をやらされ、有名になりたくもなかつたはずなのに有名になつてしまつた。しかも教師が懇切丁寧に教えてしまつていた。

その為、歩いているだけでも好奇の視線に曝されるセリーナはうんざりしていた。理事長が対策は打つとは言つてくれてはいるもののそう簡単にはいかないのも事実である。

だけど、今日は違つた。夜に王宮に招待されたのだ。ルーク曰く『友達なんだから一度はね』とか言つてはいたものなのにあるのだろうとセリーナは思つていた。

でも、訪れるのは一応500年前と変わらぬ姿を見せる城。名前は変わつてもその城が示すものは何も変わらない。それに、ベイシスの募参りもできるかもしけない。そう思ふと、セリーナは嬉しくて仕方ないのだった。

そうやって、セリーナは今日もアカデミーに行くのだった。

+++ + + +

その頃、王宮奥の庭園では着々とパーティーの準備が進められていた。

少女・セフイリアは嬉しさの余り踊っているのだが、準備をしているメイド達はどこなく迷惑そうな顔はしているもののここ最近は見せてくれなかつた笑顔を見れているのでまあいかといふ感じである。

「来るのは夜だっけ？」

「はい、そうです。セフイリア様も手伝ってくれると助かるんですけど……」

セフイリアの専属メイドであるクリスはセフイリアに意見をする。

クリスはセフイリアのメイドではあるが同時に友達でもあつた。

セフイリアが禁呪を使い自らを精霊とした頃からの友である。彼女は現在ではほとんど残っていない竜の血を持つ竜人である。その為、友としてメイドとして騎士としてセフイリアという友のために自分の生涯を使っている。

「わかったわよクリス。あなたに言われたら断れないもの

「ありがとうございます」

「いいのよ。つていうか本当はその敬語もやめてほしんだけどね」「

「仕事中ですので」

「堅いわね～。まあ、いいわ。何をやればいい?」

「はい、では」「ちりちり

そう言つて、クリスについていくセフィリア。

それを遠くで見守つている者がいた。

「セフィリア様の笑顔を初めて見たな…」

そう呟いたのは「ラムス国王」だった。

彼がまだ国王になる前、アカデミーを卒業し第一継承権を持つ者として王宮で過ごしてこたときのことだつた。

その日はなぜか迷うはずもない王宮で迷い、彷徨つてているといつ の間にか見たこともない庭園にいた。そこで会つたのが少女であり、セフィリアという初代の王妃であつた。

それからも何度も会つてきたが、この様に無邪気に笑つてゐる姿は初めて見たのだ。

いつもいつもどことなくつまらなそつこしていたはずのあの王妃が笑つてゐるのだ。信じられないものを見た気がした。

楽しそうに笑い、嬉しそうに踊る。

「ふむ。リリにいても仕方ないか…。仕事に戻るか」

そして、ラムスは戻つて行つた。

その後もセフィリアの嬉しそうな笑い声は響いていた。

+++ + ++ +

アカデミーでの授業も終わり、寮に戻る。

セリーナは夜のパーティーに着ていく服を考えなければと思ったのだが、よく考えたら制服以外の服はほとんど持っていない。

そう思つてみると、ミアがやつてきた。

「やつほ

「どうしたの？」

「着ていく服ないと思つてね。買いに行こ？」

「いいの？」

「あたりまえじゃない。それとも恥ずかしい思いをしたい？」

「ううん。ありがと」

「じゃあ、行こっか」

そうして、ミアとセリーナは服を買いに出かけた。

セリーナの背にあつたドレスを買い寮の部屋に戻つて着替えると迎えが来る時間になつていた。

ミアと一緒に寮を出ると既に迎えは来ていた。メイド服を着た女性がそこに立っていた。

「ミア・シア・カシミア様とセリーナ・エインフェリア様ですね」

「はいそうです」

「では、乗つて下さい。城まで案内させていただきます」

そう言われ馬車に乗る。

10分もした頃には城についた。

「着きました。案内しますので付いてきてください」

案内をしてくれる人の後ろを付いていく。

付いていく内にミアがセリーナに小声で話しかけた。

「こんな奥まで来たことないんだけど…。何度も来てるナゾにこんな奥にパーティーできる場所なんてないはずなのよ…」

「そうなの？」

「うん…」

そう話していると聞こえたのか案内人が

「大丈夫で」やこますので、心配なさらず付いて来てください」

「う…すいません」

「いえ、城のこんな奥まで連れてこられて不安になられるのも無理はないかと。ですが、問題ありませんので」

「分りました……」

メイドは優しく微笑む。

更にしばらく歩くと扉が見えた。

「いーです」

そうして扉が開いた。

開いたとたん少女がセリーナに向かつて飛び出してきた。

「お姫様」――――――――――

「！？」

セリーナは飛びつかれた人物をまじまじと見る。

第漆話 再会（後書き）

ようやく姉妹が再会しました。

ワンキング戦まで遠いなあ…。

第捌話 セフイリア初代王妃の歴史話（前書き）

遅れましたが投稿します。

〔2011/10/22〕変換ミスを修正

第捌話 セフィニア初代王妃の歴史話

「お姉さま、お久しぶりです」

セフィイの言葉を正面から聞くセリーナ。

状況が分らないセリーナは混乱し、どうすればいいのか分からな
いのか思考能力に限界を迎へ、完全に停止していた。

「お姉さま？」

セフィイが心配そうに尋ね。だが、セリーナは止まつていて答えない。
「い。

「はあ、まあ二ひなつちやつても仕方ないか。死んでるはずの私が
いるんだしね」

「アリヨー・何でいるのよー？」

突如としてセリーナは声をあげた。

「あ、お姉さま」

「『あ、お姉さま』じゃない！なんで生きてんのよー？」

「ええ？ いいじやないそんなこと。せつかくの姉妹の再会なんだか
ら喜んでよ」

「あの、ちよつとこーですか？」

話に割つて入ったのはミア。

「聞きたいことはたくさんあるんですけど時間も少ないんですから食べながらでも話しませんか？」

ミアの言葉に全員納得したのだった。

+++ + ++ +

パーティーを始めてすぐにしてセフイはセリーナのものに耳を離した。

「お姉さま～」

「セフイ！話を聞かせてもらひますよー。」

「いいよ～

「呑気に言わないでよ…」

「私もいいかしら？　どういうことなのか話を聞きたいですし、私はルークの婚約者として知つておきたいです」

「俺も参加した方がよさそうだな」

「うん。 そうだね～。 ジャア、お話ししましうか。 ゼノンを倒した後のベイ様の行動と私の行動を…」

そうしてセフィは語り始めた。 500年前のゼノン討伐より後の歴史の1ページを。

+++ + ++

「「」の国を信じられないって？ 何でよ？」

私は突然ベイに訳の分らないことを相談され困っていた。

「いや、 そうだな。 我が父の言葉を聞いてしまったのだよ」

「どなんよ?」

「分りやすくまとめると我が父とその側近の貴族たちは最初から私に近づくセリーナを魔王を討伐して帰つてきたら殺すつもりであつたと言つていたのだ。そして、その手間もなく済んで良かったと。そして、自分たちの国が魔王を倒すといつ大きな鉄化をあげたことで他の国からたんまりと謝礼金を受け取り、それをどう分配するかを話し合つていたのだ」

私は耳を疑つたわ。正直それは私の神経を逆なでするものよ?お姉さまを殺す?

「ふざけているのかしら?お姉さまを殺す?」

「ああ、そう言つていた…」

「ふうん。 そうなの」

「後、ゼノンの筆記からわかつたことも聞いてほしげ」

その後、私はベイの話を聞き続けた。話が終わると彼はこう聞いてきた。

「私はビーフしたらいい?」

迷わず答えたわ。

「ならみんな殺して、國を乗つ取ぢやえば?お姉さまを苦しめよつとした奴らに容赦なんて絶対にしちゃダメ。貴方がお姉さまのした

これが最善の答えだと私は思っていた。ベイはその言葉を聞いて戸惑っていた。だから、私はだめ押しをするためにもう一言を追加した。

「あなたは優しい人だよ。でもね、あなたが求めるのはどんな国なの？あなたの父さんのお父さんの求めるような国なの？違うでしょー…なら、迷わずに進みなさい。私はいつまでもあなたを支えてあげる。お姉さまが守りつとしたあなたをいつまでも守り支えてあげる。だから、迷わず突き進みなさい！」

その言葉にベイはうなだれていた顔をあげた。あげられたその顔には迷いや戸惑いといった色は全く見えず決意が見て取れた。

「ああ、わかった。なら、手伝ってくれないか？最高の国を作るためには」

「ええ、いいわよ」

そして、私達は革命を起こすために準備始めた。

+ + +

革命を成功させ国を立ててから一ヶ月私は自分の体に違和感を覚えていた。

何というか頭の中で何かがちりちりと鳴っているような感じ。

何とも言えない違和感。感じる」としかできないしへが起つているのかも全く分からぬ。

「もう何なのよ…」

思わずため息をつく。5日前ベイと正式に結婚することが決まつたし、これからもかなり大変になるつて思つていた。

でも、この違和感は何なのか。こんな時期に最悪のこと事が起きても困る。

「病気になんてなつてる暇がないんだから…」

そう思つていると何かが聞こえるよつた感じである言葉を感じた。

私はその言葉を口に出して囁つていた。

「我が求めしは失われし現在…。今ここにそのすべてを明かせ…。
現在を記せし禁断の書庫　セカンドライブラリ　…」

言葉を紡ぐヒセイに会ってきたのは一冊の本だった。

私はその本を開け読んだ。そして、すべてを読み終え理解した。

「セイヒーとなの…なら、私は…」

私はお姉さまを変えたという禁呪を迷わずについた。

その後私は精霊へとその身を変えた。守護をつかさどる精霊としてベイの作り出した国と契約した。

その後も、様々な問題を解決しつつ暮らじていった。

ベイの死とかもあって泣いたりもしたけど今まで生きてきた。

+++ + + +

「そんな感じの人生を送ったかな？」

セリーナは聞き終わるとセフイにあきれていた

「セフイ……。言ひちやダメなこと忘れてない……？」

「あ」

何を言つてはいけないんだ？」

「気にしないでいいよ。でも、ここで聞いたことば心の中のことど
めておいてくれるといいかな？」

「分りました。後、あなた様は初代王妃殿下でよろしくのですね？」

「そうだよ。まあ、お姉さまがいたなら、お姉さまがなつていた
とおもうけど」

セフイはそうこうと笑つた。

「それはいいわ。じゃあ、あなたはあれを使ったのね？」

「うん。ほかの人これ背負わせるわけにはいかないしね」

「そう……。なら、いいわ

そういうとセリーナは黙り込んだ。

その後もパーティーは進んだ。

+++ + ++

パーティーも終わりメイド達は片付けを始めていた。

「お姉さま

「どうしたの？」

セリーナはセフィィに話しかけられた。

「その、今日はすいませんでした……。」迷惑をおかけしたようだ……

「ん~。別に迷惑だなんて思っていないわ。正直に言つとベイの話とか聞けてよかつたと思うし、何よりあなたとまた会えたことがとても嬉しいの。もう一度と会えないと思つていたんだからね、セフィィ

「やつですか。今日は楽しんでいただけましたか？」

「ええ。 セリーナ、 セフイはこの都市から出られないの」

「うん。 私は精靈でこの都市の守護を司っているから……」

「セリーナ……」

セリーナはうなだれたよつとわへ一皿セフイに皿つた。

「じゃあ、 私はたまにこに来るよつとある」

「…？」のですか、 お姉さま？』

「ええ、 また会こましょ」

「はい」

その日はやうじて姉妹は別れた。

「あ、 そういう。 お姉さま。 競技大会頑張つて下さいね。 見に行きますか？」

「フレッシュヤーかけないで…」

セフイが別れ際に言つた言葉にひつぱりこれは負けられないな
と思った。

第捌話 セフイリア初代王妃の歴史話（後書き）

次回は闘技大会の予選を書きたいと思います。

第零話 ランキング闘技大会予選始まります（前書き）

すいません。投稿が遅れました。

第零話 ランキング闘技大会予選始まります

あのパーティーから早一ヶ月近くたつた。

ランキング戦の最高峰である闘技大会があと数日で開催される。かくいうセリーナも妹の前で恥ずかしい姿は見せられないと張り切つてはいるのだが、本気を出すわけにもいかずもつぱらどこまでの力を出すのかを考えながら一ヶ月を過ごしていた。

今は、ミアと一緒に食事を楽しんでいた。

「あと少しで始まるわね」

「そうね。今年こそルークに勝てるといいんだけど……」

「ルークはSランク2位なんだっけ？」

「うん。勝てたことがないかな……」

「数日セリーナはミアの愚痴をかなり聞いていた。

というのも、ミアは入学仕立ての頃からかなりの実力を持つていた。その為、第一学年が終わるときには既にAランク5位の実力を持っていた。もちろん彼女のランクをここまで引き上げたのは闘技大会である。

ルークもこの大会でAランク2位となっていた。

その第一学年の時の闘技大会でミアはルークと戦って負けている。ルークはミアに勝った後にSランクの人に善戦しながらも負けた。

次の年の闘技大会ではミアとルークは決勝戦で戦った。

ミアはこの時には呪文詠唱破棄を利用した無詠唱での操作の魔法をある程度のところまで完成させており、6本の槍でルークと戦つた。ルークも持てるすべての力を使い戦つた。結果はルークの勝利。この年もミアはルークに勝てなかつた。

ちなみにこの年の闘技大会で一人はSランク2位と3位になつた。Sランク1位は数十年前から欠番もいいところでSランクの最高位は2位であると今では考えられるようになつていた。

今年こそはとミアは思つてゐるのである。

ちなみにパーティが終わつた後の夜、セリーナはミアに呼び出されお願い事をされた。

『魔法の研究手伝つて』

もちろんセリーナはそのお願いに即うなずき、この一ヶ月で呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱の技術をほとんど確立させていた。操作などの簡単な魔法であれば完全に100%の高率で、攻撃魔法に関しても50%以上の変換効率をたたき出すまでに至つていた。

なので、これで今年こそはとミアは張り切つてゐるのである。

出来得るならばミアに勝たせたいという気持ちもあるがセリーナにとって今回の闘技大会は妹の期待がかかつている大会なのだ。

セフィイも本気のセリーナならばこんな闘技大会などでなくとも勝てるとわかつてゐはずだ。つまり、こうこうことだ。

『見ていて楽しめる戦いを』

勝ち負けで測ることのできない“モノ”を見せる。そういうことなのだ。

皆それぞれに思つところがあつてそれが闘技大会に挑んでいくのである。

+++ + ++ +

数日後、闘技大会本番。

闘技大会ではSランク5人とAランク10人は参加義務が課せられている。それ以外は全員自由参加である。まあ、Sランク1位は実質的にいないも当然なので14人が参加義務を課せられている。

もちろんこの大会に参加するのは戦闘系の学生ほぼすべてである。その為、最初から本選出場が決まっているS・Aランクの14人以外は予選をし本戦で戦う32名の内18人を決めるのだ。

予選はサバイバルである。全9戦でそれぞれで2人づつ選ばれる。今日からはその予選9戦が行われるのである。セリーナはこの予選からの出場である。

もちろん大乱戦になるのはいつものことで、本当に実力のあるものはこの予選でランク外だったとしても予選を通過してくる。だからこそ、この闘技大会はランキング戦の順位を上げるに持つてこの場所でもあるのだ。

だからこそ、会場の熱気はものすごいことになっている。

それを肌で感じながらセリーナは大会の開催式典が終わるのを今か今かと待ちわびた。

第零話 ランキング闘技大会予選始まります（後書き）

次回から闘技大会です。

第壱話 や選一回戦～三回戦（漫畫セ）

遅れています。
短いです。

第壹話 予選一回戦～三回戦

セリーナが出場するのは予選九回戦の為、現在セリーナはルーク・ニアと一緒に水晶モニターの前に座っていた。

魔法の力により映像を飛ばす魔法で水晶を媒体に映像を映し出しているのだ。

会場は一つなので「一回戦」とやらのだが、いかんせん時間がかかるそのため基本的に一日三試合やり、三日かけて予選を終わらせるのである。

今日は一回戦から三回戦が行われる。その為、やることもないの観戦することにしたのだがコロシアムの席は既につまってしまっていたので、こうしてモニターで見ることとなつたのである。

一回戦での本命と言われているのはBランク一位、マルセルス・スルト・エンブリオ（人間）。3代前の当主が聖騎士パラディンの地位を得て貴族となつた、比較的歴史の浅い家の長男で実力はそれなりでA～Bを行ったり来たりしている。第5学年である。

もう一人本命があり、こちらもBランク4位、クルック・クルクク（バー・ディア）。こちらは平民ではあるが国の創設時よりずっと国の騎士団に誰かしらを派出しており、歴史ある名家とも言われるほどの一族である。第4学年。

「たぶん一回戦で勝ち残るのは、マルセルスさんとクルックさんかな」

「そうなの？」

「ああ。Bランクでもトップランカーだからね。特にマルセルスさんは実力的にはAランクの人にも匹敵するほどの力は持ってるよ」

「そりなんだ」

ルークの説明にうなづくセリーナであつた。

そんなわけで、一回戦が始まった。全体で1000人近くの応募があり、予選は110人程度から2人選ぶ形になっている。

コロシアムはなかなか広いため、百人程度が入ったところで狭いことはないのではあるが…。

まあ、結論から言おう。一回戦の勝者はルークの言ったとおりになつた。

+++ + + +

一回戦である。

一回戦には本命と呼べるような人はいない。しいて言つならばCランク一位が本命と言えるかどうかくらいである。

一回の戦いで出るのは100人もいるのである。Bランクは15人。入ってこないこともあるのだ。

「まあ、今回は純粹に実力のある人を見極めるために見る形になるのかしらね」

「たぶんそうだろうな」

ニアとルークが言葉を交わす。

始まつた一回戦はなんといえばいいのか…、盛り上がりに欠けるような感じで幕を閉じることとなつた。

開始直後から微妙な感じの泥沼な戦闘となり、勝ち上がつたのはC・Dクラス一人ずつとなつた。

味気ない戦闘だったが勝者には盛大な拍手が贈られた。

「なんというか…。味気ないね」

「うん。華がないっていうか、盛り上がる要素がこと」とくなかつたかな。本命と言われる人がほとんどいなかつたしね」

「そうね。次に期待しましょう」

+++ + ++ +

三回戦では、Bランク7位と10位の人が活躍した。

この二人が常に多技を繰り出し、とても華のある戦いとなつた。

『本日はこれにて終了です。また、明日の試合でお会いしましょう』

第三話 予選四回戦～六回戦（複数モード）

遅れました。

第3話 予選四回戦／六回戦

本日は予選四／六回戦開催日である。

大きな問題もなく。セリーナ達は翌日を迎え、運よく席を取れたので今日は闘技場アリーナで見ることになった。

本日の本命はやはりBランクの選手に集まっていた。四回戦ではBランク2位と8位。五回戦はBランク3位。六回戦はBランク6位と9位。

妥当な判断だろう。やはり通過するほとんどの選手はBランクであると言われている。そのため、Bランク選手はほぼ全員無条件で本命と言われているのだった。

「で、今日はあまり期待できそうにないの？」

「そうだな。Bランク2位と3位の人が出る四回戦と五回戦はそれなりに見れるかもだけど、あまり参考にはならないかもね。どちらの人も結構冷静な人で勝てる程度の実力しか出さない」

「そうね。あの人たちに期待はできないわね。まあ、六回戦に出る6位の人と9位の人は仲が悪いことで有名だからつぶしあってくれるかもね」

「そりなんだ」

のんきな話をしながらセリーナ達は試合が始まるのを待つのだった。

+++ + + +

四回戦。やはり試合は予想通り進んだ。Bランク2位の選手が来た人を迎撃しているだけだった。問題は8位の人。

全くの不意打ち感覚だった。大きな範囲魔法をぶつ放したのである。これも予想はできていた。もともとBランク8位の選手は調子に乗りやすく、魔法に関してはかなり優秀だったのだ。

結果として放たれた範囲魔法で2位以外の選手が脱落そのまま試合は終了。

「正直あれはないと思つぞ……」

「そうね……。個人戦で負ける気はしないけど、やっぱり死屍累々になることが否めないわね」

「そりなんだ……。意外と楽しい勝負ができるそつな気がしてきた」

セリーナは胸を高揚させた。まあ、語り継がれる聖女様にとつてこの程度は造作もなくやれることであるのは確かなのだが……。

+++ + ++

五回戦はBランク3位の人の独壇場だった。

何というか、誰ひとりとして対抗できない状態で戦闘が行われたという感覚。

結果、Bランク3位は予選通過。残りは、Cランクで生き残っていた人らしい。

「無いな……」

「無いわね……」

「うん、無いかなこれは……」

感想という感想は得られなかつた。

+++ + ++

六回戦。白熱した。Bランク6位と9位が本氣で戦つたのだ。

まあ、結果としてその余波で他の選手は脱落。だが、終わるまであの間続いた白熱した戦闘は目を見張るものがあった。

「あれくらいいい勝負ができるといいな」

「ええ。でも、Aランク同士だともっと激しい勝負になるでしょう？」

「やうなの？」

「ああ、最悪フィールドが原型をとじめないくらいまで壊れるな」

「あはははは……」

セリーナは乾いた笑いをこぼすのだった。

『本日はこれにて終了です。また、明日の試合でお会いしましょう』

第参話 予選七回戦～八回戦

本日行われるのは第七回戦～九回戦だ。

セリーナが参加するのは九回戦であるためセリーナは準備で忙しい。

そして、今回の本命はやはり基本はBランクの生徒である。

セリーナは確かにちょっととばかり有名になってしまってはいるのだが誰も数少ない人達しか彼女が聖女と呼ばれている人物本人だと知らないので本命とは思われていなかつた。

そんなわけで始まる七回戦～九回戦だ。

+++ + + +

七回戦。Bランク10位以内の選手はほぼ出尽くした中Bランク選手でいまだ残っている選手11・13・15位の選手が七回戦に登場する。

まあ、言わずともわかるだろう。

泥仕合だった。

11・13・15位の選手の実力は伯仲してゐるわけではないが個人のやり方次第ではいくらでも変わるものだ。

結果は11位と15位の選手が勝ちあがつた。

内容は11・13・15位の選手が勝ち残りその後1時間近くに及ぶ泥仕合を展開した。

互いに牽制しながら攻撃を繰り返したためだ。

結局、体力の少なかつた13位の人気が倒れ試合が終わつた。

+++ + + +

Bランクから1~4位が出場。

聞く意味もなく、1~4位は勝ち上がりもう一人はBランクから勝ち上りのこととなつた。

+++ + ++ +

「次はセリーナが出てくるわね」

「そうだね。本気を出す気はないんだからナビゲーションもつだろ？」

?

「ああ?でも、本気なんて出したら結界を簡単に壊すでしょうね」

「それは、たすかに怖いよ。まあ、勝ちあがて来るのを楽しみにしよう」

「うひね」

ルークとミアはそんな会話をしながらセリーナの出場する九回戦の開始を待った。

第肆話 予選九回戦

第九回戦が始まる数分前セリーナは武器を確認していた。

空間から武器を出して戦うセリーナだがこの武器は別の空間に置いているものを持ってきているわけではない。その実は、その場で作り出しているのだ。

ではなぜ空間から取り出すのかだが、これはセリーナが作った武器を完全に再現し再び作れるようにするためだ。この空間にはセリーナが作り気に入った武器の設計図のようなものが登録されており、空間に手を入れると武器の名前と形が脳に現れ、それを選択し空間で再現し取り出すのだ。

セリーナが使っている武器すべてはゼノン討伐に赴く際に作り続け自分にあつた武器を作つてそれを魔力で作り出すことで無駄を省いたのだ。

ちなみにこの設計図に書かれているを取り出す際に変更することができる。設計図が変わるので問題はない。

だから自分で作った武器を刃引きしたものとしてとりだしたのだ。その場で取り出しても良かつたのだがルーク達に言われそれはやめた。なぜか？現代魔法ではそんなことできるはずないからだ。

そんなわけで、セリーナは一番使い慣れている武器である先端が垂直に曲がった大きな一本の大剣を刃引きし用意した。

「さあ、行こうかな。手加減はちょっとでいいよね？」

そう言つと、セリーナはクロシアムのフィールドに向かつて歩いて行つた。

+++ +++

『さあ、これで予選は最後となります。九回戦です。注目はBランク5位マルク・ロイドネス選手。Bランク12位ロルチエ・クラルドス選手です。順当にいけばこの一人が勝ち上がるのではないでしょうが』

ナレーターの声が聞こえる。セリーナが注目されるわけはないのでもルークとミアはちょっと苦笑した。

『この戦いで本選に進む32名が決まります。では、まいりましょう。』

そして、戦闘とは呼べぬ一方的な戦いが始まった……。

「まずは小さい奴から片付けるか。いい判断ね」

セリーナは始まつた瞬間に多くの生徒に囲まれた。まずは弱い奴から、これは単純な理由だろう。強い奴を倒すよりも弱い奴を削つていった方が明らかに楽だからだ。

背負つていた二本の大剣を手に取る。

「さあ、始めましょうか」

セリーナは左手に持つた大剣を水平に屈ぐ。

「【風の刃】！」
「【サイクロン
ウイングフレード】！」

振るつた大剣より風の刃が生れ、向かつてきた生徒を吹き飛ばす。

剣を屈いだ勢いをそのまま回転する。

「【大嵐】！－！」

生まれたのは小さな、だけど大きな風の本流。すべてを吹き飛ばす風の流れがすべてを吹き飛ばす。

セリーナは回転を止め、フィールドを見る。まさに死屍累々。参加していたはずの生徒の半分は今のセリーナの魔法に巻き込まれりタイアしていた。

コロシアムにいた一部を除いたすべての生徒が目を見開き、起こつた光景を疑う。

それはそうだろう。セリーナの見た目は明らかに10歳程度の子供の姿だ。そんな少女が一気に参加者の半分を削って見せたのだ。どうなるかなど自明の理だ。

参加していた生徒の目がいっせいにセリーナに向く。その目はこう物語ついていた。

『こいつは早めにリタイアさせないと

と。

次の瞬間、残っていた生徒のほとんどがセリーナに向かう。そんなことなど知らぬセリーナは再び魔法を使う。

「【大地震乱】！」
〔アースクエイク〕

瞬間、大地が大きく揺れた。地面に立っていたものは例外なく膝をつきバランスをとる。

そして、地面が裂けた。大きな断裂が生まれ地面が盛り上がりフィールドを破碎してゆく。

そして、すべてが収まるころに立っていたのは両手でからうじて数えられる程度の人数だった。

「へえ、これでも耐えられる子がいるんだ。なかなか鍛えてるみたいだね」

セリーナは感想をもらす。

前にも論じたことがあるが古代魔法の威力は魔力を込めた量に依存する。使い方の違いから様々に使われるが現代魔法のように最適化されているわけではなく、力押しもいいところだ。

だが、セリーナにとつて魔力は掃いて捨てるほどあるので無駄遣いしても何ら問題はないのである。

『な、なんということでしょうー始まつてたつたの数分ー参加していた生徒は今や数えるほどしか残つていません！しかも、その状況を作り出したのは少女のような女の子です！』

「……まあ、見た目は確かに子供だけじで……」

軽くふてくされるセリーナ。実際は20歳なわけである。見た目はいくら子供だからとはいっても傷つくものは傷つくのだ。

「まあ、いいかな。残つてる人もかかつてきなさい」

セリーナは残つていたものを挑発する。

結果は聞かずともわかるだろう。

Bランク5位がかるうじて生き残り、本選に出場するのはランク外のセリーナとBランク5位マルク・ロイドネスとなつた。

ちなみに観戦していたルーク達は『これはないだろ……』という風にセリーナのやりつぶりにびっくりしていたそうな。

第五話 本戦一回戦

予選も終わり本戦が始まった。とはいっても、一日でできるのは最大でも8試合、最低でも2試合程度なので一回戦がすべて終わるのに最低でも2日、最高8日かかる計算になる。

その為、試合自体が後の方となつているセリーナは本戦の開始日に思いつき寝坊し、ミアともども本戦開始のセレモニーに堂々と遅刻した。

と言つても、何かに影響があるわけでもなく、ただただ試合を見守ることとなる。ちなみにセリーナは一回戦最終試合である。

セリーナは順調にいけば決勝でミアかルークと当たることとなる。残念ながらルークとミアは（あくまで順調に進めばだが）準決勝で戦うことになっている。

ミアは決勝でルークと戦えないと悔しがっていたが、決勝でセリーナと当たるならいいかとすぐに機嫌を直した。

セリーナの一回戦の相手はBランク一位マルセルス・スルト・エンブリオ。聖女であるセリーナが負けることはないが実力があるものであるのは確かである。

そんなわけで本戦スタートである。

+++ + ++

第一試合

ルーキス・M・アインスフィア（Sランク2位） VS ポルポッチャ
ヨ・ラドクリフ（Bランク6位）

結果は言つまでもないがルークの勝利である。

ルークは魔法を使つまでもなく、剣の腕だけでポルポッチャに勝つた。

第二試合

リターナ・クルペック（Aランク4位） VS ロロイエ・グリブル
トン（Aランク7位）

勝つたのはリターナ。

ロロイエは完全な砲台型の魔導師でリターナはスピード重視のレンジャー形のスタイルだった。

ロロイエも別に体術が弱いわけではない。でなければAランク7位は取れないであろう。いかんせん相手が悪かった。スピード重視の軽戦士に体術が使える砲台型魔導師が勝つのはほぼ不可能である。

そんなわけで、リターナが勝ち上がった。

第三試合

ルンプラス・ルルクルス（Bランク15位） VS ラックス・ゲオ
ベルト（Dランク一位）

もちろん結果はルンプラスの勝ち。

地力が違いすぎて勝負にならなかつた。

Dランクで本戦に出れただけでも十分とラックス言つていたが、悔しそうだったのは言つまでもない。

第四試合

モロス・クルンペランド（Aランク9位） VS エクスペリア・マングーン（Bランク10位）

勝者・モロス。

これまた地力の違いがはつきりと出た形になつた。

第五試合

リューク・エルメロイ・クルワッハ（Cランク2位）VSマルクト・ランバラーム（Bランク11位）

勝つたのは何とリュークの方だった。

マルクトは魔法戦が得意な魔導師タイプだが近距離もなかなか強い。だが、計算違いだったのはリュークの速さと精密な狙撃だった。

リュークは遠距離戦を得意とし、 \exists と魔法を駆使し相手を倒すタイプだ。対しマルクトは近距離戦で稼ぎつつ大きな魔法を詠唱、一撃で仕留めるタイプだった。

相性の悪さから負けたのだった。

第六試合

クリット・クルククウ（Bランク9位）VSバリウム・バリリンス（Bランク14位）

勝者はクリット。名前の通り、クルック・クルククウの妹である。

勝因は一瞬の隙。クリットはアサシンタイプで一瞬の隙をつき倒

すことが得意で普通に戦闘をしつつ狙いを定め一撃で倒す。

そのため、攻撃が比較的大ぶりなバリウムは隙が出来やすく、開始5分でけりがついた。

第七試合

オーハン・リブロイエン（Aランク2位）VSミア・シア・カシニア（Bランク3位）

当然の如く、勝ったのはミア。

セリーナとの研究で完成した無詠唱魔法を使い操れるようになつた12本の槍を使い勝負したミアは、始まつた瞬間に相手を地面に槍で縫い付けた。そして、瞬時に近づき喉元に槍を突きつけ、降参を促した。

本当に一瞬のこととで何が起つたのかわからなかつた人が多かつた。セリーナはミアの使いこなしを見てうなづいていた。

そんなわけで勝者はミアである。

第八試合

ルルイエ・ロックリバー（Bランク2位）VSマルクド・ムルス（Cランク4位）

勝利者はルルイエ。

堅い防御をマルクドが突き崩せるはずもなく、ルルイエ得意の水魔法で終わった。

第九試合

マシュー・レイクリバー（Aランク10位）VSブッシュルズ・レントレンテン（Bランク3位）

何と勝利はブッシュルズ。

堅実なまでに攻めるマシューの攻撃を耐えつつ、少しづつダメージを与えて倒したのだった。

第十試合

モルモツ・フリューゲル（Bランク8位）VSリリアンナ・フォルシア・クリュレンツ（Sランク5位）

勝利者はリリアンナ。

AランクとSランクを何度も経てようやくSランクに落ち着いた彼女に予選で大量の選手を倒したような範囲魔法はもちろんBランク8位が使うような魔法で倒されるはずもなく一撃にて終了。

魔法の剣による大斬撃。

あつけない終りに観衆は少し不満を漏らしていた。

第十一試合

黄泉瀬神威（Sランク4位）VSエリック・ノーデルント（Aランク5位）

勝つたのは神威。

はじめはエリックの方が優勢に見えていたのだが、一瞬のうちに形勢が逆転。一撃にて戦闘終了。

誰もその一撃を見ることができなかつた。

第十二試合

ゴートン・レミントン（Aランク6位）VSクルック・クルククウ（Bランク4位）

接戦という接戦だったが勝つたのはゴートン。

接近戦は互角。勝敗を分けたのは魔法だつた。

クルックの隙をついて拘束魔法を発動。その後、大魔法を叩き込んだ。

第十三試合

ラヴィニア・グリュンヒルド（Aランク1位）VSマルク・ロイドネス（Bランク5位）

当然、ラヴィニアが勝利した。

時間はかからず、高位の魔法を発動したラヴィニアの一撃が直撃。あっけない勝利といえよつ。

第十四試合

ロロンヌ・ショビードゥジイ（Bランク7位）VSスルト・ラパンツェル（Bランク1位）

勝者ロロンヌ。

やはり地力の違いがはっきり出た。するとば終始ロロンヌに押され、反撃もできぬまま倒された。

第十五試合

ラスター・ブリュース（Aランク3位）ＶＳラングドマーク・タ
ワーバベル（Aランク8位）

勝者はラスター。

魔法の打ち合いになり、最後に大きいのが入りランドマークが倒
れ終了。

第十六試合

マルセルス・スルト・エンブリオ（Bランク1位）ＶＳセリーナ・
エインフェリア（ランク外）

言つまでもないが勝者はセリーナである。

勝負はセリーナがマルセルスに修行をつけるかのごとく行われた。

セリーナは攻撃を仕掛けるマルセルスの攻撃をすべていなし、攻
撃に対する評価を口に出し本当に修行を付けていたのだ。

マルセルスは納得しないながらもセリーナの言つてている事すべて
が事実であり納得せざるを得なかつた。

結局一時間かけてセリーナは修行の如く戦闘を終わらせた。

もちろん最後は一撃でだつた。

第陸話 本戦|回戦（前書き）

〔2011/10/22〕変換//スを修正

第陸話 本戦一回戦

本戦一回戦もすべてが終わり、本日から一回戦が始まる。一回戦ではそこまで大きな番狂わせもなければ普通に終わつたといえるだろう。

そんなわけで一回戦も着々と行いつつ。では、どうだ。

+++ + ++

第一試合

ルーキス・M・アインスフイア（Sランク2位）VSリターナ・クルペック（Aランク4位）

勝者はルーキ。

ルーキの魔法は普通の魔法とは違う。ハッキリ言つと悪いがルーキは魔法が物凄い下手だ。まともに使えないといった方がいいかも

しない。

だが、ルークにはそれを補つても余りある力がある。精靈召喚だ。

精靈たちに好かれる体質を持ち、たくさんの精靈と契約し、加護を受けているルークは魔法があまり使えない代わりに彼らに魔力を渡し精靈魔法を使ってもらうことで魔法を使つ。

精靈魔法は現代魔法と違い、古代魔法とほぼ同質の存在で一瞬で発動する。そんな魔法を連打されて守りきることもできずリターナがダウン。

そのまま試合終了。

第一試合

ルンプラス・ルルクルス（Bランク15位）VSモロス・クルン
ペランド（Aランク9位）

モロスの勝利。

BランクとAランクの差は大きかったのか始まって数分で片が付いた。

勝負は非常なのだ。差が大きければその戦いは簡単となりつまらないものとなるだろう。

まあ、仕方ないのであろう。

第三試合

リューク・エルメロイ・クルワッハ（Cランク2位）VSクリット・クルククウ（Bランク9位）

勝負は熾烈を極めた。

一回戦での戦闘を見るに、クリットは近づいての一撃で仕留めるタイプであり、リュークは距離を稼ぎ魔法と『でじわじわ責めつつ大きな魔法で一撃で仕留めるタイプである。

そんな二人の戦いである。クリットに近づかれ逃げるリューク。それが延々と続き、リュークによつて放たれた大魔法を避けたクリットが一撃を当て勝負がついた。

接戦というよりは泥仕合のような熾烈を極めた戦いだったが、見ていた観衆は満足であつたことだろう。

第四試合

ミア・シア・カシミア（Sランク3位）VSルルイエ・ロックリバー（Bランク2位）

見るも無残な戦いだった。

先刻の通り、ミアは効率100%の操作魔法を完成させた。その関係から、セリーナはミアに一つの魔法を教えた。

【剣舞】^{ブレイドダンス}。これは、操作の魔法を完全な形態で完成させたものだ。一度の発動で空間に浮かべた武器を完全に掌握し、操作する魔法である。

これを利用することにより逐一唱えなおさなくとも武器を操作し続けることが可能となる。

そんな魔法を使い勝負するミアの攻撃はルルイエの堅い防衛を徐々に削り続けた。耐え続けることもできず倒れたのだった。

第五試合

ブッシュルズ・レントレントン（Bランク3位）VSリリアンナ・フォルシア・クリュレンツ（Sランク5位）

リリアンナはAランクとSランクを何度も経てようやくSランクに落ち着いた。そんな境遇の為、ランクの差というものをしみじみと感じている。そのランクにいる人物がどの程度の実力を持ち、どのような攻撃を好むのかなどを徹底的に分析しつつ戦うのだ。

なお、リリアンナが得意としているのは魔法で編んだ剣による斬撃。範囲魔法にも匹敵するほどの大きさを持ちながら、迫つてくるそのスピードはまるで普通の剣を振るかのよつのだ。

堅実にダメージを稼ぐブッシュルズの攻撃はリリアンナの大斬撃

を前にしたら風前の灯に等しかった。

結果は言つまでもなく、リリアンナの勝利で終わった。

黄泉瀬神威（ランク4位）ＶＳゴートン・ヘミントン（ランク6位）

第六試合

黄泉瀬神威。唯一の東方からの留学生。その戦闘スタイルは異常なまでの速さと精密な攻撃を組み合わせた、本当の意味での一撃必殺。学内で彼女のスピードについていける者はいないとまで言われるほど速いのだ。と言つても、ニアの槍の操作やルークの精霊魔法を前にしたらそのスキルも通用しないのではあるが……。

しかも、彼女は小心者で臆病なのだ。その為、隙を見つけるのが下手で逃げ回った末によつやく見つけた隙に一撃を叩き込む形で今の地位にいるのだ。

そんな彼女の戦いは一回戦と同じ形での決着となつた。

拘束魔法を仕掛けようも高速で動きまわる彼女を前に、ゴードンは攻めあぐね高位の魔法を詠唱。結果、大きな隙をつくり、神威はその隙をついて一撃にて戦闘終了。

第七試合

ラヴィニア・グリュンヒルド（Aランク1位）VSロロンヌ・シ
ュビドゥビィ（Bランク7位）

ラヴィニアは現在最もSランクに近いと言われている人物である。完全魔導師タイプであるのにその強さは異常なまでに高く、彼女を倒せるものはそういなかつた。

とはいっても、現状として彼女はリリアンナと何度もSランクを争つた相手でもあった。だが、ラヴィニアはまだ第一学年。まだまだ、先があるので。

そんな人物にBランク7位程度では対抗できるはずもない。現代魔法なのに大量に連續して飛んでくる魔法に耐えきれずダウン。

ラヴィニアの才能を垣間見ることのできる一戦だったといえるだろつ。

第八試合

ラスター・ブリュース（Aランク3位）VSセリーナ・エイン
フェリア（ランク外）

ラスター・ブリュース。平民の中でも有名な一家でその実は首都において一番目に大きな商家の一家である。

そんな商家から出た天才児。剣も魔法も得意でかなりの強さにある。が、いまいちこれといった決定打がなく、いまいちな戦闘しか

できない。

そんな彼の戦闘スタイルを矯正することが今回のセリーナの目標だった。

セリーナは彼の癖といつか考え方が彼の成長を止めていると気づいた。

それは、自分の限界を定めること。ここがもう限界と思いこむことにより自分の最大値を定めてしまっていたのだ。

そこでセリーナはラスタートに攻め続けさせた。延々と続く戦闘にラスタートが諦めかけた時にセリーナは声をかけた。あなたってその程度なの？と。

結果、彼は怒り、セリーナにラッシュをかけた。セリーナはそれも受け続けた。ラッシュが終わり、ラスタートが倒れた時にもう一度声を掛けた。やればできるじゃない。と。

第7話 本戦三回戦（前編）

[2011 / 10 / 26] 変換ノスを修正

第漆話 本戦三回戦

本戦三回戦である。

一回戦も終わり、実力者が段々と分つてきた。今回もなかなか良い戦いとなるだろう。

+++ + + +

第一試合

ルーキス・M・アインスフィア（Sランク2位）VSモロス・クルンペランド（Aランク9位）

勝者は当然の如くルーク。

戦闘の内容はあつさりとしたもので、モロスの攻撃は一撃通らず、終始ルークのペースで進んだ。結果、耐えきれなくなつたモロスが倒れた。

第一試合

クリット・クルククウ（Bランク9位）VSニア・シア・カシニア（Sランク3位）

言つまでもない。勝利はニアだった。

走り回り逃げるクリットを追いかけるニアという構図がしばらく続いたのだが、クリットが少し体勢を崩した瞬間に11本の槍をクリットを囲むように地面に突き刺し逃げられないようにして降参を促し終了。時間的には待った方であろう。

第三試合

リリアンナ・フォルシア・クリュレンツ（Sランク5位）VS黄泉瀬神威（Sランク4位）

神威のスピードは学内では神速と言われるほどに早い。かといって、リリアンナの魔法剣の範囲は範囲魔法に匹敵する。

そんな2人の戦いは、時間がかかった。リリアンナの振り回す魔法剣を持ちまえの速さで避け続ける神威。だが、範囲魔法にまで匹敵する魔法剣の攻撃を避けながらではなかなか近付けない。

そんな戦いが崩れたのは一瞬のことだった。一瞬の隙をついて神

威がリリアンナの懷に潜り込んだのだ。だが、リリアンナも負けてはおらず、入り込んできた神威を蹴り飛ばす。しかし、一度近づかれたせいで魔法剣は使えず、普通の剣を使い接近戦をする羽目となる。

その後、綺麗な剣捌きで神威を退け続けたりリアンナだが、神威のスピードについていけなくなりダウン。勝者は神威となる。

とても見ごたえのある戦いであった。

第四試合

ラヴィニア・グリュンヒルド（Aランク1位）VSセリーナ・エインフェリア（ランク外）

何と大魔法が飛び交うひどい戦いとなつた。観客席には防御魔法が張られているものの大きな魔法を連発されかなり危なかつた。セリーナはラヴィニアに合わせた戦い方を選んだつもりだつたのだが結果として言えば大失敗だつたのだ。

防御魔法が壊れかけたのを見てセリーナは戦術を変更。速さを生かした戦法へと変え、瞬時にラヴィニアを倒した。

いやあ、失敗した。と思つてゐるのはセリーナだけで、観客としては高位の魔法をたくさん見れただけ収穫だつたのかもしれない。

第漆話 本戦三回戦（後書き）

次回からは戦闘描写をつけねば定です。
うまくできたらいいな……。（できなかつたら前回まどと回じにな
るかも……）

とつあえず、頑張ります。

第捌話 本戦準決勝第一試合

『本選もついに準決勝。残っているのはSランク2～4位とまさかのランク外選手！

さあ、今回も行きましょう!』

+++ + ++

準決勝第一試合。

ルーキス・M・アインスフィア（Sランク2位）VSミア・シア・カシミア（Sランク3位）

『さあ、始まります準決勝第一試合。対戦は入学当初から頭角を見せ前年度には既に今のランクにたどり着いていた一人、Sランク2位のルーキス・M・アインスフィア3年生とSランク3位のミア・シア・カシミア3年生です。

一回戦から三回戦まで共にその実力は完全には発揮されておりません。この戦いではどのような勝負を見せてくれるのでしょうか！

では、戦闘開始まであと数分。皆様、『期待してお待ちください』

「はは、そんなに注目されるとやうびらいんだけどね」

「そうね。でも、一言いいかしら?」

「ん?なんだい?」

「今日は負けないわ。今日こそ勝つてみせる」

「そりか。なら、俺も負けられないな。いい勝負をしようか」

「ええ。手加減とかしたら容赦しないわよ」

「それはお互い様だよ。おっと、時間みたいだな」

『『それでは、始まります。
レディー、ファイ!』』

戦闘が始まった。

まずはミアが古代魔法【剣舞】ブレイドダンスを発動。ほぼ同時にルークが剣精靈ヴァルアを召喚。ミアは瞬時に槍を数本飛ばすが剣によつて弾かれた。

次に動いたのはルーク。ヴァルアに指令を出し、ミアを追撃すると同時に楯精靈セフイルを召喚。防御を固めつつ、剣精靈での攻撃を実行する。だが、ミアも負けてはいない。ヴァルアの攻撃を完璧に捌き攻撃を与えつつ、ルークへの追撃をする。

攻撃を与えつつも、耐えきれなくなつたヴァルアは後退しルークのもとへと戻ると、ミアはそのまま追撃。ルークは戻つてきた、ヴァルアを武装形態にし、剣を手に取る。すでにセフィールも武装形態である楯の状態になつてゐる。そこへと攻撃を加えるミアだが、ルークは飛んできた槍を軽く剣で振り払う。振り払つた勢いのまま突っ込んでくるミアに袈裟切りで剣戟を加える。大ぶりなそれを受けたミアだが、あまりの威力に後退を余儀なくされ仕方なく下がり、膠着する。

「やつぱり、堅いし一撃が重いわね」

「そう言ひついアこそ、その速さは一体なんだい？少しでも気を抜いたらやられそうだ」

「ふふ、大会が終わるまで秘密よ。槍よ踊りなさい！」

再び槍が舞い踊る。ありとあらゆる方向からミアの槍がルークに攻撃を仕掛ける。ルークは剣と楯を使い飛んでくる槍を防ぐ。防ぎながらルークは土精靈ドリアードを呼び出す。

「ドリアード！ クエイク！」

『分ったわ』

ミアのいるあたりの地面が砕け割れる。ミアは慌てて、空中に逃げるがそこへさらにルークは追撃をかける。

「ヴォルト！ サンダー・ボルト！」

『おうー』

ニアへと雷が迸る。ニアはそれを見て瞬時に槍に命令を出す。

「足場に！」

その命令に従いニアのもとにあつた一本の槍を足場にその場から脱出。雷は槍に当たり、槍は黒く焼け焦げ使い物にならなくなる。ニアの槍は後10本。再び、手元に一本を呼び寄せ、残りの八本も一度自分のもとに呼び寄せる。

その間にルークは氷精靈フロストを呼び出す。

「フロスト・フリーズ！」

『了解』

瞬間、ニアの足元が凍りつき始める。ニアは、すぐさま退避し、数本の槍を飛ばす。当然防がれるがそれを見越し、ニアは魔法を発動していた。

「【噴き出すは炎。応ずるは暗黒。すべてを飲み込み燃える黒炎よ。その全てを飲み込みて彼の身を焼け。全てを喰らいて我が敵を討て！…ゲヘナブレイズ！…】

ニアのもう一つの切り札融合魔法。二つ以上の属性を持たせた魔法の発動は本来出来ないのだが、それを発動の段階から組むことで発動可能としたのだ。

ゲヘナブレイズは炎と闇の力を組み合わせた魔法。能力は発動段階で込められた魔力が尽きるまで焼き尽くす魔の炎を発生させるこ

と。制御により自身へのダメージは消せるが、制御 자체が難しい為簡単には消すことはできない。作った本人であるミアですら使うのを躊躇うほどだが、今回の場合は相手の攻撃を限定させられるうえに魔法すらも燃やしてしまったため聖靈の使う魔法を抑えるためにはベストな選択と言える。つまり、ミアは接近戦を挑むために魔法を封じたのだ。

だが、ミアは公式な場としては初めて融合魔法を使った。融合魔法自体の構想は昔からできていたのだが、それを確実なものとしたのはセリーナがいたからこそなのだ。それを知らないルークはすぐさま黒い炎を消すために水精霊ウンディーネを呼び出す。

「ウンディーネ！ ハザードウォーター！」

『うん…』

すぐさま大量の水が降り注がれる。だが、降り注いだはずの水は逆に炎の勢いを強くしただけで終わる。ゲヘナブレイズの黒い炎は魔法を喰らうとその魔力を吸い勢いを増すのだ。その為、炎は勢いを増し精霊すらも燃やしにかかる。それを感ずいたのかウンディーネやほかの召喚されていた精霊達は自分から消えていった。残ったのは、武装化してゐるヴァルアとセフィールのみだった。

『ルーク気を付けなさい。あの黒い炎は何かおかしいわ』

『うん。あの炎には絶対に触れないで』

『分った！』

ルークは黒い炎がない空間へと走る。そこにミアの槍が飛んでき

た。

「ぐつー。」

かろうじて防ぐルーグ。ミアはすぐさまルーグに追撃をかける。ルーグは飛んできた槍を黒い炎の方へとはじき出す。その為、槍は炎の中へと消えていく出でてくることはなかつた。飛んできた槍をすべて弾き、炎の中に放り込み、飛んできた方を見据えると、ミアは槍を一本持ち接近戦を挑もうと走つてきていた。

「ミアーー！」の炎はなんだ！」

「今、言わなきゃならないかしら？」

そう言い、接近戦が始まる。

一槍と剣と楯の勝負。ミアは槍の連撃を仕掛け、ルーグは楯で防ぎつつ剣で確実に攻撃する。黒い炎は絶えず燃え続けるため、魔法戦が繰り広げられることはない。しかし、二人の接近戦は魔法戦にも劣らないほどに過激に行われた。

ミアが槍で突けば、ルーグがすかさず剣で弾く。弾かれたと同時に槍を薙ぐように振れば、それを防ぐように楯が配置されすぐさま剣が迫つてくる。それを体を反らし避け、再び槍で薙ぐ。薙がれた槍を剣で防ぐと楯で突撃をかける。それを槍をクロスさせ防ぐと再び攻撃を繰り出す。

まさに熾烈を極めた戦いが繰り広げられた。そんな接戦が一時間も続いたが炎は消えず燃え続ける（実はミアが魔力を流し込んでいた）。そして、決着の時が訪れた。

ミアが槍を薙ぐが体制を崩し、その隙を狙いルークが槍をはじき出す。残り一本となつた槍で応戦するミアだったが、ルークは楯で槍を弾き、剣を喉元に突きつけた。

「参つたわ」

『決まつた――――――――――！勝者、ルーキス・M・ Ainスフィア3年生・素晴らしい戦いをしてくれた両名に盛大な拍手を』

盛大な拍手が一人に送られる。

『トルコ＝ニア・シア・カシニア3年生。この炎は燃したら消えるのでしょうか』

「あ、忘れてました……。しばらくすれば消えますが今日は整備に回して明日改めて第一戦をした方がいいと思うわ」

『そりなんですか？では、そのようにさせていただきます。では、皆様。明日の試合もお楽しみに。』

以上して、本戦準決勝第一試合は終了した。

第捌話 本戦準決勝第一試合（後書き）

第一試合も載せるつもりだったんですが時間がかかりそうなんで割ります。

第九話 本戦準決勝第一試合（前書き）

〔2011/11/19〕変換マスを修正

第九話 本戦準決勝第一試合

『ええ、本日は先日行われるはずだった準決勝第一試合を行います』

とまあ、そんなこんなで本戦準決勝第一試合始まります。

+++ + ++

準決勝第一試合。

黄泉瀬神威（ランク4位）VSセリーナ・エインフェリア（ランク外）

『準決勝第一試合。選手は神速の二つ名を持ちその速さは学園一とまで言われるランク4位黄泉瀬神威^{よみせ}_{かわい}3年生となんとランク外からここまで勝ち上がりその全ての試合で一度も傷すら負つていないセリーナ・エインフェリア選手だ――――!』

その言葉にセリーナは苦笑いを浮かべつつも試合が始まるのを待

つ。

「や、そんなことないです。私なんてまだまだです」

そう言っているのは神威。前述のとおり、神威は気弱で臆病な性格をしている。そのため、どんな言葉を聞いてもそんなことないと思ってしまう。調子に乗るよりはいいのかもしけないが、逆に謙遜どころか自分の否定がここまで行くとどうしようもないように思えてくる。

「ねえ？」

「は、はい？ わ、私ですか？」

「あなた以外誰がいるのよ……。何でそんなに弱気なのよ？」

「え、あの、その……、何でと言わわれても……」

「自身を持ちなさい。あなたは間違いなく強い。私だって苦労するほどね」

もちろん嘘である。セリーナにとつてあのスピードは対応できるレベルなのだ。もちろん、簡単とは言わないが。

「え、その、それはどうこう……」

「試合を終えたら教えてあげるわ。あなたは間違いなく必要な人材だしね」

「？」

神威が疑問符を頭に浮かべている。もちろんあくまでそんな風に見えるだけであって、実際にはそんなことはないのだが。

(この大会が始まつてからどことなく視線を感じる。というより、妙な魔力が渦巻いてる。下手に本気を出すわけにはいかないかな) セリーナはこの闘技大会が始まつてからずっと妙な視線を感じていた。それが、どのようなものか見極めようともしていたが、尻尾を見せないためそれも難しい。

(とにかく、何かが暗躍しているのは間違いなさそつだし、そうしたら間違いなく戦力がいる。私だけで出来ないことはないけど、かなり難しいしね。

とりあえずは、この子を本当に強い子に変えてあげないと

『では、試合を始めます。
レディー、ファイ!』

瞬間。神威の姿が消えた。セリーナはすぐさま持っていた大剣(今使っているのはいつもの大剣ではなく刀身がまつすぐでたくさんの文字が刻まれている)を後ろに向ける。その速さは普通の速さではなかつた。

「ふへ?」

神威はあっけにとられた。最初から全力を出して自分の出せる最大の速さで後ろに回り込み迫つたのにも関わらず目の前の少女は何事もなく対応したのだ。だが、神威も負けてはいなかつた。異常な速さで振るわれた大剣を一本の短刀をクロスさせ防ぐ。

「へえ。これに対応できるんだ。性格とは違いかなり強引な攻めをするのね」

「な、何で？この速さに付いてられるはずないのに……」

「簡単よ。だつて、あなたの速さの出し方さえ分かつてれば対応策はないことはないもの」

「え？私の速さの出し方がわかる？」

「ええ、今の一瞬さえあれば十分だもの」

セリーナは神威が消えた一瞬をしっかりと見ていたのだ。そして、その一瞬からその速さを可能にしている方法と対応策を紡ぎだしたのだ。

「嘘……」

神威はその事実を受け止められなかつた。この学園に入つてからの三年間で自分の速さに対応できるものはいなかつたのだ。ルークとミアはきちんと防御した上で止まつたところを的確に攻撃し神威を倒している。つまり、神威の速さの術は誰にも暴かれておらず、対応もできていないのだ。言ひなれば、防御に徹しきんと隙をつく以外はないのだ。

だが、セリーナは違つた。どのようにその速さを実現し、どうやつて防げばいいのかすら暴き、神威の必殺の一撃を完全に防いだのだ。

実はこれには裏がある。セリーナはわざと神威に打ち込まれたのだ。前の試合をしっかりと見ていたセリーナだが、その速さがどのように生み出されているのかは理解できなかつた。その為、最初から打ち込ませるためにわざと大剣を選び、なおかつ、打ち込んでは来ないだろうと見えるように態^{わざ}と力を抜き神威に打ち込ませ、その速さを見極めたのだ。

「なら試してみなさい」

神威はその言葉と共にセリーナに再度突撃を仕掛けた。

セリーナは腰にさしていた短剣を引き抜き、神威の突撃を防ぐ。

「まず、その速さの秘密ね」

セリーナは神威にしか聞こえないように小さな声でしゃべる。もちろん、その間にも神威は何度も神速の攻撃を仕掛け続ける。

「まずは自分の体に薄い空気の層を作つて身体保護を作り出す。これで、怪我はないわね。

次に、身体強化。しかも、符術による簡易式。発動は任意で一瞬で発動が可能。これで蹴りだす瞬間に使ってスピードを作り出す。最後に、風の魔法によって速さを倍加させる。これによってスピードは蹴りだしたときの数倍で、この間、僅か一秒にも満たないわね。

これで、突撃を仕掛ける。まあ、種が割れれば簡単ね。だって、風の魔法で常に自分を押しているのだもの。風の流れさえ読めれば対応はできる

「神威の動きが止まる。」

「あ、あなたは何者なの？今まで、誰一人この方法を見破れた人はいないし、対応して見せた人もいない」

「試合が終わつたら教えてあげる。断言するけどあなたのその術、間違いなく一級品よ。こここの教師だつてそのスピードで3つの術式を発動なんてできないもの。だから、自身を持ちなさい」

「わ、分つたわ。わ、私の術を見破れる人からの言葉だもん」

セリーナはその言葉にうなづく。

「じゃあ、最後の講義ね。あなたの方法は確かにすごいけど、非効率的よ。もっと効率的にその速さを実現できるわ」

セリーナはそう言つとある術式を唱える。もちろん、古代魔法なのだ。

「【電光石火】ソニックムーブ」

瞬間、セリーナは神威の後ろにいた。

「速さを追い求めた人が作り出した術式よ。純粹に速さのみをあげるならこっちの方が明らかに効率がいい」

「は、はい」

「降参するかしら？」

「う、うん。だってこれ以上やつたってたぶん勝てないから」

神威がそう言つたことにより決着はついた。

『決まつた――――――！昨日は2時間近く時間をかけた戦いでしたが、本日はたつた数分の攻防でした。ですが、やはりここまで来るだけあつてす』『い戦いを見せてくれました。両者に拍手を――――――。』

盛大な拍手が一人に送られる。

「あ、今日の夜私の部屋に来てもらえるかしら?」

「わ、私ですか？」

「だから、ここにはあなたしかいないでしょ。まあ、いいわ。お願
いね」

「分りました」

」うして、準決勝第一試合は終わった。

第九話 本戦準決勝第一試合（後書き）

何でこんな簡単な勝負に……。もつと長くてきつい勝負になるはずが、セリーナの強さを考慮して書いていたら、明らかにセリーナが強すぎる事態に。まあ、実際に強いわけですしいいんですが……。とりあえず、これで次は決勝戦です。いい勝負をさせてあげられるといいな……。

第拾話 決勝前夜の話

「え？ それほんとなんですか？」

「ええ、でも、口外は禁止よ」

「い、いえいえ。そもそも、私あんまり友達とかいないし話す人もいないです……」

セリーナと神威の準決勝の終わった夜。神威は言われたとおりにセリーナの部屋に訪れていた。神威が部屋に入ると、セリーナだけではなく、ニアもいたので若干うろたえ

た神威だつたが、セリーナが気にするなといつと本当に気にしなくなつた。裏話的に言つと、セリーナが精神安定の魔法を使って落ち着かせたのだが。

それで、やつてきた神威にセリーナは自分の正体を明かした。本来なら、叫んでしまうような性格をしてる神威だが、先ほど言つたようにセリーナが精神安定の魔法を使つ

ていたため、落ち着いた反応をした。

「そう。でも、今日からは私達が友達になつてあげるわ。ニアもいわよね？」

「ええ、でも、あなたの目的はなんなわけ、セリーナ？」

「戦力がいるの。まあ、理由は言えないけれどね。というか、まだ、

正確なことはわかつてないの。だから、ちゃんとわかるまではいつになつたら教えるわ

「え、えっと。じゃあ、私をパーティーに入れることかな？」

神威の質問に答えたのはもちろんセリーナ。

「当たり前よ。あなたは育てがいがあるし、戦力には申し分ないわ」

「伝説の聖女様にそつと言われるとちょっと自信がわいてくる」

「言つたそばから……まあ、いいわ。取りあえず、口外しないようにな。国のトップは私が生きていたことは知ってるけど、公表する意味がないってことで隠してるから。」

まあ、私自身が戦力やらにされるのがいやなだけだけど

その後、セリーナは、神威・ミアと一緒にお茶を楽しみ。その日を終えた。決勝戦は一日置いてからだ。

とある宿屋で、メイド服を着た少女と執事服を着た少年が話し合っていた。

「あの少女がキングベヒーモスを倒した少女ですよね？」

「ああ、そうだね、姉さん。彼女で間違いないよ。魔力波動が一致してるし間違いないはずなんだけど……」

「実力を隠しているだけなのか、魔力波動が一致してるだけの別人か」

「それはないよ。魔力波動が同じ人物なんて世界中探して一人いれば奇跡のレベルだ。一卵性双生児ですら違うことが多いというのに」

「だよね。じゃあ、間違いなく彼女よね？」

「ああ、でも、あの少女がどうやってキングベヒーモスを倒したのかが全く分からぬ」

「考へても仕方ないのかしら？」

「そうだね。だから、今は主から仰せつかつた計画を進めないと」

「そうね、そうしましょつか」

そして、夜は更けていく。彼らが何をしているのか明らかになるのは大会が終了した後である。

第拾話 決勝前夜の話（後書き）

かなり遅れましたが最新話です。

というか、あれ？短い？それなりに話を作る予定が必要なことを書いてたら、というか必要なことしか書いてない。

とりあえず、次回は決勝戦です。

第拾七話 本戦決勝戦（前書き）

〔2011／11／19〕変換ミス等を修正

第拾壹話 本戦決勝戦

『本選もついに決勝戦。今大会もいよいよ終わりを迎えます。では、参りましょ』

+++ + ++ +

決勝戦。

ルーキス・M・アインスフィア（ランク2位）VSセリーナ・エインフェリア（ランク外）

『決勝戦！学内ランク現最高位とされるランク2位のルーキス・M・アインスフィア三年生に対するは、ランク外から勝ち上がるもその戦闘センスは、あの神速の一つ名を持つ黄泉瀬神威三年生を絞つたの数分で倒す実力の持ち主、セリーナ・エインフェリア三年生だ！』

「セリーナ、君に勝てないのはわかってるけど自分の全力を持つて

戦わせてもらひよ

「謙遜しないで、あなたの実力は軍でもトップに入れていレベル
よ」

「勝てないのは事実だろ？」

「さあ、どうかしら。全力で来なさい」

「ああ」

『では、試合を開始します！両者準備はよろしいですね？』

「ああ」「ええ」

『両者の確認も取れました。では、始めます！
レディー、ファイ！』

始まつた瞬間だった。ルークはすべての精霊を召喚し、武装化した。

様々な武器の形態を取る精霊達。セリーナが視認できただけでも、剣に槍、鞭に斧と様々だ。もちろん櫛になるものもいれば鎧になっているモノもいる。

「あら、本当に全力で来るのね」

「もちろん」

「それ重くないの？」

「ないな。精靈に重さの概念はほとんどないからな。物質化（武装化）しても重さはほとんどない」

「そう、なら私も全力でいかせてもらひつわ。できる限りだけど」

「う言ひつと、セリーナは空間を割る。出てきたのは剣の山。それが空中から降り注ぎ、剣の森とも呼べるようなフィールドが完成する。

「なー?」

「私の全力を見せると言つたわ。いちいち出しなおすのも面倒だから今まで作つたほぼすべての剣を出したわ。使いたけてば使うといわ。まあ、あなたには精靈達の武器があるし、使う必要は感じないけど」

「……そりですね」

ルークは絶句する。魔力による物質生成は魔力が切れれば消える。だが、その維持に必要な魔力だつて馬鹿にはならないのだ。それを軽々とやるセリーナがやっぱり規格外なのだと再確認した。

セリーナは近くに刺さつている剣を抜くとルークに突撃を仕掛ける。もちろん、ルークも応戦するために剣精靈が武装化している剣を引き抜き、楯を構える。

そのままセリーナは袈裟切りに剣を振る。それを楯で防ぎ剣で攻撃を仕掛けるルーク。しかし、セリーナはあり得ない行動を起こした。防いだ楯にぶつけた剣を使い体を浮き上がらせそのまま剣を捨て

て、空中に逃げたのだ。

「んなー?」

「何の為にこの量の剣があると思つたの?」

もう言つてセリーナは着地した場所の近くにある剣を一本引き抜き、再びルークに攻撃を仕掛ける。

「つー

イフリート! 火炎激!

『おつー!』

炎が生れ、セリーナへと迫る。それを、剣を軽く振るつただけで消してしまつセリーナ。

そのままの勢いで、ルークに切りかかるセリーナ。今度は二つの剣を使った大斬撃。それを楯ではなく背にある斧を手に取り防ぐ。防いだと同時に斧を大きく振り攻撃を仕掛けるが、まるで、背に羽根が生えているのではないかと思えるほどに空中を駆け避けてしまうセリーナ。ここまで、一分も経つていない。

「さすがね。防御が堅いにもかかわらずちやんと攻撃まで仕掛けてくる。やりづらい

「セリーナこそ早過ぎるし、攻撃が変則的すぎる。対応できてるのが奇跡みたいに思える

「あら、そう? でも、これで終わりじゃないんでしょう?」

セリーナは持っていた一本を放り捨て、近くにある大剣を手に取る。

大剣を振りかぶるセリーナ。防ぐために再び盾を手に取るルーク。だが、その一撃は簡単には防ぎきれず、防いだには防いだが、勢いのまま後ろへ吹き飛ばされる。

その後も素早く動き的確に攻撃を加えるセリーナだが、一撃一撃の威力が小さくなってしまう。大剣を使えば確かに威力の大きな一撃を放てるが少し遅くなってしまう。逆に普通の剣ならば威力不足。かといって、本気の本気で攻撃すれば抜けないことはないがルークに大きな怪我を負わせかねない。

逆にルークはついていくのがやっとだった。セリーナの正体を知っているからこそ、彼女が全力ではないのはわかっているが、かと言つて簡単にどうにかできるわけではない。剣が乱立しているおかげで動こうにも移動しづらいし、逃げることに意識を向けてしまえば一気に勝負を決められる。やれるのは、その場からあまり動かず、確実に攻撃を防ぎ、攻撃を加えられれば加えるというスタイルのみだった。

一方的な勝負ではあるが、こんな状況で、耐えているルークは十分すごいのだ。

試合が動いたのはそれから10分後。このままでは打開できないと考えたルークは乱立する剣をどうにかしようと考えたのだ。

「ドリアード！ クエイク！
ウンディーネ！ タイダルウェイブ！」

『分ったわ』『うん！』

地震により突き刺された剣を地面から抜き、水で流したのだ。もちろん、発動と同時にルークが空中に飛ぶことで、セリーナを巻き込めたらと考えたのもある。

全ての剣は流され、スタジアムの端に行くと消えていく。どうやら、セリーナがこれ以上は無駄と思つたのだろう。

水が引くと、ずぶ濡れになつてゐるが無傷のセリーナが出てきた。

「やるじゃない」

そう言つて、セリーナは魔法で服を乾かす。一瞬で乾く服。

「じゃあ、私の好きな獲物を使わせてもらいましょう」

そう言つて取り出したのは、先端が垂直に曲がった大きな一本の大剣。

「ディシオムって名前よ。まあ、名前つける意味なんてないのだけど。これには魔法を弾く効果があるの」

「なー？」

「つまり、あなたの精靈達の魔法をあなた自身に跳ね返すことも可能つてこと。無駄撃ちすれば自分を傷付ける結果になるわよ？」

そう言って、再び攻撃を仕掛けるセリーナ。セリーナの実力を考えれば魔法は危険だと考える以上、ルークは接近戦を甘んじて受けられない。

だが、大剣を高速で操り攻撃を加えてくるセリーナに対応しきれるわけもなく、徐々に削られていくルーク。

「くっ……」

「どうしたの？ 恐れてたらどうにもならないわよ？」

更に高速の攻撃を繰り返すセリーナ。

「敵の言葉をそのまま鵜呑みにしてしまうのはダメよ。私が嘘言っているとは思わなかつたの？」

その言葉に、ルークは愕然とする。その通りなのだ。結局のところ、いくら相手がセリーナだつたとはいっても、ここは戦場だ。敵の与えた情報が嘘である可能性は高いに決まっている。

「皆！」

ルークは精霊の武装化を解いた。

「何？ 魔法を打ち合ひおひつと叫ひつの？」

「ああ、俺は結構限界なんだな。悪いけど、付き合つてもうひつ

そういう、セリーナから距離を取る。

「皆、【虹の閃光】！」

ルークが使える最大の攻撃。精靈すべての力を砲撃魔法とし打ち出す魔法。

「いいわ、受けましょうか。【—すべてを守りし絶対の盾】」

シールド・オブ・アイギス

実は、これは一全てを記せし禁断の書庫ロストライブラリーに記されているものの力を反映させた楯だ。全てを記せし禁断の書庫から発動させた方が能力が高いのだが、古代魔法として発動することにより全てを記せし禁断の書庫を発動せずとも瞬間的に発動できるためセリーナが愛用している魔法なのだ。

虹の閃光が魔法の盾にある。打ち合にきしむ魔法の盾。

だが、虹の閃光は盾を打ち破ることなく消えた。そして、ルークは魔力をほぼ使い果たし、倒れた。もちろん、地面に倒れる前にセリーナが支えた。

「はは、やつぱり敵わないか……」

「これだけできれば十分よ。で、どうする?まだやる?」

「やめとく。もう立つのも限界だ。皆もいこよな?」

「うなづく精靈達。

「ああ、俺の負けだ」

『な、何とーーー優勝はランク外のセリーナ・エインフニア三

年生だ――!』

司会者の声が響き渡る。盛大な拍手も送られてくる。

これで、大会も終わりかと考えていたセリーナにまさかの言葉が聞こえてきた。

『ええ、今しがた教師から紙を渡されました。え、読めってことですか? 分りました。』

優勝者、セリーナ・エインフェリア。あなたにUランク1位の生徒が戦闘を申し込んでいます……。Uランク1位! ?』

会場が大きな声に包まれる。

「間違いなく。一位つてあの子よね……。暇とか言って通ってる間の話なんだらうけど」

『と、言つわけでエキシビション戦です。セリーナ・エインフェリア三年生とUランク1位の生徒の戦闘です。

試合は昨日と同じく一日開けてから行います。では、皆様ご期待を!』

司会の人物がある。その言葉にセリーナはため息をつくのだった。

第拾壱話 本戦決勝戦（後書き）

セリーナが戦うと決着が速くなつてしまつ。いくらなんでも補正かけすぎたかも……。

とりあえず、大会戦は終わりました。次回はエキシビション戦です。戦闘相手は分りますよね？では！

誤字等の報告。感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2295s/>

翼を失った竜と血塗られた聖女

2011年11月20日09時37分発行